

隻腕の騎士、浮遊城に立つ

食卓の英雄

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

劇場版プログレッツィブを観て感激し、その帰りのカラオケで独白を歌った時に降りてきた産物。

## 目次

ベデイヴィアニベデイヴィエール	1
βの終わり	7
隻腕の騎士、浮遊城に立つ	14
電子の世界の鎮魂歌	22
SIDE：B その次の日	27
眠りとは、安寧を享受するべきものである	37
星屑の夜のカープール	43
待つべき者は友	50
ザ・ビフォー・ザット	55
いざトールバーナ	61
攻略会議——二人の騎士	68
キミ（アスナ）とワタシ（ミト）。私（深澄）とあなた（明日奈）	76
ゴード・トウ・ピース	83
疑念の解消	90
獣頭人身の王者	97
曇りなき意志	105
砕けぬ剣（思い）	113
剣士よ、往け	121
序章終幕	129
日進月歩	137

## ベデイヴィアニベデイヴィエール

「産まれたぞ……」

「いや待て、あれを見る」

「ああ、そんな……」

「何てこと……!」

磨かれた白亜の天板に大人が集う。その中央に寝かせられている女性は青い顔で滝の様な汗を流し、渦中の人物を胸に抱く。

皆が悲嘆にくれている原因のそれは、とある一人の赤ん坊だ。

おぎやおぎやあと元気に生誕の産声を上げる男の子は、透き通るように輝く銀の頭髪を生やし、僅かに開いた瞳からは柔らかな翡翠が覗いている。

「ああ、ありがとう……、ありがとう……! 私の、私の愛しい子……!」

母親が感涙を流しながら、感謝の意を告げる。

腕の中に収まるか弱き一生命。その幼子には右腕が無かった。

欠損している、のではなく元から生えていないのだ。故に傷跡は無く痛々しさは感じさせないが、これからの将来を考えると顔を顰めるのも納得である。

集う親族が思いを馳せ、憂いている中で、母親だけは万雷の喝采を上げる。

天よ見よ、これこそが我が子なのだと言わんばかりに抱え上げ、ありったけの感情を込めて語りかける。

「貴方の名はベデイヴィア。『ベデイヴィア・ベドリバント』。ベドリバント家の祖先、ベデイヴィア様の名を継ぎなさい。かの方の様に強く、優しい男の児に育ちなさい!」

彼女は未だ泣き止まぬベデイヴィアを抱えたまま、静かに息を引き取った。

後年、後を追う様に父親が病死。残されたベデイヴィアは祖父母に引き取られ、イギリスの片田舎で健やかに、礼儀正しく育つこととなるのだった。



「…お久しぶりですね。そちらは変わりなく過ごしているでしょうか」

雨がしんしんと降り注ぐ中、彼——ベデイヴィアは語りかける。声音からは確かな親愛が注がれ、かなり親しい人物へ話しかけているという事が感じ取れる。

しかし、それに答える声はない。

「私の方は未だ変わりありません。…ああいえ、最近は紅茶を入れ始めました。やってみると中々に凝ってしまうのか、プロと遜色ないと先生には言われてしまいました。ふふ、あなたが以前『執事みたい』というのも存外的外れでは無かったようです」

整った顔立ちから放たれるその微笑は、あらゆる女性を魅了しかねない程のものであったが、相手は何の反応も示さない。

それはそうであろう。ベデイヴィアの側には人の姿など見えず、ただ、しとしとと存在を主張する墓石が三つ立っているだけだ。

『我が妻と子ら、ここに眠る』

『……』

『アムレン』

『エネヴァウク』

傘も指さずに佇む彼は、抱える花束をそれぞれの墓に供え、最後に生前の妻が最も好んでいたタンポポを添える。

「…私は明日、日本へ向かいます。…貴女の関わったというゲームを見てみたいのです。かつて貴女が夢見た世界は、立派に継承されている様ですよ。……暫くここには来れませんが、どうか許してください」

抱えるものが無くなった隻腕はどうにも寂しげな印象を与える。やがて、墓石へと背を向けたベデイヴィアは泥水だらけの道を引き返す。

「それでは、行ってきます」

——行ってらっしゃい。

三日後、このひっそりと立っている墓石は三日間にも続く豪雨による洪水に流されてしまい、彼以外にその存在を知る者は居なくなつた。



——東京都。世田谷区。

その土地の一角、ごくありふれた集合住宅に住む人物がいた。

身長は187cmと高く、穏やかな笑みを佇ませる中性的な甘いマスクは、通りゆく者が一度は振り返る程に整っている。男にしてはかなり伸ばされた銀髪を纏め、凜と歩く様は不思議な魅力を漂わせている。

ベデイヴィアは今、ヘルメット型のデバイス——第二世代フルダイブ型VRマシン第1号、『ナーヴギア』を装着してベッドの上に寝転がっていた。

本日は世界初のVRMMORPGである『Sword Art Online』。そのβ版の配信日である。全世界のゲーマーが今か今かと待ち望む時間に、ベデイヴィアも珍しく浮足立っていた。

17:57:17:58:17:59:

今やさほど珍しくもない投影型タッチパネル式の時計が刻む音を聞き、逸る気持ちを抑えて確認する。

トイレは？OK。夕食は？とつくに済ませた。ならば後は待つだけである。

10:9:8:7:

生前、きらきらと子供の様な目で語られた言葉を思い出す。

『私ね、実はファンタジーな世界とかに憧れてるんだ。それで今、絶賛進めてる計画があつてね？今はまだ一般化はしてないけど、いつかゲームとして完成させたいの。その中は本当の世界みたいに動けて、病気の人でも元気に動けるんだ。……それで、もしそんなファンタジーなゲームができたらさ、一緒にゲームしようよ。きつと、ベデイ

も楽しめるから』

その願いは終ぞ叶わなかった。けれど、彼女の夢見た世界を一目見たい。彼女の理想はここにあったのだと、そう伝えたい。

6…5…4…

『ベディって円卓の騎士様の子孫なんでしょ？何か残ってたりしてないの？…わあ、すごい、これ本当に千年以上前の鎧なの？すっごく綺麗だし、形もカッコいいや…。ちよつと着てみてくれない？いい？ありがとう。…うん、すっごく似合ってる！なんだか本当にファンタジー世界の騎士様みたい。じゃあ私はお姫様かな？…なんかちゃって』

3…2…1…

『ベディって、剣とか使えるんだよね。え？何でかって？…まだ秘密〜！』

…0

『リンクスタート！』

——視界が真白に染まった。

——触覚、視覚、聴覚、味覚、嗅覚。

それぞれの意味を示す英単語が現れてはclearマークを出して脇へと消える。

気づけば、暗闇に覆われた空間にベディヴィアの意識は存在していた。ログインパスワードを片手で入力すると、視界は晴れ、目の前には人型の男性アバターが表示される。

様々な髪型、表情、カラーリングが選べるが、ベディヴィアはそんな事には拘ってはいない。適当に体格の違いすぎないプリセットを選ぼうとし、ナーヴギア内部の写真をそのまま使える事に気づいた。

唯一入れている写真を確認し、少しの寂寥感に苛まれる。

その写真にはタキシードを着たベディヴィアと、ウエディングドレスを着た妻が笑い合っている写真だ。確か当時は隻腕用の袖合わせが間に合わず、不恰好にならないようにと義手をした思い出がある。

僅かな逡巡、向かって左側の己を選択する。髪型は現在の結んでいるものへと変え、名前は…『ベディヴィエール』。

全ての工程を確認したらゲームスタートのボタンを押す。

《Welcome to Sword Art Online!》

真闇の帳の奥から光の奔流が迸り、盛大な音楽と共に石畳に足をつく。

目の前には中世風な建物が立ち並び、如何にも冒険者といった姿の者——恐らく同じβテスター達——が感激と驚嘆の声を上げている。かくいうベディヴィア：否。ベディヴィエルもあまりにリアル過ぎるそれらに目を剥き、その感触や質感、匂いまで再現された世界に舌を巻く。

「これが、ソードアート・オンライン……!」

視界の端に浮かぶHPバー等が無ければ、現実だと信じていただろう。彼女が夢見た世界を全身に感じ、ベディヴィエル自身も昂ぶってしまっている。続々と現れるプレイヤー達と同じ装備に身を包み、背には初期装備と思われる直剣を携えている。

そして気付いた。

(腕が…!?)

生まれつき存在しない筈の右腕、それが現在のアバターには備わっていた。動かそうと思えば動かせる。義手の様な動作の遅れや無機質さはなく、長年使ってきた左腕同様の動きが可能となっている。

——ベディもきつと楽しめるよ。

再び彼女の言葉が浮かぶ。

「…成程、そういう事でしたか」

全く彼女らしい…。そう独りごちるその顔は呆れと哀しき、嬉しさの入り混じった複雑なものであった。

「さて、何をすべきか…」

とりあえず、歩きながら考えよう。

……

「はっ!」

『グギヤアツ!?!』

βテスト開始から既に三時間が経過した。

街を散策している途中、親切なプレイヤーからRPGの定番という



ものを教わり、一先ずのセットを揃えた。

武器は騎士剣と長槍。リアルでも相当に使い慣れたもので、他プレイヤーの様に武器に振り回される、といった事は起きていない。むしろ、今まで無いものだった右腕の扱いの方が拙い。

長槍の一撃でHPバーを削りきられ、モンスターはポリゴン体となって爆散する。丁度今ので必要経験値を満たしたのか、ファンファーレと共に『Level Up』というウインドウが表示される。ベディヴィエールはそれを軽く眺め、手に入れたポイントを筋力と敏捷にバランスよく振っていく。

このSAOという世界に、ベディヴィエールは早くも適応していた。細かい設定やゲームのノウハウこそないものの、現実の体を動かすのとはほぼ同じ感覚というのが幸いした。

身につけた技術はこの世界においては最大の武器ともなり得るもので、手探りで戦闘を行っている者よりも遥かに効率がよい戦闘を可能としている。

「ドロップアイテムは……と。『リトル・ネペントの胚珠』ですか…。これは、食べられそうですね」

どこかズレた尺度で吟味し、一先ず帰ろうかとした所で、茂みの先から人の気配。

草木を掻き分けて現れたのは中肉中背の男。対するベディヴィエールが大きいせいか、平均的な筈の男が小さく見えてしまう。

「驚いた…。ここへは一番乗りだと思ってたんだけど…先客がいたか」

「貴方は…？」

如何にも勇者然とした顔立ちの男は気を取り直すと名乗りを上げた。

「俺はキリト。アンタと同じβテスターだよ」

これはとあるIFの世界の話。

たった一人の人間が加わっただけの、そんなつまらない可能性の軌跡である。

## βの終わり

『キシヤアアアッ！』

「フッ！ゼアアッ！」

βテスト最終日、三人の人影が迷宮区を駆ける。疾走するそれらを阻むのは『オロチ・エリートガード』。上半身が人型で下半身は大蛇のモンスターだ。特殊なルーチンワークを積まれているらしく、これまでと違う攻撃パターン等で翻弄してくる強敵だ。

ガギンッ！

甲高い音が迷宮区に鳴り響き、大男の鎌が弾かれる。その隙を逃さず、尻尾による強烈な一撃で味方に向かって吹き飛ばされた。

「グウウ……」

「失礼、大丈夫ですか？」

「あ、ああ、大丈夫」

肩を支えられ、起き上がる。謝礼もそこそこに、再び立ち上がる。この強敵を早く倒してしまわねば……！

彼の頭の中にあるのはそれだけだった。何をそんなに急いでいるのか。

《βテスト終了まで、後30秒》

無機質なアナウンスが響き渡る。それを聞いた男の顔はより一層険しくなり、焦りを隠せない様子で目の前の存在へと斬りかかる。

しかし、腐つても現状最高階層のモンスター。厄介なカタナのソードスキルと素早く不規則な動きに中々攻めに回ることができない。

《βテスト終了まで、後25秒》

焦りが募る。最早防衛などかなぐり捨てて攻撃だけを苛烈に行うが、決定打にはなりえない。

「ああああああああああっ！」

最後の最後、渾身の一撃が防がれる。最早、これでは間に合わない。諦観に膝をつきそうになるその隣を、漆黒の風が通り抜ける。

「――」

通り過ぎざまに三閃。それだけで自らの前に立ち塞がっていたモ

ンスターは軽快な音と共に虚空に消える。

あまりの事に理解が追いつかず、ただ走り去るその背中を呆然と眺めている。

その男が向かっているのはこの迷宮の最深部、階層の終わりたるボスフロア。

立ち並ぶ柱と灯る松明が古代の遺跡然とした広間を照らしあげ、男の移動に伴って影が大袈裟に揺れ動く。

『ギヤシヤアアアアッ！』

呆然とする鎌使いへと剣撃が迫る。そう、モンスターは一体だけではない。今しがた斬り殺されたものとは別個体のそれが赤いエフェクトを纏わせて躍りかかる。

しかし、それよりも早く視界の端から銀閃が迸る。繰り出された腕が切断され、部位破壊エフェクトと共に中途半端なソードスキルが中止される。予想外の出来事に目を剥くと、背を押された。行きずりでパーティーを組んでいた剣士だ。

「レディ、我々も続きましょう！」

その一言にハッと我に返る。まだ、まだ終わっていないのだ。硬直しているオロチ・エリートガードから目を離してこの広間の奥、ボスフロアへと続く大扉へ駆ける。

《グルルルアッ!?!》

予想外の全力逃亡に驚愕とも怒りともつかない雄叫びをあげるが、技後硬直からは抜け出せない。

《βテスト終了まで、後10秒》

走る。走る。β期間中に高めた敏捷値ステータスをフルに活用して。

《9、8…》

目には最早他の事柄など映っていない。ただ前を往く剣士と、今まさに開きかけている扉。先のボスフロアから白い極光が漏れ、視認することができない。

荒れる息すら意識に遠く、いつかに見たハムスターの如く足を回転させる。

《7、6…》

無理だ。

今のこの速さでは届かない。極限まで近づく事は可能だが、その先を拝むことは出来ないだろう。

どこか冷静な頭の片隅では悟り、諦めが渦巻き、そんな弱気を認めない心と体はこれでもかど奮起する。

「武器を捨てなさい！少しはマシな筈です！」

背後に迫る男の声に反射的に従い、ガラリと音を立てて迷宮区へと投げ捨てられる。フォームが走ることにみに特化する。

《5…》

もう扉は殆ど開き終わっている。最早一刻の猶予もない。このアバターの長い手足を活かして距離を伸ばす事だけに専念する。心做しか、速度が増した様な気がした。

「あああああああああああッ…！」

《4…》

扉を、光の先へ突き抜けた。

すれ違う瞬間、前を行っていたプレイヤーの顔が露わになる。如何にも勇者然とした好青年な顔立ちには猛スピードで横切るこちらに目を丸くして立ち竦む。

体力テストの日でさえここまで全力を尽くした事は無かった。当然、そんなものが急に止まれる筈もない。足を盛大にもつらせながら視界に捉えたのは、和風を旨とするこの階層の特色が目立つ、櫓と陣幕に囲まれたボスフロア。

——その最奥、篝火に照らされながら佇む鎧武者の姿があった。

『カガチ・ザ・サムライロード』

戦闘開始を表すHPバーが現れ、大太刀が空を切る。大気を震わせる咆哮が轟き——

——世界は真白に染まった。

《βテストは終了しました》

否、世界が白く染まったのではない。『ソードアート・オンライン』というゲームが消えたのだ。それはなんの感慨も及ばせない程に素早く行われ、四つん這いのこの身も拘って作り上げたアバターではない。

所詮はβテスト。本格的な配信の前のお試し、及びに様々な要素の確認。テストとつけられているからには理由がある。

二か月の努力が水泡に帰す。受験勉強を進めながらも考えだしたビルドが、迷宮区を練り歩いて集めたドロップアイテムが、強化に強化を重ねた装備群も全て、二度と復旧することはない。

まるで胸に大きな穴が空いてしまったような喪失感が襲い来るが、何もそれだけではない。

最後の最後、ようやく10階層ボスモンスターを拜む事が出来た。あの時、あのプレイヤーの言葉が無ければきつと間に合わなかっただろう。そして多分、私はそれを根に持ったはずだ。何となく分かる。

「…ふう」

いつまでも留まっている理由も無く、ログアウト。頭部をすつぽり覆うナーヴギアを取り外す。

さらり、と濃紫がかった黒い長髪が垂れる。今まで仰向けの態勢だったからか、伸びをしたときにポキポキと小気味良い音が鳴る。

「あー…楽しかったあ！正式リリースが俄然待ち遠しくなっちゃった！」

βテストで鍛え上げたものは何も残らない。しかしそれとこれとは話が別だ。勿論、後ろ髪をひかれる思いがあるのは否定しないが、最後にやりきる事だつて出来た。今度は、自分の実力で先に辿り着いてやる…！

しかしまあ、奇特なプレイヤーもいたものである。まさかあんなギリギリの状態で他人を先に行かせるなんて。…というよりも、何故意凶に気づけたのだろうか。

まあ、別にいいか。プレイヤーの数だけその思想がある。そういう人があそこまでガチガチの攻略をしていたのは不思議だけど、そういうこともあるのだろうか。

まあ、β版をあれだけやり込む程の人だし、正式にリリースされた日にはきつと我先にと入り込むだろう。

190近い身長に、後ろに結んだシルバーの髪。碧眼の似合う整った顔立ち。凝ったアバターなだけによく覚えている。大多数のプレイヤーはいかにも冒険者といったイケメンさだが、それとは一線を画していた造形には思わずほうと唸ったものだ。

次にあった時には、お礼でもしてみようかな。β版で作ったアバターはそのまま引き継げるらしいし。

ますますもって一ヶ月後が楽しみになって来た。それまでに、スタートダッシュを決めるチャートでも…いや、明日奈も誘ってみようかな。

バイバイ、βテスト。待ってる、正式サービス。

その合間にも、感覚は忘れないようにしとかないと…。

机にあるメモ帳に今思いついた事を殴り書きして、部屋を後にする。

(あれ…?)

汗を流す為、シャワールーム前まで赴き、ふと気づいた。

「なんで女って分かったんだろう?」

思い返されるのは男の一言。あの時確かに『レディ』と言ったのだ。中性的なアバターなら兎も角、筋骨隆々の大柄なおじさん、といった容姿だった筈だが…。ひよっとしたら私が気づいていないだけでリアルな男女を区別する何かがあるのかも知れない。

そう考え、プレイヤー名『M i t o』。実名『兎沢深澄』は大きく息を吐いた。



「だああああっ?!最後の最後で越された!」

「ちよつと和人…?そろそろ寝なさい。明日学校でしよう?」



「明日奈、いつまで起きているの。模試も近いんでしよう?」

「うん、大丈夫。ちゃんと分かってるわ」

「…ならいいのだけど」



「βテストも終わりか…」

成程、確かに面白かった。生まれてこの方ゲーム等してこなかった身からすると、理解しきれない部分もあったが、そんな私でも時間を忘れて熱中してしまう程に楽しめた。

…欲を言えば、彼女と共にあの世界を駆けてみたかったが。

「さて…製品版はどうしましょうか」

正直に言ってしまうえば、私は彼女が手掛けたゲームを試してみたかっただけで、その目的自体は達せられている。

彼女の遺作となった作品ではあるが、彼女が少しでも開発として関わった階層は7階層までらしく(制作クレジットに名前があったのが7階層までであった)、その上は彼女の死後に作られたものだ。これ以上は他人のゲームという事になる。

確かに、そこまで娯楽というものに触れない中で出会えた趣味の一つではあるが、そもそもゲーム自体は好きでも嫌いでもないのだ。魅力はあれど、もう堪能したというべきか。

「…やはり、それに時間を割きすぎるといふのも——っ!?!」

何だ?何か、強烈な悪寒がした。あの時、妻が亡くなった当日にも同じような予感があった。本能的に理解している。この警告は無視してはいけない。

しかし、それと同時に何故?という疑問が滲み出る。

ゲームである以上、現実の容姿も何も知らなければ、関係の無い他人だ。それに、遊びで現実の世界に何の影響があるのだろうか。ましてや、一会社が大々的に宣伝している看板商品。不具合や安全管理は

これ以上ないものになる筈だ。

自分は一体何を案じているのだろうか。

正体不明の予感に苛まれ、沈黙と思考を繰り返す。その鋭い眼差しの中には、『アーガス』の公式サイト、SAO情報を纏めるページが  
明るい水色で表示されていた。

——SAO正式サービス開始まで、あと一ヶ月。



## 隻腕の騎士、浮遊城に立つ

本日一時をもって正式サービスが開始となった初のフルダイブ型VRMMORPG『ソードアート・オンライン』。

発売日には三日前からゲーマー達の行列が店舗には溢れており、初回ロットである一万本はものの数分と持たずに完売した。

——アインクラッド第一層『ホルンカの森』

『はじまりの街』から北東に草原を抜けた先にある深い森地帯の一部であるそのフィールドの一端、そこにベデイヴィエールはいた。

時刻は二時半、ログインと同時に最低限の装備を整え、最短距離で駆け抜けていた。当然、プレイヤーの影も形もない。間違いなく、ここが現在の最前線である。

ベデイヴィエールは初期装備である『スモールソード』を体の一部かのように自在に扱い、群がる植物型モンスター『リトルネペント』を一蹴する。

外見は1メートル程の巨大なウツボカズラに、人間の口がつけられたような姿で、短剣のように鋭く尖った蔓を生やすモンスターだ。

その気味の悪い見た目が、VRで映るのだから、その特性と合わせて嫌われ具合も一入だ。

そんなネペントを通り過ぎざまに一閃、二閃、三閃、四閃。相対していた個体と合わせ、計五体のターゲットをとる。

MMORPG、或いはSAO経験者からすれば、愚策とも取れるこの行動。自分よりも格下のモンスター相手ならばこれ程のターゲットを取るのもあり得るのだが、ベデイヴィエールのレベルはこの時1。レベル3のネペントのネームタグはやや黒がかった赤を示している。

数で囲まれば、それだけ注意を割く必要が出てくる。個別に五体を倒すよりも遥かに重労働を強いられるだろう。

しかし、ベデイヴィエールの顔は別種の緊張を孕んでいた。

目の前の強敵では、その翳りを一時でも忘れさせることは出来ない。

四方から伸ばされる蔓を躲しながら切り払う。相手の体力を示す緑色のバーが一割ほど減少した。続けて吐き出された溶解液を大きく左回りに旋回し、進行方向のネペントを的確に刻んでいく。無駄は無く、それでいて舌を巻くほどの連続攻撃。瞬きをする間も無く、三体のHPがイエローゾーンに突入する。

そして対岸の二匹が復帰し、直線上に並んでうねうねと蔓をしならせながら迫りくる。

それを確認するや、素早く手元を動かして長槍をその場にドロップさせた。はじまりの街で買える、何の変哲もない普通の長槍だ。

SAOでは、基本的に武器を二つ以上装備することは出来ない。よって、武器を切り替えなければ、メニューウィンドウを開き、自身の装備フィギュアに入れ替えたい武器をセットしなければならない。

ベデイヴィエールの装備フィギュアにはスモールソードのまま変えられていない。本当に、ただその場に『ドロップさせた』だけなのだ。

左腕の剣を地面に突き刺し、足で掬い上げた槍を構えた。後、渾身の力を込めての投擲。流線を描いて飛翔するそれは弱点である茎を容易く貫通し、二体のHPバーを纏めてレッドゾーンへと誘った。

最後に大きく飛び出し、水平に構えた刀身に薄緑の光が纏い付く。勢いよく繰り出されたソードスキル『ホリゾンタル』はシステムのアシストとベデイヴィエールの体捌きにより通常とは比べ物にならない威力を発揮し、五体全ての体を爆散させる。

この間、実に40秒。

危なげなくこれを一掃したベデイヴィエールはしかし、歓喜を滲ませる素振りすらなく、何かを探すような視線を周囲に巡らせる。新たに湧いたネペントを斬り捨て、ベデイヴィエールは己の内に燦る予感に心を悩ませていた。

(やはり……何か胸騒ぎがする)

一ヶ月前、βテスト終了と同時に湧いた予感は時間が経っても消え

ることはなく、むしろ日を追うごとに増すばかりであった。

『キョエエツ！』

目の前に現れたネペントは奇怪な雄叫びを上げ、ベデイヴィエールへと襲いかかる。流れ作業の様に発動させた『ホリゾンタル』を行使しかけ、その頭に垂れ下がる物体を見て軌道を無理矢理修正した。

ネペントの頭部には、今にも破裂しそうなでっぷりとした赤い塊がついており、これこそが一部プレイヤーを恐怖のどん底に陥れた陥穽だ。実はこの「実付き」は少しでも頭部の実に衝撃を与えてしまうと特徴的な色と匂いの煙を吹き出し、フィールド上のネペントを呼び寄せ、脱出困難な包囲網を築くのだ。

S A Oのゲームシステムの関係上、フィールド毎に一定時間でP O P出来る上限は定められており、枯渇させていけば問題は無いが：生憎とここまでたどり着けているプレイヤーはベデイヴィエールのみであり、当然P O Pはほぼ最大数残っている。

それを知っているベデイヴィエールは——上向きに薙いだ。

強烈な一撃はネペントのH Pをゼロにまで追いやり、同時、実の身を撒き散らした。

薄暗い森、煙で遮られた視界の中に次々と赤いカーソルが現れる。シューシューという独特の呼吸音と蔓が地面を叩く音。集まったネペントの数は200は下らないだろう。

β時代、ある程度狩りを続け、P O P率を減らした状況でかつ、安全マージンを超えている四人組のパーティーという条件が揃って尚、全滅したという恐るべき規模の軍団。

しかし、その状況下にあつても焦りは無い。むしろ、この状況こそがベデイヴィエールの望んだものなのだから。

冷静沈着。忠義の騎士は来たるべき何かに備えていた。



『これはゲームであつても遊びではない』

ここから先は、特筆すべき所はない。この世界を創ったゲームマス

ター、茅場晶彦によってログアウト不能、HPがゼロになると現実世界でも死亡するという事が明かされただけだ。

そして配られた鏡。これにより、ゲームの象徴であるアバターは消え失せ、現実世界の肉体が露わになる。ベデイヴィエールも同様だが、元々現実の写真からアバターを制作した為に特に変わった部分はない。

否、最も重要な部分が置き換わっている。β当時と変わらぬアターの精緻な質感の右腕は無機質な鈍色に置き換わり、周囲の光を反射して鈍い輝きを放っていた。

感覚は残っている為、問題は無いようだが、それが却ってこの異様な風体を強調させてしまっている。

この腕の正体はキャラセレクト前のテストキャラクターのポリゴン体であり、右腕を感知出来なかったシステム側のやむを得ない処置、バグにも近いものなのだ。

当然、開発は疎か、ゲーム自体に詳しい訳ではないベデイヴィエールには預かり知らないことである。

混沌と恐慌渦巻く広場にて、多種多様―というには男女比、人種共に偏りすぎている気がしなくもないが―の人が入り混じる中、ベデイヴィエールは冷静に物事を俯瞰していた。

(この騒動の最中外へ飛び出した彼ら：恐らく、私と同じβテスター。：プレイヤーをこの場から解放しようとして動いている……訳ではありませんね。残念ですが……)

ちらと、再び周囲を見渡す。

焦燥を募らせるプレイヤーの殆どは、この理不尽で絶望的な状況に思い思いの行動を取っている。怒り、嘆き、現実逃避……いずれも、とても良いとは呼べないものだ。

(賢い選択は彼らの様にいち早く抜け出す事なのでしょう。)

……しかし)

祖父に聞いた話と、幼き頃に読み耽っていたアーサー王伝説、そして、この世界を思い描いていた妻を思い返す。

(私は円卓の騎士、忠義の騎士であり、恐るべき膂力のベデイヴィエー

ル卿の末裔！我が両親も尊敬に値する人物だったと聞く。…どんな状況下にあつても、この心は揺らぐものではない！」

ベデイヴェイールは一人、広場の正面に当たる、黒鉄宮の屋根に飛び乗る。

(何より…この世界を思い描いた彼女の夢を、彼女が手掛けた世界を、恐怖の象徴に等させてはいけない…！)

不信感を募らせるであろう右腕は白いローブで覆い隠し、広場全てに響き渡る程に声を張り上げる。

「皆さん落ち着いて下さい！あの茅場晶彦と名乗る人物の意図は分かりませんが、パニックになるのは頂けません！その不安や気持ちは承知しますが、一旦冷静になるべきです！」

言い争いや掴み合いをしていた者たちは皆声の主のいる方向を見上げ、少しの間放心する。

「まずは冷静に今後の事を考えましょう！不得手な者、戦いたくない者は結構！意思のある者だけがフィールドに出ればいいのです！救助があるにせよ、攻略するにせよ、生き残る事が最優先です。決して、自暴自棄にはならないで下さい！」

ただ漠然とその言葉が耳朵を打ち、鈍くなった頭で考える事数秒。意味を理解した彼等は瞬間、堰を切ったように怒号を上げた。

「…巫山戯るなっ!?!」「落ち着けだど?これが落ち着いていられるかっ!?!」「なんなんだお前!」「引っ込め馬鹿!」「この現状が分からないのか!!」「もう嫌っ!」「こんな時に何言ってるんだ!」

「…っ!」まず、話を」

「だからその話が意味ないんだよ!?!」「だっ、大体お前!アバターのまんまじやないか!?!」「そっ、そうだ!あいつも仲間なんだよきつと!」「俺たちをここから出せ!」「死ね!」「茅場晶彦を出せ!」

やはりこの様な状況では人間まともな思考を出来る者は少ない様で、心ない罵倒や罵声がベデイヴェイールに叩きつけられる。

頭では理解する者もいるが、納得は出来ない。行き場の無い感情の嵐が調度いい矛先を見つけた。

こうなってしまうと、何を言っても火に油を注ぐだけだろう。ベ

デイヴィエールはこの惨状に言葉を詰まらせる。一体どうすればいいのかと。言葉を選び、悩み、考え、いい案は出てこない。合理的な考えは浮かべど、それでは意味がなく、心に訴えかけるには信頼が圧倒的に足りない。

正に四面楚歌。折り重なった悪感情が牙を剥こうとし――

――不意に、一陣の風が吹き抜けた。

春の暖かさを感じさせ、心地良い花の香りが鼻孔を満たす。ほんの数瞬だけ、熱り立った心は鎮静化した。

ピロンツ！

軽快な音と共にメールが届く。

(メール：？一体、誰が：)

β時代、フレンドになつた関係は多くいるが、正式サービス開始後はこれといった接触は起こしていない。何より、βテスト時のデータは消去され、フレンド他は引き継がれない筈だが…。

そう不審に思いながらも、ウインドウを操作してメールを開く。

『お困りの様だね。』

私はしがたいネットアイドルで、君のファン1号……おっと、茅場晶彦とは何の関係もないから安心してくれたまえ。

手短に行こう。

彼ら全員に私の書いた攻略本…というよりはガイドブックを配つてくれたまえ。これに序盤の安全策や、危険な情報、様々な知恵を記している。といっても本当に最低限の知識や生活の為だから、その先を目指すには足りないけど…、無謀な戦いや、パニックは防げる筈さ。こういうのは最初期が最も恐ろしい。けれど峠を越えればある程度安定はしてくる。そこに至るまでの簡素なものさ。是非とも役立てて欲しい。

by マギ☆マリ』

同封されているガイドブックをオブジェクト化し、パラパラと簡単に流し読む。

内約は記されている通り、最低限の生活を保証出来る方法や、ソードスキルや戦闘のステップだ。ゲームの攻略本としては余りに慎重

に過ぎるそれだが、今はそちらの方が都合がいい。

僅かに和らいだ空気に合わせるように、ガイドブックを視界に見えるカーソル全てに向けて配布した。

送られてきたガイドブックを眺め、目を白黒させるプレイヤー達。ベディヴィエールの言葉が続く。

「私はβテスターです。これは私…がβ時代の事を纏めてガイドとしたもの。基本的な戦い方や、コルの稼ぎ、ステップを踏んで記した物となります！」

衆目がざわめき立つ。思わぬ情報に驚愕と戸惑いの意を示す。信用するべきか、否か。どっちつかずの空気には、先程の喧騒はない。聞こえてくる声からも険が取れている。

幾人もが迷う中、一人のプレイヤーが声を上げた。

「俺は信じるぜ！俺あモンスターと戦ったが、ばっちり倒す事が出来たんだ！他のβテスターにも教えられたが、無理さえしなきゃ余裕だぜ余裕！」

その男の言葉を皮切りに、肯定的な意見が散発する。

「ああ、信じてもいいかもな。これ。確かに俺が見たのとも合ってる」「俺も一回だけ戦ったけど、コツさえ掴めばレベル1でもこの周辺は大丈夫だと思う…」「そ、そうだよな」「まあ、最悪圏内から出ないで生産職でも…」

場の雰囲気傾いた。決して良いなどとは言えないが、悲観的に過ぎるさつきよりはマシだ。何より安全性の確保という点に置いて、この情報は万金に値する。

「先に外へ出たβテスターの一部はβ時代との差異や難易度の検証、及びルート先行をしていています！中には私から直接依頼した者もおりますので、新人を見捨てた訳ではありません…このガイドブックも、β時代のフレンドや、裏の取れた情報を扱っています！」そんな事はない。言っている事の殆どはデマカセで、自分が調べた訳でもなければ、依頼など出す暇もなかった。

しかし、この言葉こそが最も聞きたい言葉のはずだ。少なくとも、今この時ばかりは最善の結果を引き寄せざるに違いない。

「外からの救援を待つにも、このゲームがクリアされるのを待つにも、生きていなければ出来ません！どうか、どうか希望を捨てないでください！……私からは、以上です」

ベデイヴィエールの演説が終わり、広場に沈黙が満ちる。

街の外へ向かうベデイヴィエールには何の反応もない。ただ歩く姿を視界に収めていた。

やがて、どこかの誰かが拍手を鳴らす。それにつられるように、パチパチと音が増えていく。

人が道を開けるように割れ、その様はさながらベデイヴィエールの道行きを祝福するかの様であった。

後に、『銀腕の騎士』と呼ばれる事になる伝説の第一頁目が刻まれたのであった。



## 電子の世界の鎮魂歌

SAOにはスキルスロットと呼ばれるステータスが存在している。プレイヤーはこのスキルスロットに現在取得可能なスキルを選択し、それぞれの行動を行う事で熟練度を上げていくのだ。

『片手直剣』スキルならば、片手直剣を用いた戦闘を行う事で装備ボーナスや、ソードスキル冷却タイムの短縮といった派生技能<sup>モディファイ</sup>を得、『索敵』スキル持ちならばスキルを用いて活動するだけ、範囲や効果を高めたり、補助する技能を後付けする事が可能となる。

レベル1の時点ではスキルスロットは二つ。ある程度レベルを上げるとその度にスキルスロットも開放されていく、というシステムだ。

ベディヴィエールが最初に取得したのは片手直剣スキルと長槍スキル。そして、スタートダッシュのネペント狩りによって上がったレベルにより、スキルスロット枠が一つ増えていた。

選んだスキルは『野営』。アンチクリミナルコード圏外で使用可能なもので、焚き火を設置し、そこを野営地として設定するスキルだ。効果は野営地として設定した位置から少しの範囲にいるプレイヤーに隠蔽効果を与え、一部のモンスターを寄せ付けない効果を持つ。更に、本来は食料アイテムではないものも調理する事が出来るという物だった。

効果を聞けばかなり優良なスキルのように思えるが、実はこれ、β時代は屈指のハズレススキルとして知られていた。

まず、隠蔽効果は同熟練度で『隠密』スキルの五分の一程しかなく、焚き火の周囲僅か2メートルしか適応されず、使い勝手も性能も悪い。また、モンスター避けになると言っても、効果があるのは動物型モンスターしか適応されず、昆虫型や亜人型のモンスターへは却って察知範囲を広げてしまうというデメリットがあった。

調理は料理スキルとは別物で、あくまで食べられる様にするだけの為、味覚エンジンについてはお察しだ。

当然、限定条件下でしか使えないこんなスキルを取るくらいなら

ば、もつと効果が高く活躍出来るものを使うだろう。

何より、デスゲームと化した今では野宿は相当な危険を孕む行動である。無理に進んで野営するくらいならば、パーティーで安全に進み、就寝は村で取る事が長生きの秘訣である。

「……成程、ここはこういう味で……。おおつ、ここは中々……」

何かいた。否、ベデイヴェイエルである。

パチパチと弾ける炎に照らされ、何かを頬張っている。

見るものが見れば顔を顰めかねないそれは、ちゆるんと音を立てて喉の奥へと嚙下された。赤くウネウネとした姿は恐らくミミズ型モンスター『ジャイアント・ローチ』の一部であろう。

本来なら、装備強化や作成、及びにコルの足しにされる程度のそれだが……。今やこんなグロテスクな料理へと変貌していた。

曰く、癖や弾力はあるが、慣れたらイケる。レバーとハツの中間の様な味に、青魚の風味と若干の土臭さを残す大ミミズの素焼きはベデイヴェイエールの口に合ったらしい。

アイテムの整理とステータスの確認も終わらせ、そろそろ先へ進むかと腰を上げる。

時刻は午前二時。殆どのプレイヤーはすっかり寝静まっている時間だ。ベデイヴェイエル本人としては三日間の完徹くらいならば一切のパフォーマンスを落とさないと自負している為、何の躊躇いもなくこんな行動に出ている。

目立つ焚き火のウインドウを開き、破棄しようとした所で冴えた聴覚がある物音を捉えた。

ポロローン、ポロローン……

確かに聞こえる。確かこれは第一層で特定条件を達成する事のできるハープ『銀の豎琴』と良く似通っている。……というより、第一層では店売りのハープは無く、プレイヤーメイドか銀の豎琴しか無く、開始一日で得られる熟練度ではここまで綺麗な音は出せないの、特定は容易である。

しかしまあ、余程の物好きが居たものだと思う。まずこんな時間に活動し、ここまで来れている事と、デスゲームと化した初日にハープ

を選択するという余裕。そしてまあ、単純に入手条件から。

ベディヴィエール自身が経験した訳ではないのだが、この『銀の竖琴』は『はじまりの街』の初期スポン地点から後ろへ進み、その先の角のついた兜の飾られている家畜小屋の真ん中の最もトサカの大きいニワトリの下のスケイルメールのレリーフの右にあるコインを取得し、それをアイテムストレージに入れた状態で最寄りのNPC鍛冶屋内で二時間眠ると、その店主が30%の確率でくれるのだという。

何とも頭が痛くなりそうな内容で、開発者は勿論、この条件を調べた奴と入手した奴は一体何を考えていたんだと言いたくなる事間違いないの意味不明さである。バグか何かと疑う方がまだあり得る。

兎も角、そんな奇行…もとい希少なアイテムをこんな真夜中に奏するのは一体誰だろうか。だんだんと音は近づき、やがて茂みの奥に一つの影が現れる。

「やっと、追いつきました」

「貴方は…」

赤い髪を肩口まで伸ばし、胸のはだけたシャツを来たその人物は、ベディヴィエールを見つけるや、再びハープを幾度か鳴らす。

「久しいですね。ベディヴィア」

「すみません、リアルの名前を出すのはマナー的にどうかと…」

「えっ…」

沈黙。

親しげに声をかけた旧知の仲にまさかそんな事を言われるとは思っておらず、ただ一言、「私は悲しい…」と呟いた。



「広場で貴方を見かけた時は驚きました。日本に来ていたのですね」「そういうトリスタン卿こそ、5年ぶりでしょうか？」

「いえいえ、卿などと敬称は不要です。ここはゲーム内ですし、私と貴方は友人ではないですか」

閉じかけたウィンドウを戻し、トリスタン——本名、トリストラム・

リオネスと談笑する。

トリスタンはこの様な非常事態に、気の許せる友人を目にしたために歓喜し、そのままの足で追いかけていたとの事だ。

途中、偶然にも銀の竖琴のフラグをクリアしたため（つまり寝ている）遅くなつたが、何とか辿り着けて良かったとの事。

「卿の活躍は耳にしていますよ。昨年アーチェリー世界大会、準優勝だったそうですね。おめでとうございます」

「ええ、どうも。しかし、これで嵐矢選手に2連敗ですね…。ゲームから脱出したら即座に鍛え直さなければ…」

このデスゲームという事実さえ無ければ、何てことないごく普通の会話は、彼らの持つ余裕を表している。褒められた事に少々気恥ずかしそうに頬を掻き、質問を返す。

「…ベディヴィエールは何故このゲームに？今までそのような類のものには触れていなかったと思うのですが。βテスターであるとも言っていましたし、何か理由が？」

「ええまあ、…妻が、このゲームの制作に関わっていたのです。彼女の一押しというので、始めてみましたが、中々面白く…。まさかこの様な状況になるとは思いませんでした…」

「…それは災難でしたね。奥方はこちらに？」

何気なく放たれた一言。沈黙が場を支配し、複雑な顔をしたベディヴィエールを見てトリスタンはハツと息を呑む。

「まさか…もう既に」

「…いえ、そうではありません。妻は2年前に先立っていますので、今回の事とは関係ありません」

「…そうですか。すみません。不躰でした」

暗くなったムードをどうすべきかと頭を悩まし、咄嗟に未来の事について展望を巡らせる。

「たつ、確か子供が生まれたと聞き及びました。その子らの為にも、早く…二人共、既に病死しています…申し訳ありません」

「いえ、卿が謝ることでは…。教えていないのですから知らないのも当然です」

「またも気まずい沈黙が訪れ、しばらくの間パチパチと薪の弾ける音が響く。」

「では、私も今度墓参りに」

「四ヶ月前に川が氾濫しまとめて流されてしまいました……」

「……………」

「……………」

「待つてくださいトリスタン！私は気にしていませんからっ……！」

「止めないでいただきたい……！ここまで無神経極まりない愚か者など貴方の友として、人として失格です！ましてや死者に関わる事など……！」

強烈に地雷を踏み抜き、避けた先でも誘爆させていった見事なまでの踏みっぷりであろう。

自責の念に駆られ、首を吊ろうとするトリスタンを必死に宥める。S A Oでは首を吊ったとしてもプレイヤーのHPが減ったりはしないが、ここは気分的な問題であろう。

「…………お見苦しい姿を……。申し訳ありません。では、償いという訳ではありませんが、僭越ながら私から鎮魂歌を……」

美しいハープの音が身に沁みる。装飾の少ない純銀の豎琴は赤髪の奏者の手の中で弦を震わせ、今は亡き死者への想いを綴る。

このS A Oの中では感じる全てが虚構のデータ。

夜闇に浮かぶこの美しい音色すら、ナーヴギアが送った電気信号を脳がそうだと受け取っているだけの事。現実世界に於いては何の意味も持たないそれは、しかし、きつと届いたのだろう。

それは電子世界のバグか、はたまた想いの力がそうしたのか。ベデイヴィエールの耳には活弁に笑う彼女と、抱えられている我が子を確かに思い浮かべたのだ。

『…………頑張っつてね、ベデイ』

ポロロン、ポロロン。

そう、きつと、届いたのだろう。

## SIDE : B その次の日

「……本当にその作戦で行くのですか？いえ、疑っている訳ではなく……」

「ええ、安心してください。こう見えて効率は中々いいですから。……何故かあまりやっている方は見かけませんでした……」

「……（そも、出来る技量を持った人間がいなかったからでは？という顔）」

「では手筈通りに！」

返事はなく、ただ一度弦を鳴らすのみであったが、二人の間にはそれで十分だ。

徹夜で進んだ為に、他のプレイヤーの到達地点よりも少し先にある溪谷地帯。その一角にて二人の騎士はモンスターの群れに囲まれていた。

何故こうなったのか、時は少し遡る。

……

ポロロン…ポロロン…。

「…簡素なもので申し訳ありませんが、取り敢えずはこれでお許しを」  
「いえ、わざわざありがとうございます。きっと我が妻子も浮かばれるでしょう」

「…そう言ってくれれば私もありがたい」

厳粛な空気の中奏でられた音色の一つどれをとつてもかなりの練度を感じさせるもので、如何程に優れた奏者であるかを強く思い返された。

…再び静まる空気を振り払い、現実世界の話から一転。この  
ソードアート・オンライン  
ゲームの話へと移る。

「そういえば、トリスタンはどのような構成を？」

「ああ、それなのですが…殆ど無視して走ってきたので、レベルは1のままです。取得しているスキルは……『豎琴』と『投剣』ですね」

「……よくここまで辿り着けましたね」

トリスタンは何て事ないように語るが、この場所の適正レベルは

3。デスゲームと化した今、適正レベルを超えた、安全マージンを取らなければ行けないような状況下に、新人が戦闘スキルも無しに突貫してきたのだ。

この男で無ければ良くて自殺志願者。あまりの無謀さここに極まっていた。

「いえ、まあ何も無いよりはマシですが……。せめてメイン武器くらいは取っておいたほうが……」

トリスタンの身を案じ、そう声をかけるが何を思ったのか、トリスタンは微笑する。

「ふっ……ベディヴィエールは私が何の意味もない事をするとお思いで？」

「はい。割とちよくちよくやらかしますよね」

「……まあ、いいです」

一切の遠慮なく放たれた言葉に少々ばつが悪そうに居直るが、咳払いをして続ける。曰く、あるクエストをクリアして得られる武器種、弓を獲得したいとの事。その為にも、まずは一層をクリアしたいと言っているが……

「ないですよ」

「はい？」

「いえ、ですから。弓ないです」

ピシリ。

空気が緊迫したように、一瞬だけトリスタンの目が薄く開いた。

S A Oでは感情表現が豊かであり、それがアバターに反映されやすい為に表情を隠し通すのは中々に難しい。そんな中で僅かにしか顔に出なかったトリスタンのポーカーフェイスぶりを褒めるべきか、それ程驚いたと見るべきか。

行き場を失った手を膝の上に置き、発言人をじっと見つめる。

「……マジですか？」

「……マジです」

静かに問答を繰り返し、先程と全く同じ体勢——振り出しに戻る。どこから漏れたものか、トリスタンはガセネタを掴まされていたらし

い。事実が判明すると、それはそれは凄く落ち込みようであった。まあ、このような状況になって尚、本来の獲物が使えないと来るのだから悲観する気持ちは分からなくもない。

「……まあ、いいです。今の内に知れただけでも僥倖というもの」「ではメイン武器を……」

「いいえ！それはまた次の機会に。流石に遠距離攻撃手段と豎琴だけは譲れません。……そうです、確か一応スキルが無くとも剣自体は振れるのでしょう？私はそれまで頑張っていけますとも」

正直な所を言えば、デスゲームとなつた今は他に取るべきスキルはあるのだが、そこまで口を出すことはしない。これはトリスタンが選んだ事。そして何よりも、この男への信頼が厚い事に他ならない。

「では尚更早くレベルを上げなくてはいいけませんね」

しかし、それはあくまで技術的なもの。流石にゲームに設定された数値を完全に無視出来るというものではない。それに、次のスキルスロットが解放されるのはレベル5の時。

それまでは、ベデイヴィエールがメイン攻撃手としてやって行く事になりそうだ。

つ……と右腕を虚空になぞらせウインドウを開き、二、三度タップすると、トリスタンの目の前に新たな窓が表示される。

《ベデイヴィエール からパーティー申請が届きました》

「……ええ、これからもよろしくお願いします」

当然、OKを選択。直後、視界左側。自身のHPバーの下に、やや小さなHPバーが出現した。パーティーが成立した瞬間である。

それからというもの、今後の事やβ時代に知り得た第一層の情報を話し、次の行き先や狩り場をある程度定め……ふと、あることを思い出した。

それは、ここから数時間進んだ先で受注出来るクエストである。『コレクト収集』と『スローター虐殺』の複合クエスト。名は『インスタンス昆虫の騒動』。

このクエストは一層……というよりSAOでは珍しい一時的マップで行われるもので、制限時間内に特定のアイテムを収集し、かつモンスターを倒すという内容だ。



わざわざフィールドに出て集めなければならない通常クエストよりはマシな気もするが、実の所このクエストの人気は恐ろしく低かった。

理由としては、毎回指定のものがランダムになる事だろう。物だけではなく、その個数や種類までバラバラで、とてもパターン化出来たものではない。

しかもその収集品というものが厄介で、虫型のクリッターなのである。森中を動き回るそれはMob扱いではない為索敵スキルに頼ることも出来ない。そして『虐殺』の名にもある通りモンスターも徘徊している。

戦闘中はクリッターが逃げるプログラムを組み込まれており、これがまた厄介さをワンランク上げていたと言えるだろう。

モンスターの猛攻を躲し、動き回る虫の数々を捕獲し、時にはモンスターを選別し、必死の思いでクリアした所で、特にこれといったアイテムもない。

確かに、難易度の分コルや経験値はそれなりだが、まず街から圧倒的に遠く、また、隔離される為に他クエストを同時に進めることも出来ない。物資の補給には一度クエストを諦める必要がある。これならば圏内付近のクエストをいくらか回したほうが効率も良く、安全性も遥かに高い。……ようするに、面倒くさい割にしよっぱく、貴重なアイテムもない。いわゆる塩漬けクエストなのだ。

虫型モンスターしか配置されていない為、クリッターを無視してドロップアイテム狙いで訪れるプレイヤーもいるにはいるが、ここをその様に安定して攻略出来る実力があればとつくに上の層を利用している。

デスゲームとなった今、こんな僻地のサブクエストを受ける人間がいるだろうか。安全圏から遠く、攻略にも遠い。ましてや穴場ですらないこのクエストは、はつきりいって相当の物好きでもなければまず受けない。

「聞いてくださいますか……。近頃、この辺りで多くの巨大昆虫が悪さをしている様でして……小さな虫達の生活圏を減らしているの

です。退治したいのはやまやまなのですが、何分数が多いもので……。どうかあの巨大昆虫を追い払い、小さき虫達をちゃんとした森へと返してはくれませんか」

「分かりました。お任せください」

「おお、ありがとうございますございませ旅人様。小さき虫達は戦いに敏感で逃げてしまいますので、お気をつけて言ってらっしゃいませ」

夜通し森林地帯を駆け抜け、時にはモンスターとも交戦し、景色の良い溪谷へと辿り着いた二人は、早速NPCからクエストを受注していた。

「毎度思っていましたか……あの御老体、何故このような場所に一人で住んでいらつしやるのでしょうか」

「さあ、ゲームですので……」

そんな会話もそこに、裏口から外へ出る。日も出てすっかり明るくなった溪谷は、仮想の日光をこれでもかと吸収している。心做しか、空気も澄んでいるように感じるのが不思議な所だ。

既にクエストは開始され、次第にこの場所にもモンスターが訪れる事だろう。このクエストをクリアするセオリーとしては、まず第一に目標のクリツターの位置を確認し、移動しながら対象のモンスターを討伐するのだが……。

クエストリタイアの出口でもある民家を背に、ベディヴィエールはストレージから小瓶に入った何かを取り出した。

「それは……？」

「ええ、『食人花の蜜』です。これを使います」

βテスト終了一日前に発見したこのアイテム。『リトルネペントの胚珠』とポーシオンを火にかける(!?)と出来るアイテムだ。これは虫型モンスターとクリツターを集める効果があり、更にはクリツターが戦闘行為への反応を示さなくなるものだ。まさにこのクエストのためにあるかの様なアイテム。使わない筈もなかった。

そんな優れ物を――

ベチャアツ……!

いかにも粘性な音を立ててトリスタンの体に塗りたくられたそれ

は、テカテカと光を反射する。

この独特の不快感までしつかり再現してくれるナーヴギアにはトリスタンも思わず脱帽。こんなところまで再現しなくていいのにも思っている。

民家を背に、ベデイヴィエールはその作戦を語りだす。

本来は木などに使用するそれをいつぺんにトリスタンに塗り、更に竖琴でモンスターのヘイトを稼ぎ、相乗効果で押し寄せたモンスターをベデイヴィエールが狩り尽くすというものだった。民家を背にしているのは、万が一の際に逃げやすい事と、背後を警戒しなくていいことからだ。

蜜の滴るいい男となったトリスタンは、そのぬちやぬちやの体のまま銀の竖琴を弾き始めた。ベデイヴィエールは最早心配すらしてくれない。

「私は悲しい……」

ポロローン。

奏でられた音色は、ベトベトの手で弾かれたとは思えないほどに美しく、整っていた。

……

「おおおおおっ！」

「キシヤアアアッ!？」

巨大アリを裂帛の気合と共に一条の銀閃が放たれる。

単発の垂直斬り下ろし——『バーチカル』がアリの弱点である首を痛烈に打ち、そのHPバーをレッドにまで削り通す。みるみる減っていくHPを前に、しかしてアリは止まらない。減少の止まったHPは残り数ドットという所で停止し、ソードスキル後の硬直を起こすベデイヴィエールへと牙を剥く。

「吠えても無駄ですー！」

が、その攻撃が届くより先に、凄まじい正確さでスローイングナイフが弱点を貫いた。それにより数ドット残っていたHPは完全にゼロ

口になり、青い結晶の様にポリゴンの破片を散らせた。

「これで最後ですか…」

3時間にも渡った攻防戦は中々白熱したものとなり、二人のHPはレッド手前のイエローにまで陥ってしまっている。直ぐにポーシヨンを飲み干し、じわじわと回復していく体力と、手に入ったアイテム郡を眺めながらトリスタンは呟いた。

途中、トリスタンが眠ってしまったたり、解毒に手間取ったり、物量に押し込まれそうになる等、危うい所はあったが、何とかお互いにカバーしあつて切り抜ける事が出来た。

「さて、では指定の物も集まりましたし…。御老体に報告しましょう」  
早速と、ドアに手を掛けるトリスタンを慌てて引き止める。

「…？何でしょうか？」

「まだ寄る場所があるのでですよ」

このマップの端の端。溪谷の下の空間に、それは居た。

光の漏れる幻想的な空間に止まっているのは一匹のカブトムシ。そのサイズはモンスターのそれであり、カースルも敵を示す赤だ。

『シュヴァリエ・ビートル』。金に縁取られた純銀の装甲は、空間に満ちる青い燐光を受けて煌めいている。これが狙いの品である。

このモンスターはこの場所限定のレアモンスターであり、ランダムで各種レア装備をドロップするお宝モンスターである。

何故、こんなものが居るのに塩漬けとして扱われていたかという  
と、このモンスターの出現条件が『フィールド内の全てのMobを討伐する』だからである。このクエストを続ける旨味はなく、クリツター収集を終えたら直ぐに終わらせるプレイヤーが殆どであったため、他には知られていないのだ。そもそも、全滅させた所で、この場所の存在を知っている上で訪れなければならない為、他に知られていないのも納得だろう。

因みにβ時代にこのモンスターを発見したのはベデイヴィエールただ一人である為、どんな攻略本にも載っていない激レアなモンスターなのはベデイヴィエール本人ですら知り得ない事である。

特殊な条件のレアモンスターだけに、このレベル帯にしてはかな

り強めのモンスターではあるが、あの修羅場を乗り越えた二人の敵ではない。

数分で討伐されたシュヴァリエ・ビートルを尻目に、トドメを刺したトリスタンはドロップアイテムを確かめる。

『グリーヴ・オブ・ラメント』：これは、私が頂いても？」

「ええ、元よりそのつもりで挑んだのですから」

「では、早速……。おお……。これは……！」

何やら感慨深そうに新調された脚用防具を見つめ続けるトリスタン。大袈裟にはしゃいだりはしないが、長い付き合いであるベディヴィエールには相当舞い上がっていると見えた。

どうやら妙にしつくり来るらしく、動きやすさや性能、見た目の全てにパーフェクトと太鼓判を押ししていた。

新しいおもちゃを買ってもらった童のようにウキウキとしているトリスタンを引き連れ、クエスト完了報告に向かう。

「おお、ありがとうございます。歳を取ると中々厳しいものでして……。そうです、報酬でしたね。少ないですが……こちらを」

「ありがとうございます」

深く礼をする老人を見据え、言葉を添える。

ゲームのNPCである老人にはそんな言葉がけは何の意味も無いのだが、ベディヴィエールにはどうもそう割り切る事が出来ないらしい。……。というより、元々AI等にも敬語を絶やさないのです、それが絶対だとは限らないが。

開かれたウィンドウからコルや経験値が記され、二人揃ってファンファーレが鳴る。これまでの長い戦闘でベディヴィエールは8、トリスタンのレベルは6になっていた。

目当てだったスキルスロットを手に入れ、そこに片手直剣を当てはめる。どうやらソードスキルの練習をするらしく、室内でぶんぶんと振るっている。

出発はまだもう少し後になりそうだ。

「……旅人様」

待っている間、残っているワームでも食べようかとオブジェクト化

した所で、老人が話しかけてきた。その手には何か細長い箱を抱えている。

「どういう事だろうか。βテスト時にはこんなイベントは無かったはずだが…。」

「実は…僕の息子なのですが…。昔、騎士をやっておりました。この森でよく遊んだものでして。虫が好きに変わった趣味の奴じやった。…あやつはもう既に居ませんが、せめて、魂だけでも連れて行ってくださいませんか」

「そう言い、差し出された箱の中を見ると、やや細身の剣身に飾り気のない鍔のついた剣であった。」

「恐らく、いや、間違いなく今使っているスモールソードよりも何段階も強いであろうそれを、ただ受け取るのは簡単だ。ハイと一言呟けば、システムが認識して自らのストレージに移動されるだろう。」

しかし、それは何かが違う気がした。

「これがただのゲームであった時ならば、その背景を思いこそすれど、感情移入はしないであろう。このデスゲームと化した世界では、NPCもプレイヤーも、どちらも一つしかない命を背負っているのだ。なればこそ、自らもそれなりの対応を取るべきなのだ、そう判断した。」

「分かりました。御老公、貴方の子の魂は我が魂と共にあり。これなる剣は必ずや騎士の本懐を遂げるに相応しいものでありましょう」  
「……………そう言ってくださいると、愚息も浮かばれます」

ふと、決められたプロセスしか行わない筈のNPCが、くしやつと泣いているようで、笑っているような顔をした。驚き思わず瞬きをする、そこには先程と変わらぬ姿の老人。あのどうにも人間くさい拳動は見られない。

「一体何だったのだろうか」と頭を捻れど、その問いに対する答えは出てこない。だから、ベデイヴィエールはこう考える事にした。

——電子の世界にも魂はあるのだと。

いつか訪れる未来の福音。いずれ訪れる過去への凶報。

その一歩は今浮遊城と共にあり。

そしてまた、彼の騎士も共に歩むのだ。この果てしなく広く、どこまでも残酷な世界を。

——その剣の名は『A i r g i d ・ O a t h』  
今はまだ晴れぬ暗雲に差し込む光となるだろう。

眠りとは、安寧を享受するべきものである

「早く、早くしないと……」

一人の少女の顔が今、絶望と焦燥に彩られる。

囲むは数多の食人花。出来の悪いアートの様な口元は厭らしい笑みを浮かべ、少女の命を貪らんと進撃していた。

対する少女の獲物は大鎌。生命を刈り取る形のそれは空に艶やかな紫紺の軌跡を残して食人花達を切り刻んでゆく。

「通してっ……！お願いっ……死なないで」

少女の生命を表す値は既に半分を下回っており、常ならば撤退を視野に入れる状況に陥っている。

しかし、彼女の目に映るのは自らの死ではない。むしろその下、自分のものより小さく表示されるそのゲージは、少女自身のものより低く、今も僅かに減り続ける色は黄色に突入して尚、勢いを緩めることはなかった。

「——アスナッ……」

アスナ。それが彼女のパーティーメンバーであり、命の危機に瀕している人物の名だ。

毎秒削られていくHPをただ見つめる事しかできず、今すぐに助けに行けないことに苛立ちを覚える。

それが続くほどに、攻撃はより苛烈になっていき、自らの防御などかなぐり捨てて眼前の障害達を打ち倒す。

全ては親友を救う為。自らが守ると誓った彼女と共にこの世界を生き抜く為に——！

「そんな……」

しかし、彼女の前に新たな絶望が立ち塞がる。アスナのいる上層へ登るための唯一の道。緩やかな傾斜となっているそこには夥しいほどの群れが続々と湧いて出てきていた。

ポーシヨンも残り少ない。果たして、自分が死なずに辿り着けるかどうか。ましてや、一分と経たずに消えてしまう命がある最中での事。



そう、頭では分かっている。絶対に私が間に合うこともないし、あの状況で装備も十分とは言えないアスナが生き残る事が不可能だつて事も。

それでも、気の許せる友人…たった一人の親友なのだ。本当の自分を受け入れてくれて、こんなデスゲームに誘ってしまった私なんかと接してくれる子。

「うああああああつっつ…！」

再び、神経の全てを突破する事だけに傾け、鬼気迫る勢いでソードスキルを繰り出す。巻き込まれたネペントは三体。纏めて青い結晶体と砕け散る。

その硬直時間にも、次々と触手は遅い来る。被弾は最低限抑えているが、それでも無傷とはいかない。じりじりと、焦らすようにゆつたりとした歩みで死神が近づいてくる。

そこからは、考え得る限り最高効率でネペントを排除し続けた。鎌の特異なりーチを活かし、自らの攻撃を弱点部に当て、道を切り開いていくが……それでも、進めたのは10メートルといった所である。処理が遅いのではなく、それ以上の増援が絶え間なく現れているという事。むしろ、一人で相手取り押し進めている事が奇跡なのかもしれない。

募る焦りと最悪の予想がカチリと噛み合い、少女は正気を取り戻した。……取り戻して、しまった。

残りの体力を示す自分のものは赤一歩手前の黄色に染まり、アスナは数ドット程度の赤。それが今尚、減り続けている。

「——あ…」

喉が震える。叫びたい気持ちとは裏腹に、口からは掠れたような吃音が漏れるだけだ。……私は、今まさに親友の死に様を見届けようとしているのだ。

身が竦んで今までの動きすら覚束ない。とうとう赤にまで達した己の生命線をただ凝視し、幻視する。

アスナのHPがゼロになった瞬間、屈託のない笑みを浮かべていた栗色の彼女は、私が巻き込んでしまった彼女は、高圧電力で脳味噌を

灼かれ物言わぬ骸と化するのだと。

「だ、駄目……」

同時、親友という最も近しき人の『死』を認識してしまったせいで、何とか封じ込めていた恐怖心が積もり重なって襲いかかる。

極限状況下、如何に気丈に振る舞っていたとはいえ一中学生に過ぎない彼女に、これを耐えろというのも土台無理な話だろう。

怪物たちの騒音も聞こえない。ただ無いはずの心臓が盛大に脈を打つ。生きているという証であるその錯覚が、却って親友の死を連想させるようで……。

『絶対にアスナを守るから。……一緒に帰ろ』

「ごめんアスナ。約束、守れない……!!」

『Asuna とのパーティーを解消しました。』

——私は逃げ出した。

結局の所、怖かったのだ。彼女の死を直視しなくなかった。生命の灯火が潰える瞬間から逃げたかった。

あの時、トラップにハマってゴボルドにリンチされて死んだパーティーがフラッシュバックした。自分もそうなるのではないかという、おぞましい悪寒が込み上がった。

そこからは、あまり覚えていない。このちよつとした空間は幸いにもモンスターはいなかったし、あの場所も目に入らない。

少し考えれば分かるはずだ。私が殺したのだ。

もし私が念を重ねてスプリーシユルーマンを追わなかったら、素人のアスナが実つきを攻撃することも無かった。

いや、もつと前、私が始まりの街から連れ出さなければ……生き残るといふ事自体は達せられた筈だ。

いや、それよりも前——そもそも私が誘わなければ良かったのだ。普段ゲームをしない彼女の事だ。きつとお兄さんのハードを使おうなんて考えには至らないだろうし、いつも通りに学校に行つて、勉強して、友達と喋つたりなんかして……家族に『ただいま』と言えた筈

なのだ。

気づけば、目の前にアスナが立っていた。勿論、本物では無いことなんか分かっている。……顔は、怖くて見れない。

『人殺し』『何で私を見捨てたの?』『そんなにゲームが楽しかった?』

「違っ…そうじゃ…!」

違わない。何も違わない。私は一時の欲求の為に危険に晒し、見捨てたのだ。

『ずるいよ』『私は最後まで闘ったのに、一人で逃げるなんて』『卑怯者』『あなたが私をここまで連れてきたんでしょ』

「ごめん…ごめんなさい…っ、ごめん…ごめん…」

『謝ってももう遅いよ』『いっつもそう。深澄が上手だからって一人で舞い上がって』

「嫌…私、そんなつもりじゃ…」

そして、傷口が開いた。

『ミトだけ最後まで生き残るんだもん。全然面白くない。…こんな事なら——』

「待っ…アス——」

——深澄と友達になんてなるんじやなかった』

伸ばした手は宙を掻き分け、やがて力なく下ろされる。

それはまるで、産まれたばかりの赤子が知らず、母親を求める様な仕草であった。

胸の内が虚無感と喪失感に支配される。思考は呪詛に冒され、妄想世界だというのに頭はひび割れそうな程に鳴り響く。

心を覆っている硝子は砕け散り、その中枢に深く突き刺さる。

こんなにも世界は暗かっただろうか。こんなにも、恐ろしいものだったか。暗雲は立ち込め、灰色の雨がしんしんと降り注ぐ。

移動しなければと冷静な部分顔を出す。

体は竦んで動かない。子供のように、膝を丸めてただ震えているだけだ。フーフーと、何かが漏れる音がする。

私の体ではない。本物の私は今頃病院のベッドに寝かされ、点滴による延命が為されているだろう。この体は、所詮はデータに過ぎな

い、空っぽな体。だから、動けるはずだ。動けるはずなのだ。

そんな意思とはお構いなしに、体はガクガクと情けなく震え、嗚咽を漏らす。ゲームはどんな感情でプレイしても、決まった動きを出来る。故に、動こうとする意思が勝つはずだというのに…。

これが茅場晶彦の見た景色だというのなら、なんて趣味の悪い男なのだろうか。いや、そもそも1万人をゲームに閉じ込めるという事件を起こした時点で、既に正気ではないといったところか。

なんて、責任転換を試みたけれど、関わらせたのは私。私がどうやった所で干渉出来たのはアスナしかいないのだ。

ああ、なんてこんなにも弱い。βテストで最後の最後でボスを拜めたからといって何になるのか。曲がりなりにも強い等と思いついていたのだろうか。下手に手を伸ばすから、全てを取り零す。

現実世界ではもう12月になるうかという時。精密に再現された気候はS A O内でも同じの様で、寒風が涙を攫う。

…涙？

そう、涙だ。ぽろぽろと雫が肌を濡らす。いくら最先端の技術で五感まで再現しているナーヴギアとはいえ、液体はあまりに流動的過ぎて、僅かな違和感を感じる。気づけば、頬を伝うほどに長く、衣服を濡らすほどに多く泣いているらしい。

「ふっ…ふぐっ…う…ううっ…！」

…泣く資格なんて、私には無いのに。

私は一体何がしたかったんだろう。私と違って、コアなゲーマーでもない明日奈を誘い込んで、一緒に攻略したいから等と利己的な感情で安全圏から引き摺り出した。守ると誓って、調子に乗って、人が死ぬ所を間近に見ても、『私はこうはならない』なんて慢心した挙げ句、親友を殺した大馬鹿者。

「うううううう…、うああああつ…！」

そうやって、痲癩を起こした私の耳は、新しい物音を捉えた。モンスター活動音ではなく、人の足音だ。

「隣、よろしいですか」

返事を待つまでもなく、隣に座り込む誰か。何処かで見覚えのある

銀が映える男だった。

ただ、その人は何も言わず、何も話さず、ただ本当に休みたかっただけ。それがまた、誰にも頼れないということを表して、気分が悪かった。

そして、こんな時でも、私の体は睡眠を求めている。あれ程のことがあったからか、泣き疲れたからか、私の意思と相反する気持ちかせめぎ合う。

きつと、ここで眠ってしまったら次に起きるのはあの世になるだろう。そうやって、うつらうつらと、ただひたすら耐えていた。そう、孤独に、独りで。大人に頼るなんて考えはもうない。だって、ゲームは全て数値で決まる。βテスターである私を憎んですらいるプレイヤーも居ることだろう。だから、これからはソロプレイヤーとしての自覚を持たなければいけない。

でも、その前に一眠りくらいはさせてくれる筈だ。そうに違いない。

なんて、都合のいい事を反芻してみたけど、もう限界に近い。思考が沈静化されるのがはつきりと認識する。身体は微睡みに沈んでいく。…相変わらず、優しくないゲームだ。自らの体に爪を立てても、痛みは無いし、眠気が抑制される事は無い。

駄目だと分かっているのに、脳が休めと強要してくる。

そんな眠気に抗っていると、低く、優しく、落ち着いた声が届いた。「……そのまま寝てください。番は私が務めます。……見ず知らずの男にこんなことを言われても警戒するとは思いますが、どうか信じてください。……せめて、貴女の夢見が良いものでありますように」

そう、か。なら、少しだけ言葉に甘えようかな。

そんな思考もおおざなりに、私の意識は数秒と保たず、安寧の奥へ沈んでいくのであった。

## 星屑の夜のカープール

「…落ち着きましたか？」

「…まあ、それなりには」

あの情けなくも利口に逃げ延びた時刻から既に六時間が経過し、目を覚ました頃には紅く染まっていた空には漆黒の帳が降り、どういう訳か月が顔を覗かせている。

ホーホーという夜専用のフクロウ様な環境音が耳に届き、否応なくここがSAOの中であることを実感させる。…：…いつそのこと、夢ならば良かったのに。そう考えるのは、ただの逃避なのだろう。

(それはそれとして…)

ズズズ…と手渡された香りのきついハーブティー(のようなもの)を飲み干した。その拍子にチラリと、横目で件の人物を見る。顔も動かさずに視線を定めた筈だが、すぐにこちらの目を見てニコリと微笑む男。

後ろで纏められた長い銀髪と、やや中性的な、それでいて男性らしい顔つきが特徴のプレイヤー。ここまで顔がいいと、彼だけアバターのままなのかと疑ってしまう程に整っている。

「…う…どうかなされましたか？」

そうだ。どこかで見ることがあると思ったら、β最後の日。

第十層の迷宮区で、行きずりのパーティーを組んだプレイヤー。

…：…あまりに姿が変わらないのは、多分、アスナと一緒でリアルの容姿を使っていたから…：…

髪色を変えているということは、あの面倒くさい専用クエストをクリアしたという証明。つまり、最低でも一層ボスに挑める程度のレベルは既にあるとみていいだろう。

私と同じ白いマントの下には見たことのないプレートアーマー、恐らくはプレイヤーメイドの中でも現状最高級の品だろう。腰に携える剣は片手直剣でありながらレイピア種にも近い刀身の細さ。…こちらにも、β時には見なかった物だ。

何にせよ、私には関わりのない事だ。彼のおかげで助かったのは否

定しないが、これ以上踏み込むこともないはずだ。迷惑でもかけない限り私の行動にあれこれと言われる筋合いも無い。

「POTと護衛はありがとう。助かったわ。…それじゃあ、私は行くわね」

装備や手慣れた仕草から、β同様にフロントランナーとしてやっていけているのだろう。きつと、あの時の剣士もそこにはいるのだ。

「…っ」

胸の奥がキュツと締まるような気がした。一瞬だけ浮かんでしまったありえない未来。

私がアスナと一緒に最前線を走破する情景が、いつか出られるという理想を抱いた己の姿が、まるで水底に絡む汚泥のように纏わりつく。

ひよつとしたら、あの時に助けられていたら、実現していたかも知れない景色が私の脳内を駆け巡る。

「お待ち下さい」

「っ何？」

我に返ると同時、背後の彼が立つ気配がした。重金属装備と軽金属装備の中間のようなガシャガシャとしたノイズを響かせながら、足音は確かな歩みで近づいてくる。

「そのような顔をした女性を行かせる訳には行きません。…何か、悩みを抱えているのではないですか？私で良ければ聞かせては頂けないでしょうか。…：勿論、無理には言いません。人は誰しも、他人に触れられたくない事があるのは分かっています。その気がなければ…分不相応な申し出だとお忘れください」

こちらを気遣うような、何処か憂いているような伏せがちな瞳は、遍く照らす眩いほどの光は感じられないものの、夜闇に浮かぶ三等星の如き静かな輝きを帯びている。

口元は固く結ばれ、表情は真剣。ゲームだから、子供だからという外装のない、純真でまっすぐな思いの現れ。

…この人は恐らく、私がどんな年齢で、どんな境遇であろうとも同じように尋ねるだろう。そんな気がした。

「……………」

でも、こんな事を、友達を見捨てたなんて、軽々しく云えない。口に出すのが恐ろしく、気にかけてくれるその表情が私を責めるものに変わるのだと考えたら、恐ろしくて仕方がない。

自分の行ってしまった事を再び焼き付けるのだと思えば、紡ぐべき言葉がほつれてしまう。口に出したいのに、出してしまういたいののに、臆病で自分勝手な私はその一步を乗り越えられない。

あの時もそうだ。私は勝手に諦めて、彼の声なくしてはボス部屋へとたどり着けなかった。結局の所、私は一人では弱いままなのだ。状況が悪くなったら、すぐに諦めてしまう。……それこそ、友達の命がかかっていても…。

「……出過ぎた真似をしました。私はこれにて」

暫くの沈黙の後、そう言つて踵を返した。その顔は申し訳無さそうに歪められ、沈鬱な空気を携えている。

瞳を閉じる。私は、何なんだ。調子に乗つて、すぐ諦めて、拳げ句、まだ迷うというのか。そう言つて、また逃げるのか。

「待つて！」

大柄な体格を揺らしながら身を翻す彼に、気づいたら手を伸ばしていた。その言葉を出したのは、或いは偶然だったのかもしれない。それでも、ここで下がればきつと後戻りできない気がした。…いや、実際に私は折れていただろう。

「話す、話すわ。私の悩みを、聞いてください」

——私は、事のあらましを話した。

それはさながら懺悔の様でもあり、泣きはらす童子とも似た慟哭であつた。

彼は時に親身に、時に真摯に受け止め、軽蔑するでもなく聞き入っていた。

「…私は面識がないのであまり偉そうなことは言えませんが、きつと、ご友人はあなたを恨んではいませんよ」

「どうして…？アスナは…私が殺したようなものじゃない…」

「そうですね。確かに、その時は裏切られたと、一瞬でも思つてしまう



のは人間として当然の反応でしょう」

なら…と口調を荒らげそうになるが、彼の纏う空気は穏やかなま  
である。

「しかし、それが必ずしも人の本質ではないと私は考えています。普  
段は仲睦まじかったのでしょうか？楽しかった思い出も、その時抱いて  
いた想いも、本物だった筈です」

それは…そうだ。あの時は、放課後のあの一時は、二人で他愛ない  
話をして、ゲームをプレイしたりなんかもして……。あの記憶は、偽  
物なんかではなかった。このデスゲームにおいても、アスナと一緒な  
ら生きていけると、そう本気で信じられる程には輝かしい記憶だった  
のだ。

「きつと、そのご友人も同じ気持ちです。貴女が自分を責めるように、  
彼女は疑心暗鬼に陥っているかもしれない。……ですが、本質のと  
ころでは変わっていませんよ。……私の直感ですが、こういう時の勘  
は、割と当たるのですよ」

「でも…アスナはもう…」

死んだ。……そう続ようとする私の目に、彼のメッセージジウインド  
ウが可視化される。

「ご友人、アスナ殿の綴りは『Asuna』で宜しかったですね？」

「え、ええ。それが、どうしたの…」

そう答えると、彼は先ず頭を下げた。

「申し訳ありません。先の話の際、私の仲間にメッセージを打たせて  
もらってしまいました」

「なっ…」

「はじまりの街にいる仲間にも生命の碑を確認していただきました。  
……心してお聞きを」

ドキリと、無いはずの心臓が大きく跳ねる。血潮が騒ぎ立て、心が  
逸る。今再び、その事実を、アスナが死んだことを認識させるのだ。  
きつと、今の私には甘い幻想よりも、辛い現実が必要なだろう。  
紡がれる言葉を予測し、さあ来いとばかりに身構える。

しかし、その後に放たれたのは予想もしていない言葉であった。

「彼によると、アスナというプレイヤーの名前には死亡表記は無いとのことでした。無論、同名プレイヤーは存在せず、綴り間違いも無し。他パーティーにも協力を要請し、三度の確認を通した、信頼のおける情報です。……つまり、あなたの友人は生きていますー!」

はつきり言つて、ただの出鱈目だと思つた。どうしてあんな状況で生き残つたと信じられようか。下手な慰めはいらないと答えようとしたが、それを裏付ける事も見つかった。

「時に、まだフレンド登録は継続していますね。このソードアート・オンラインの仕様では、ログアウトしているプレイヤーのネームは半透明になるのです。あなたの目には、はつきりと浮かぶ名前が見える筈です」

ハツと、今まで思い出してすらいなかつた情報が蘇る。急いでフレンド欄を開くと、その天辺に黒黒とした独特の書体で浮かぶ『Asuna』の文字。

「あ、ああ……。よ、良かった……。生きてる、生きてるっ……!」

それを認識した途端、膝から下の力が抜けて崩れ落ちる。目の前にいる彼すら気にならない程に、この時の私は周りが見えていなかった。しかしまあ、それも仕方ないだろう。

きつと、どれだけ繰り返しても同じ反応を返していたのだろう。

「あ、謝らなきゃ。ごめんって、今度は見捨てないって……!」

自然、ぼろぼろと涙が零れ落ちる。拭っても拭っても尽きない雫が視界を歪ませ、嗚咽を漏らす。

そんな私に、彼は何をすることもなくただ側に佇んでいた。

散々泣いたからか、少しだけ視線が恥ずかしい。幸い涙やけ等はこのゲームでは表示されない様で、その痕跡は今やないと言えるだろう。

肝心のアスナへのメッセージは、今がもう夜遅いと言う事で後日送ることになった。…本当は、怖気づいた私が遅らせようとしたけれど、真剣な顔で無事な内に伝えられることは伝えた方がいいと言われたので、決定した事だ。

「…その、ありがとう。守ってくれた事も、相談に乗ってくれた事も。きつと私、あのままだったらアスナが生きてることも知らないままだった。…本当に、ありがとう」

心の底から捻出された嘘偽りのない言葉。彼から貰った食料を腹に収め、街への帰路を辿っていた。人工物のないこの森では、きれいな星空が天蓋を覆っている。今までは意識する余裕など無かったが、この状況というのは中々無いものだ。

何せ、夜道を二人、年上の男と歩いているのだ。それも、ただのバターではなく、現実の体をそのまま写した姿なのだ。

身長はかなり高く、体はゴツすぎないが、決して華奢ではない。そして、日本人離れた幼さの残るが大人の男性という顔つきは、思春期女子には少しだけハードルが高かった。これがゲームで無かったら双方気まずい思いをしているだろう。と予測してみるが、結局、ゲームでなければこの人物とは出会えていないのだから、無意味な事だろう。

「そういえば、何でβテストの時に私が女だって気づけたのかしら？声も変えていたし、あんな大柄で猫背なおじさんを女だって判断する要素は無かったはず何だけど」

あの後、意見交換をし、あの時の人物だということが判明してから、胸中を占めていた疑問の一つでもあった。さては、何か見落としていたシステムでもあったのかと勘繰り、予測を出す前にベデイヴィエールが答えた。

「ああ、それは癖のようなものですね。咄嗟の足の動かし方や、ふとした時の仕草、指先の動きなどから推測致しました。職業柄、人の仕草等には敏感でして」

今のでリアルの事に触れたと思ったのだろうか。ミトは謝罪するがベデイヴィエールは気にした様子もない。…やがて、話のタネが尽きたのか、無言の時間が訪れる。

一人は星を、一人は空を。

ただ並んで歩く姿は中々様になっていた。

「そういえば、あんな食料アイテムって一層にあったかしら？塩気の

あるおつまみ系統はもつと後の層からしかないと考えていたのだけ  
ど」

「ああ、あれは私が作ったものですね」

「料理スキルを取っているのね」

少し驚いた。もつと終盤で、そこそこの場所で留まっているプレイ  
ヤーならともかく、数少ないスキルスロットに、現時点で非戦闘系ス  
キルを入れているとは思わなかった故に、その実力と余裕に驚かさ  
れた。

「いえ、料理スキルは持っていませんが」

「ん？」

唐突に、嫌な予感が吹き出す。さて、βテスト時には自力料理はそ  
もそも成功率が恐ろしい程低く、作れたとして味は無いに等しい物  
だったが、これにはちゃんと味付けがされていた。

料理スキルでないのなら、残るスキルは一つ。

「……さつき食べたのって、何かしら？」

『『クロール・センチピードの足』の塩焼きですね』

「……………聞かなきゃよかったわ」

結局、味自体は軟骨等に近かったなので、これはデータだと言いつ  
けることで美味しく頂いていた光景があったとか。

## 待つべき者は友

昨夜の雨の名残もすっかり消え失せ、水気一つない快晴を伺える。のどかな様相の村落は朝日が出る頃には幾人かの人影が伺えた。とはいっても、それらは全て定められたルーチンワークに則って行動する心を持たないNPCであるのだが…。

第一層、階層全体から見ても北西寄りの小村。村中央の広場には、決して大きいとはいえない質素な造りの噴水が景観を彩り、固められただけの土の道がなんとも牧歌的な雰囲気を作り出している。が、それだけだ。

一応《スタッド》という固有名称こそあるものの、プレイヤーの大半は一時的な休息程度にしか立ち寄らない為、名前を覚えているプレイヤーは少ない。

現在、この村にプレイヤーが殆ど滞在していない。ここが前線に近い場所ならともかく、今は《トルバーナ》が最前線の宿である。当然、前線から下がりかつ小規模な村に滞在する物好きはいない。

「嘘、そんな!？」

その物好きの一人、薄紫の髪に赤い瞳、濃紫の服を身にまとう少女の動揺に彩られた声音が響き渡る。その声は早くにクエストを終えて帰ってきたベディヴィエールに届いていた。

「どうされました?」

先日と変わらない態度で接してくる彼に話す。起床し、一時の無駄も許さないとばかりに手早くホロキーボードを叩き、アスナへとメッセージを送信したが、メッセージの届かない場所にいるという無機質な回答のみが残された。

「それは…フレンド・メッセージではないのですか?」

「ええ、それは間違いないわ。本サービスで仕様が変わってもいい限り、届くはずなのよ」

これがインスタント・メッセージならば、まだ屋内にいたと考ええることも出来た。あれだけの事があったのだから、安全圏に閉じこもっている、あるいはまだ寝ているかと一時の納得は可能だろう。

一方、フレンド登録している相手のみ送れるフレンド・メッセージだとすれば、話は変わる。前者よりも文章が送れ、屋内や他階層でもメッセージが届く。

しかし、それでも送信不可能な場所にいる。そこから導き出される答えはS A Oプレイヤーならば直ぐに行き着くことが出来た。

「ダンジョンに潜っている……」

そんな筈があるものか。そう叫びたい気持ちはあったが、隣の彼を見て抑える。表面上は何事もないように見えるが、頭の中で渦巻く疑問は止まらない。

何故、何故このような時間にアスナがダンジョンに潜っているのだと。

「ご友人：アスナ殿はいつもこの時間帯に狩りを？」

「た、確かにフィールドに出るのはこのくらいだったけど、でも彼女は一人でそんな危険な真似をする訳ないわ！才能はあったけど、まだ初心者の域を出ない。S A Oの事だってロクに知らないのよ!? 一人でダンジョンに向かう筈が……」

そう強く否定しようとしたが、言葉尻を窄める。目の前に浮かぶメッセージ画面が、何よりもその推測を現実たらしめていたのだから。

「第一層にあるダンジョンはそう多くない。……でも、どうして……」

困惑と悲観の入り交じる複雑な視線で射止めるのはフレンド欄に唯一存在するA s u n aの黒文字。それは何よりもアスナの生存を知らせるものであったが、いつ灰色になるか分かったものではない。

「レディ、落ち着いて考えましょう。闇雲に探し回っても、却って逆効果となります。ひとまず、今日一日様子を見ましょう」

そんな悠長に待っていられない！感情はそう訴えるが、頭の冷静な面を働かせる。

ダンジョンを手あたり次第に探ったとて、迷宮構造になっているものなどもあり、同じダンジョンに居ても行き違いになる確率はそう低くない。それに、まだ潜っているダンジョンを特定出来ないのだから、むしろフレンド・メッセージが送れなくなってしまう。

「……そうね。確かに、それが一番合理的だわ。……ごめんなさい。私、冷静じゃなかった」

そう、何も今すぐに死ぬという可能性だけではない。あの準備のいい彼女の事だ。ポーシヨンや予備の武器だつてしつかり用意している筈だし、ダンジョンには安地部屋だつてある。引き際は弃えている筈だ。

そう頭を振るい、今後の話へとシフトする。

「そうですね…。一時間おきにメッセージを送り、我々は別の作業をする…。というのはどうでしょう。場所が分からない以上、この程度の案しかありませんが…」

「いえ、闇雲に探すよりはマシよ。流石にトラップなんかは警戒していると思うから、多分、余程の下手を打たなければ…。大丈夫だと思うわ」

最後の一文にはそうであつて欲しいという希望が大いに込められていたが、気づいていても口にはしない。皮が引きつるほどに強く拳を握っている様子から、やはり我慢を強いているのだろう。その事実がベディヴィエールの胸を刺すが、すぐに切り替える。

「ここはスタッドだから、そうね。この近くにPOPするモンスターに少し用があるの。……今までありがとう。アスナに会えたら報告するわね。……それじゃあ、さようなら」

そう言つて身を翻すと、早速とばかりに駆け出そうとする。けれど、彼はこう続けた。

「この周辺ということは、アスナ殿に送るウィンド・フルーレ。狙いはワスプとコボルドでしょうか？」

「…ええ、そうだけど」

「私もお付き合ひしましょう。仲間と合流するまでは時間は空いていきますのでお気になさらず。勿論、素材は全て譲渡しますとも」

流石にそこまでしてもらう訳にはいかないと訴えたが、二人で乱獲した方が早いのも事実。まさかPKではあるまいと自分に言い聞かせ、こちらが折れる形で手伝つて貰う事となつた。

パーティー申請は、送らなかつた。

「まだ届かないの…?」

「……一日中籠もっているのでしょうか? 聞く限りではそういった危険な橋は渡らない人物の様に伺えました」

強化素材がある程度以上集め、狩りも一段落した頃には西陽が水平線に沈みかけていた。

夕闇が空の境目を別ち、緑々しい若木に影が落ちる。時刻は7:00、早朝の狩り開始から実に13時間、毎回欠かすことなく送り続けているが、ただ一度たりとて届いていない。

「夜遅くまでのプレイは危険って教えたわ。集中力は落ちるし、眠気や疲労も溜まるもの。それに、帰路だってソロなら探知スキル無しでは厳しいし…」

考えられるのは、早朝から今この時まで、ずっとダンジョン内から出ていない事だ。一応、ダンジョンに泊まり込むという事も無くはない。ちゃんと準備さえ整っていれば何の問題も無く日を跨ぐことは可能だろう。

しかし、それが今までの習慣から遠く離れた行動であるならば危険と言わざるを得ない。いかに安全地帯があり、命の危険が無いとはいえ、その周囲ではモンスターの蠢く音が絶え間なく響き、却って気力を持っていかれる事もあり得る。

VRMMO初心者がいきなり慣れさせもせず始めるのは得策でない事だけは確かだろう。

「やっぱり、私探しに…!」

「安全地帯で一夜を過ごすという選択も無いわけではありません。あなたの安全の為に、明日まで待つべきです。もしかしたら、翌日には抜け出しているかもしれません。どうか、今は抑えてください」

そう告げると、彼女は不承不承といった様子で引き下がっていた。

「…ごめんなさい。私、もう寝るわ。明日に備えなきゃ…」

覇気のない顔に影が浮かんでいるのは見間違いではないだろう。実物以上に小さく見える背中は幽鬼の如く、そのままの様子でNPC



民家に姿を消した。

：無理をさせてしまったのかもしれない。昨夜の失意からの復活、今朝の困惑。今夜での心配と、感情の起伏が激しい部分が多すぎた。その様子を、ただ見ていることしかできない自分が情けなくて仕方がない。こんな時だからこそ、安心が必要だというのに。

「ままならないものですね…」

ちらと、防具の下に存在する無機質な輝きを放つ腕を撫で、呟いた一言は電子の風に攫われていった。

## ザ・ビフォー・ザツト

「俺は一体、何をやってるんだ…？」

### 第一層、迷宮区。

最南端にある《はじまりの街》の真反対、北の果てに聳え立つ巨塔。次の階層へとつながるボスフロアのある、第一層における最前線。その一角にて、その少年は頭を抱えていた。

青いポロシャツに、最低限の守りさえあればいいと言わんばかりの軽装は、さながらA G I型のプレイヤーに見えるが、その実バリバリに前線を張るソードマンである。背には、見るものが見ればよく鍛えられていると分かる幅広の片手直剣、《アニール・ブレード》が下げられており、この迷宮区をたつた一人で、ごく自然体で歩めているという事実にはこの少年の実力の高さが伺える。

「ぬおおおおおっ…！」

しかし、少年は今、おおいに顔を盛大に歪ませていた。見れば、何か大きな物体を引きずっているではないか。ソロ攻略に於いて、両手が武器以外で塞がってしまうような状況はご法度。ましてやそのまま迷宮区を進むなど、論外である。

では何故、その様な行動に出たか。それは少年が運んでいるモノにあった。

ずりずり、ずりずりと、摩擦を受けて土煙を上げるのは、少年がすっぽり収まってしまいそうな長方形の物体——結論から言うならば寝袋だ。彼の趣味に合わせた黒色の外時の寝袋を連れ歩く様は、見ようによっては一昔前のR P Gに酷似しているだろう。

本来ならば無人であるはずの寝袋にはなだらかな膨らみが浮かび、その口からは綺麗な栗色の髪を持つ少女が、死んだように眠っているのが伺える。この状況でも全くの反応が無いのは、肝が座っているからか、はたまたそれほど疲れていたと取るべきか。

ある意味では某国民的R P Gと同じだと言ってもいいが、その状況とは明確に異なる点が二つあった。

一つ、この世界がデスゲームである事。ゲーム内での死が現実の体

にも死を与える。当然、教会に連れて行っても生き返らない。…というより、そもそも中の人物は死んでない。

二つ、この少女は少年の仲間でも何でも無い、たまたまこの場で出くわしただけの他人だということだ。

全くもってらしくない事をしている自覚はある。だが、あのまま見過ごすというのも目覚めが悪い。

こんな序盤では装備重量やストレージ容量を抜きにしてもプレイヤーを抱えるというのは難しい。STR一極型でも無ければ要求値が圧倒的に足りないのだ。

よって、苦肉の策というか、現状出来る唯一の方法、寝袋に入れて引き摺るという通常ならば考えすらしない暴挙に出たのだ。

「もう、少し…!」

視界端に映るマップから、迷宮区の終わりが近づいているのを認識し、速度を上げる。そのままの勢いで外へ飛び出すと、陰気な迷宮区とは一線を画す、生命力あふれる樹林が目についた。思わず一仕事終えたとばかりにも出もしない汗を拭う仕草をしてしまった程である。

「とりあえず…ここはまだ危険だな」

最も危険な迷宮区から脱したはいいものの、まだ危険は潜んでいる。何より、前線プレイヤーが何度も出入りする入口でこの様な姿を晒すのは、精神衛生上俺にも彼女にも悪いだろう。

もしこれが現実ならば、こんな強硬策は取れなかった。…いや、ゲームじゃなきゃこんな状況に出くわすなんて無いんだけど…。

そんな風に言い訳がましい事をつらつらと考えていると、そこそこ良さげな場所についた。取り敢えず寝袋をストレージに収納し直し、護衛を兼ねて近くの木陰に蹲る。

2, 30分くらいだろうか。暫し待っていると、物音が聞こえた。視線を右に戻すと、件の細剣使いが体を起こしてこちらを見つめている。その表情は、お世辞にも好意的とは言えないものであったが…。

「余計な…(こ)ことを」

目覚めて一言目がこれだ。普通なら、この状況に対する疑問などが湧くだろうに。頭の回転は早いらしい。

「あんたを助けたわけじゃない」

「……なら、何で置いていかなかったの」

「助けたかったのはあんたが持つてるマップデータさ。最前線近くで四日もこもつてたなら未踏破エリアもかなりマップピングしたはずだ。それがあんたと一緒に消えるのがちよつと勿体無くてね」

一応、嘘は言っていない。助けたいという気持ちが無かったとは言わないが、それと同等には今言った内容が惜しくもある。何なら、この細剣使いの身のこなしを見るに、将来的には突出したプレイヤーになるべきセンスを持っていた。…そんな剣士を見てみたいという想いも、少しはあったのかもしれない。

表面上は理論と効率を矢面に出した合理的な主張には流石の細剣使いさんもつつけんどんにはいかないらしい。

無言で手を翳し、慣れた仕草でメニュー画面を表示すると、映し出されたマップデータのホログラムが羊皮紙風の巻物にたちまち変わる。

無駄に正確に投げられたそれを難なくキャッチし、見事にマップデータを入手、そして俺のデータが更新される。やはり読み通り、俺すら通っていない道や分岐路の多い道も埋められている。四日籠もったというのは伊達ではない様だ。

「…マップデータは手に入れたでしょ。もう行っていない？」  
言って、再び踵を返して迷宮区へと向かおうとする彼女を呼び止める。

「待てよ、フェンサーさん。あんたも、基本的にはこのゲームをクリアするためにがんばってるんだろ？なら《会議》には顔を出してみてもいいんじゃないか？」

「……………会議？」

問い返す細剣使いに俺は今朝手に入れた聞きたてホヤホヤの情報を披露する。

「ああ、今日夕方、迷宮区最寄りの《ツールバーナ》の町で、一回目の《第一層フロアボス攻略会議》が開かれるらしい」



「…一度戻りましょう」

「……いいえ、もう少しだけ粘りましょう」

「ですがこれ以上は《会議》に遅れてしまいます」

「でも…」

所変わり、迷宮区上層。群がるコボルドを一掃し、意見を違える二人組がいた。

後ろで結んだ銀髪の騎士風の男と、薄紫の髪と赤眼の鎌使い。いわずもがな、ベデイヴィエールとミトである。

あれから四日、アスナが行ったことのあるダンジョンを虱潰しに見て回り、最後に残ったのがここ迷宮区であるのだが…。

正直に言つてここが最も可能性としては薄かった。何故なら、同じ階層に於いては迷宮区というものは基本的には難易度が高く、ソロ攻略も容易ではないからだ。

当然、最も大きいダンジョンなのだからそれだけ各所各所の移動に時間がかかり、自然と遭遇戦も増える。いくらなんでもあのアスナがそんな無謀な真似をするはずがない、という先入観からあの場所からは二番目に近いのにも関わらず捜査の手が及んでいなかったのである。

そして、迷宮区探索も二日目の今でも広さ故に特定個人を見つけるというのは難しく、移動しているかもしれない相手では何とも運任せだ。

「……いえ、そうね。戻りましょう。もしかしたら会議の噂を聞きつけて顔を出してるかも…」

希望的観測だが、もしかしたらという気持ちは拭えない。そして万が一、当のアスナがいなくとも、そこに集っているのは日夜ダンジョンやフィールドに繰り出す最前線プレイヤーなのだ。ルート、時間帯が多様な彼らの内ならば、目撃情報くらいはあるかも知れない。

アスナの所在が不明なまま四日が立ち、流石にこれほど生きながらえているからにはリスクヘッジはきちんとされていると判断した二

人。

若干の安心とそれなりの余裕を取り戻したミトは、当時と比べれば相当に回復してきていた。

「今は…3…20分。うん、急げば間に合うかも…」

「では参りましょう」

一度クールダウンさせた頭はそう簡単に熱されない。あくまで知的に冷静に。二人は即座に反転すると、戦闘が即座に可能な範囲の最速で駆け出した。

『グアアアアッ!』

「とうっ!——スイツチ!」

「やあああつ——!」

当然、狭い通路では遭遇戦は免れない。慎重に機を待てば最低限抑えることは可能だが、今は急ぎの用がある。逆に言えば、回避よりも倒した方が早いという強さの裏付けに他ならない。

「残党は!？」

「背後に二、無視が得策かと!」

「じゃあいいわ!直進!」

そう叫び、迫るコボルドを引き離す。このペースならば5、6秒後にはタゲが外されるだろう。白い外套はためかせ、迷宮区を共に疾走する姿には、どこか懐かしさを感じられる。

そう、β時代の、まだSAOが死の危険のないただのゲームだった頃の記憶だろう。

「っ、前にコボルドの群れ!先行するわ!」

「続きます!」

前に位置する五匹のコボルドをノックバックさせ、道を切り開く。抜けた先で相方の様子を確認すると、丁度ソードスキルを発動させる直前の斧を側面から強打し、不発による硬直と仰け反りを同時に発生させる瞬間であった。

「こちらは大丈夫です!先へ進みましょう!」

瞬時に身を翻し戦闘から離脱する。躊躇なく分岐路を右に曲がるのは慣れを感じさせる。

——やっぱり、強い。

ミトはこの四日間の交流でベデイヴェールを観察していた。

剣筋の実直さ、回避と防御、パリの使い分けがやたらとうまく、立ち回りも何処までも堅実で確実だ。傍目から見れば、突出した点はないが確実なスタイルにも見えるが、その全てにおいて完璧というに相應しい動きをしていた。

攻めと守りが完全に両立し、連携や撤退も、全てに対応可能な理想形。そして小柄なモブと人型に対しては、今までに見たどのプレイヤーをも凌駕する技巧を有していた。

はつきり言つて、今見せている動きも、私との連携を重視している様に見える、全力を出している風ではない。

だからこそ、 $\beta$ でもあれだけの余裕があったのだろうか……。本人のゲーム歴はMMOはおろか、そもそもゲーム自体をしていなかったという。そんな人物が何故SAO $\beta$ に抽選しようと思つたのが甚だ疑問だが、何やら事情があるようで詮索はしていない。

一体何故、ここまで強いのか。確かに、実際に体を動かしていた人の方がアクション性に慣れやすいとは聞くが、武道を齧っている人ならば、現実では出来ない拳動などに無意識に忌避感を抱く事が多いらしい。

それだけで判断するのはあまりに早計だが、結局この男の謎が更に深まるだけだったのは間違いない。大体、今この時世でこんな態度の人間自体絶滅危惧種だろうに。

と、まじまじと見ていると流石に疑問に思つたらしく、こちらに顔を向ける。

「レデイ、私の顔に何か？」

「いえ、あなたの事を考えていただけだから、気にしないで」

——それがいわゆる、『そういうこと』と誤解されかねない応答であることに気がつき、全身が熱感に包まれるのはまた後の話。

## いざトールバーナ

「割と普通に間に合ったわね…」

「まだあまりプレイヤーはいないようですね」

「ここは《トールバーナ》、噴水広場。」

会議の行われるという円形劇場の最前席に、二人は座っていた。時刻は3:50。思いの外帰路はモンスターと遭遇せずにこの町まで辿り着けたのだ。

黄土の石材製の階段状席には現実では見ない鎧姿の男達が座っている。数にして30程だがこの劇場からすれば空の席が大いに目立っている。正面台座には青髪の好青年風なプレイヤーがおり、恐らく彼がこの会議の主催者なのだろう。

そして肝心の人探しだが、どこを見渡しても茶髪のフェンサーはるか、女性プレイヤーの姿すら見かけない。その理由は男性比率が高ただけでなく、この時点で前に進む情報と意志を持った者が少ないからに違いない。もう少し時間がたてば追いつけるプレイヤーも増えるだろうが、まだ一ヶ月程度しか経っていない今では望みは薄だろう。

「まだ時間まであるから、もう少しは来るでしょうけどね。これでも多い方だと思うわよ」

「それは一体……なるほど。死の危険を覚悟したとて、それと結果は別という訳ですね」

「まあ、言っちゃ悪いけどそうね。実際、あなたはこのSAOで命の危険というものには遭っていないでしょ？恐怖に打ち克つだけじゃなくて効率や情報なんかも必要なのよ。悲しいことにね…」

目を伏せてそう吐き捨てるミト。危険を冒さなければ安全に生きられる。だが、強くなるには、先へ進むには否応なく死の危険に付き纏われる事になる。だが、情報も技術も平等ではない。こんな状況においても、こんな状況だからこそみんな力を合わせてというような綺麗な事は難しい。全く世知辛いゲームだ。こんな所まで現実にしなくてもいいのに。



なんて、この世界をどこかから眺めているであろうGMの姿を思い浮かべ——何故か半人半馬の機械武将が乱入する。なんだ今の。

「おや、少し遅れそうとの事でしたが…我々より早く着いているとは」「おおつ、その人が旦那のパーティーメンバーか？」

「やあーつと間に合ったわい」

「いよしっ出遅れ回避っ！危ねー！」

決められた刻限を待っていると、新たに7人のプレイヤーが到着し、気さくにこちらに話しかけてくる。男所帯のそれに私はつい顔を隠すようにフードを被る。

と、情報共有をしているだけに私を知っているらしい赤い長髪の男の人が私に目を向ける。…何だろう、何処かで見たような気がする。

「そちらのレディはメッセージにあったミト…で宜しいですね」

「え、ええ。そちらは？」

「私はトリスタン。こちらのベディヴィエールとパーティーを組んでいる者です」

「ええ…私も、仲間がいることは聞いてるわ。こんなに多いとは思っていなかったけど…」

ちらと、トリスタンと名乗った彼の背後を見る。トリスタンは剣帯は腰に差し、何故か左手に竖琴を持っており、胸元の開いた白いシャツを着用している。しかし、その後ろは皆統一された赤に染められた道中合羽を羽織っていた。そのうちの一人が放った台詞から、恐らくこのベディヴィエールと別れた後に合流しているのだろう。

「ありがとうございます。あなた方が私の人探しを手伝ってくれたのですね」

立ち上がり、綺麗な礼を見事にこなすと、何に驚いたのか彼らは一様に見をこわばらせた。

「おおつ、男おとおおつっ!?俺やあてつきりすんごい白人系美女だと…!」

「背え高っ!?!」

「が、顔面偏差値が高過ぎる…!?!」

…何とも騒がしい、もとい賑やかなパーティーらしい。今の叫び声

でプレイヤーの視線が集中した。

だけどまあ、気持ちには分かる。遠目で見たり、後ろ姿などは女性に映ることだろう。実際、銀の長髪は綺麗だし顔立ちも中性的で穏やか、背が高い事と体格が男性らしいといえはらしいが、鍛えている女性等、否定できる部分は少ない。更に今の姿は頭部以外は全身を金属鎧で固めており、体格が把握しづらかったのもある。

「ま、まさかこっちも男なんてことは…」

アフロ頭のふくよかな体型の男が私を指差す。割と失礼ね。

「残念だけど、私は普通に女よ。勿論ネカマでもないわ。…まあ、他M M O じゃネナベやってるんだけど」

そんな風に、ゲーム的冗談を言えば彼らの空気も和らいだらしい。「では僭越ながら、私から自己紹介を。私はベ DeV ィ ヲ イ エ ール。片手直剣と長槍を使用しております。以後お見知りおきを」

「私はミト。まあ、見れば分かると思うけど鎌使いよ。見た事は…：…ないわね。珍しい武器種だから無理もないわ」

今更ながら、このゲームで鎌使いを見かけた事はβ正式含めても一度もない。確かに扱いが他の武器とはかなり異なるし、長物の割には突く事が出来ず、攻撃判定の高い刃部分を当てる事すら難しい武器。…：…それでいて、手数はそこそこ、一撃の威力は並と、そんなにメリツトがない。強いて言えば特殊な形状故の攻撃パターンがあるくらいで、それもどちらかといえばPVP向き。デスゲームと化したSAOでは然程活かせるものではない。

まあ、私も最初はR ロールプレイ Pで選んだものだから苦労した。今ではこれ以外には身を任せられないと思う程度には慣れてきているが…。

一步踏み込んだ一人が胸を叩く野武士面の男。赤い頭髪に悪趣味なバンダナ。腰にはこの階層では結構強めの曲刀『スチールシミター』を下げている。他プレイヤーの反応から見て、きっと彼がリーダー格だろう。

「んじゃあー俺はクライン！まあ、ある奴を追っかけようと頑張ってたところにトリの旦那がいてよ。レベル上げとかに付き合ってくれて来れたっつう訳よ。こいつらは俺のパーティーの一員で右からカ

ルー、オブトラ、トーラス、ジャンウー、アクトだ。よろしく頼むぜ  
ミトさん！ベデイヴィエール！」

「雑うっ!？」

「ええ〜っ、そりやねえよリーダー!？」

「そんなついでみたいに!？」

「自己紹介くらい俺たちにやらせてくれよー!？」

このやり取りだけでも彼らが気のいい間柄であることが伺える。

「俺らはリアルでもダチ同士でよお、ゆくゆくはギルド『風林火山』を  
立ち上げてやんだよ!？」

リアルでの友達、という言葉に胸の奥がズキッと痛むが彼らは関係  
ない。一々目くじらをたてるのは筋違いだ。

「……そう。もうギルド設立を考えてるなんて余程仲がいいのね。風  
林火山というと、あの武田信玄が元ネタ?？」

「武田信玄……ああ、日本の武将ですね。ええ、知っていますよ。甲斐  
の虎と呼ばれた英傑であったと聞きます」

ベデイヴィエールが知っているのも中々興味深いが、彼らの様相的  
に中々合っている名前だと思う。フードを道中合羽風にカスタマイ  
ズしているのも武田信玄リスペクトだろう。

「ベデイヴィエールさん、それでアスナっつうプレイヤーは見つかつ  
たのか?？」

「……!？」

何故それを!?!?かつと頭に血が上りかけ、直前のベデイヴィエールの  
台詞を思い出す。ああ、成程。このパーティーが、恐らくトリスタ  
ンと一緒に黒鉄宮にて名前を確認してくれた協力者なのだろう。な  
らば、ベデイヴィエールからの依頼だと思って当然だ。

「いえ……実はまだなのです」

「おう……そうか。えと、そのアスナ……って人は知り合いか何かか?そ  
れとも……もしかして彼女とかだったり?？」

恐る恐る、といった様子で何うクライン。頬を描いて恥ずかしそう  
に問う彼は何やらだらしない顔をしている。

眉を寄せた私を気遣ったのか、ベデイヴィエールが口を開こうとす

るのを目で制する。

「アスナは私の……親友よ。5日前から連絡が取れないの。彼は私に付き合ってくれてるだけ」

そう言うと、クラインも流石に気がついたらしい。真面目な表情に戻って気まずそうに向き直る。

「その、なんか…悪いな。事情も聞かないでよ」

「…いえ、大丈夫。気にしないで」

言ったとて、それで中々切り替えられるものではない。この周囲だけが沈黙に支配される。その緊張を切ったのも、またクラインであった。

「……その、聞いちまったお詫びって訳じゃないけどよお。俺の話も聞いてくれねえか？」

「……」

「俺よお、さつきある奴を追っかけようとしてるつつつたろ？そいつはβテスターで、素人だった俺に戦い方をレクチャーしてくれたんだよ。あいや、俺が頼み込んだのもあるけどよ。SAOがデスゲームだって分かった時にも、そこ1、2時間程度の関係の俺を誘ってくれた様な奴でよ、でも俺は断っちまった。仲間がいるから先へ行ってくられてな。俺自身、その判断は後悔しちゃいねえけどな…。見た所、ミトさんと同年代くらいかもしれないねえガキンチョに、大人の俺はあんな顔させちまったんだよ」

「それは…」

——私と真逆。

親友を有無を言わず連れ出した私と、赤の他人を見捨てずに誘い、事情を聞いたその人物。積極的に手を差し伸べた彼と、助けを求めている彼女を利己的な理由で見捨てた私。

似ているようで、全然違う。方向性は似ているけど、その根幹にある思いの桁が違うのだ。だからか、だから、この人もそんなに沈んで…。

「多分、あいつもこの会議に参加すると思う。何たって、あいつは他のやつより頭一つ抜けて上手かったからな、別ゲーでもギルドの頭張っ

てた俺が言うんだから間違いない。そんであいつに言っちゃんだよ。『お前があん時教えてくれたお陰で追い付けたぞ』ってな！」

そんな、考え方が…。

「絶対えあいつ目ん玉ひん剥いて驚くぜ、んでんでうちの奴らも紹介すんだよ。お前は間違っちゃいなかったって、分からせてやんだよ。守られるだけとか心配されるだけなんてカツコわりい。ゲーマー舐めんなよってな！だから、そのサプライズの為にこの道中合羽で顔を隠して…ってそれはいいか。その…つまり、俺が言いたい事はな…：まあ、そんな気落ちすんなよって事だ」

「……………」

「…それだけ？」

「へ？」

「それで終わり？」

「お、おう…」

今度は、先程の緊張を伴ったものとは別種の静寂が訪れる。その原因は主に呆れ。とうとう味方であるはずの彼らからもため息が上がる有様である。

「リーダー…それはいくらなんでもないでしょ…」

「だからモテないんだよ」

「そんな深く考えてたのかとか感激してた気持ち返してくれよ」

「なっ、何だよお前ら!?!あとモテないのは一緒だろうがあ！」

何とも、締まらない人達だ。気づけば少し口角が弧を描いていた。

「ふふっ…ありがとう。私も、ちよっとは前向きに考えてみるわ」

「ち、力になれたんならよかったぜ！」

その後も軽い話を少し終え、彼らはまた離れた場所で腰を下ろした。残ったのはベディヴィエールの仲間のトリスタンというプレイヤード。

取り敢えず、こっちにも感謝と挨拶を…と思った所で時間が来たらしい。

「はーい！それじゃ、五分遅れだけどそろそろ始めさせてもらいます！」

実に堂々たる喋りが響き渡り、喧騒は一瞬で収まって中央に視線が  
集まった。

——会議が、始まる。

「私、もしかして空気なのは…?」

「あ、寝ていた訳では無かったんですね」

…始まる。

## 攻略会議——二人の騎士——

「今日はオレの呼びかけに応じてくれてありがとう！知っている人もいると思うけど、改めて自己紹介しておこう！オレは《ディアベル》、職業は気持ち的に《ナイト》やってます！」

澆刺とした耳障りのいい声で声を投げかけるのは青髪のイケメン。ふわりと助走もなく壇上に登った事から筋力、敏捷ともに高水準に達していることが伺える。

彼こそがこの会議の発起人であり、このコンタクトからでも良い人柄とユーモアが目立っている。壇上に立つ彼には口笛や泊手が少ない数向けられ、中には軽い冗談の応酬も続いた。会議の滑り出しとしてはこれ以上ないほどによい場面が整えられているだろう。

職業システムのないSAOにて、自称《騎士<sup>ナイト</sup>》は言葉を重ねていく。「今日、俺のパーティーが、あの迷宮区の最上層に続く階段を発見した。つまり、明日か、遅ければ明後日には、第一層のボス部屋に辿り着けるってことだ！」

どよどよと、プレイヤーがざわめく。20階から連なる第一層迷宮区はその名の通り迷路じみた地形とその層の多さによりマツピングが困難で、上へと登る階段はプレイヤー間で共有する程と言えば、その大変さが伝わるだろう。

「へえ…早いわね。でも会議を開くからにはそのくらいなきやね」

「あの青年…青髪…何かこう、最後の場面で致命的な間違いを起こしてしまふような予感が…」

「トリスタン卿、流石にそれは偏見が過ぎるといふものでは…」

「…はい。悪ふざけが過ぎました」

言っている間にも、また喝采が上がる。今度は彼の知り合い以外にも多くが声を出したらしい。見れば、集まったほとんどがそのカリスマあふれる言様に共感しているらしい。次第に拍手も大きくなり始め、それを察したディアベルが制そうと手をかざした所で、低い声が流れた。

「ちよお待ってんかナイトはん」

異を唱えるその台詞に、何故そんな事を…と疑問を抱きながら顔を向ける。階段型の席をいくつか飛ばしに降りてゆく。

「蝶が舞っているのですか？」

「ベデイヴィエール卿、あれは関西弁です。少し待ってくれないかという…。テレビなどで見かけるでしょう？」

「そ、そうなのですか…。申し訳ありません、我が家にはテレビを配置していないのでなんともし…」

何とも恥ずかしそうに答えるベデイヴィエール。このSAOでは表情を隠すのが難しく、頬は朱に染まっている。

それにしても、今のこの時勢でテレビを持っていないなんて珍しい、と思う。いかに一人暮らしとはいえスペックに拘らなければ安いものはあるものだが…そもそもあまり興味がないのかもしれない。

小柄ながらがちりした体格の男は前に立つと、ディアベルの美声とは正反対の濁声で唸った。…あのサボテンみたいなトゲトゲの頭はどういうフアツションなのだろうか。

「わいは《キバオウ》つてもんや。ボス戦の前にこいつだけは言わしてもらわんと、仲間ごっこはだけへんな。こん中にも五人か十人、侘びいれなああかん奴らがおるはずや」

唐突な乱入に、周囲のプレイヤーも困惑しているようだ。しかし、ディアベルはそれまでと変わって真剣な様相を作って尋ねた。

「侘びとは…誰にだい？」

確かに、この状況下でも冷静に務められる彼はリーダーとして優秀なのだろう。彼に促されたからか、少しは威勢の落ちたキバオウが、しかし憎々しげに叫ぶ。

「決まっとするやろ…これまでに死んでいった千五百人に、や。奴らが何もかんも独り占めしたから、たった一ヶ月でこないに死んでしもたんやろが!!」

途端、静かに場を見守っていた五十人近くの聴衆が、皆一様にぴたりと押し黙った。やっと理解できたのだ。キバオウが言っているのが元βテストの事であることに。もちろん、私も不意に放たれたそれに萎縮してしまった。今を生きる希望と、過去の失態は往々にして



両立してしまう。この場にいる殆どのプレイヤーも、思うところが無いわけではないだろうが、もしこの状況で立ち上がったら……。そう不安が湧いている。

ざわめきは却って奇妙な静けさと呼び、罪人を告発する現場の如き緊迫した空気が重い。皆、どうしたものかと顔を見合わせているのが現状。

その沈黙を打ち破ったのも、またディアベルだ。

「——キバオウさん。つまり、君の言う奴らとは……。元βテスター達の事、かい？」

「そうや。β上がりどもは、こんクソゲームが始まったその日に、ビギナーを見捨てて消えよった。奴らはウマイ狩場やら、ボロいクエストを独り占めして、自分らだけポンポン強なって、その後もずーっと知らんぷりや。……。こん中にもちーっとはおるはずやで。β上がりっちゆうことを隠して、ボス攻略の仲間にしてもらおかと思えとる小狡い奴らが。そいつらに土下座させて貯め込んだコルとアイテムをこん作戦の為に軒並み吐き出してもらわな。パーティメンバーとして命は預けられんし預かれん！わいはそう言っとなるんや」

鋭い糾弾が途切れても声を出す者はいなかった。否、出せなかったと言っていいだろう。言い返したいという衝動はあるだろう。現に、不満げな顔で眺める者や、今まさに飛び出そうとしているクラインの姿だっって見える。

私も、その気持ちはある。元βテスターだからといって神でもGMでも何でも無い。少しでも油断すれば死ぬし、むしろ先に行くことに焦って駆け出した一部のβテスターは、知識と経験があるという、その驕りから足をすくわれている者も多いのではないか。——本当に、驕りだ。その千五百という数の中にどれ程のβテスターが入っていた事だろう。割合にすればそっちの死亡率が高いのではないだろうか。……。本当に守りたいものも守れないのでは意味がないだろうに。

ただ、こんな場でこんな小娘がしやしやりでたところで彼を納得させられる筈もない。何より私は：他を見捨てて生き延びたβテス

ターなのだから、言い返せるものがない。ここは黙って耐えるしかないのだ。

ギロリと、目つきの悪い視線がさながら猛犬を思い起させる。そして――隣の彼が立ち上がった。

「発言をお許しください」

誰もが躊躇う中、凜とした声が響き渡った。その美声と共に立ち上がったのはこれまた目を引く美青年。ディアベルは澆刺とした、いわゆる学年に一人はいそうな陽気なイケメンだったが、こちらはまた違う種類だ。

ディアベルに続いて、どうしてこんな奴がVRMMOをと思わざるを得ない。銀に染められた長髪と中性的な顔、そして全身に纏う白銀の鎧の輝き。

俺は知っている。…この階層のNPCが作れる装備の限界を。つまり、プレイヤーメイドの一品物だとあたりをつける。腰に下げる剣もよく見たらβ時代にも見たことがないものだ。白いマントは中々堂に入っており、素直に言うのも悪いが、ディアベルよりもよっぽど騎士らしい姿だ。ただ、どこかで見覚えがあるような気がするが……。さて、どこだったか。

俺が内心で唸っていると、プレイヤー達のざわめきが強まった。その数は約10名ほどで、明らかに動揺している。そうでないにしても、反応している者は多く、そのざわめきも一入だ。顔がいいだけでは、ここまではならない。どうやら俺が知らないだけで、何か有名なプレイヤーなのかもしれない。

抑えていた好奇心が刺激される。隣のフェンサーさんも知らないように、俺が仲間外れというわけでもないらしい。

優男に見えた人物だが、前に出て見ればかなりの高身長であることが伺える。190cm程だろうか。キバオウと並べばかなりの差が開けられ、キバオウも少ししたじろいだ。

果たしてこの状況をなんとかする策でもあるのかと、皆が男へ注目

している——予想もしない行動に出た。

「皆様、私が彼の言う通り、元βテスターです」

「なっ……」

自らがβテスターであると明かし、土下座を始めたのだ。これには会場も驚愕……してないな。確かに一部プレイヤーは俺と同様に目を開いているが、他多数はどちらかといえば何故という疑問に彩られている。

「はっ、ジブンから名乗り出てくれるんなら都合がいいわ！どや、他のやつらを踏みつけにして強なった気持ちっはっ！」

おいおい、そこまで言わなくても……。なんなら、自分から言い出すなんて時点で相当に勇気のあることだろうに。

「ええ、返す言葉もございませぬ。私は残ろうと思えば残れた。それを分かってなお自らの強化の為に街を出たのは確かです」

「今更後悔しても遅いわボケ！死んだ千五百人は戻ってこんのやぞ！」

不味い。このままだと余計にヒートアップしてβテスターと新参プレイヤーとの罅が出来かねない。流石に声を上げようかと逡巡すると、青髪のナイト様が割って入る。

「そこで待ったキバオウさん！そもそもβテスターって言っても沢山いるし、この人だけに千五百人の命が掛かっている訳じゃあない。このままだと私刑になってしまう」

そう諭されると騒然とした雰囲気に戻り、キバオウもバツが悪そうな顔をする。

「……まあええわ。名乗り出たっちゆうだけで他のコソコソ隠れてる奴よりはマシやな。……今回は勘弁したる」

どこかホッとしたような空気が流れたのは気の所為ではないだろう。コソコソ隠れている奴の一人である俺も遅ればせながら胸をなでおろしている。隣のフェンサーさんは相変わらず真剣な顔で眺めているだけで、その心中は察せられないが、人柄を見た感じだと少なからず安堵していることだろう。

「ただしーそれとこれとは話が別や。コルとアイテムを提供して貰う

ことには変わらん！」

キバオウは諦め悪くそう言い切ると、壇上の銀髪がストレージを開いて次々とオブジェクト化していく。俺ならば到底耐えられない。後でいくつか必要な物を譲ってやろうかな……。等と考えているとまたもや叫びが木魂した。

「んな訳あるかい！今更誤魔化そうったってそうはいかんぞ！」

癩癩にも等しいそれだが、言わんとする事は分からなくもない。何故なら彼の足元に転がるアイテムは店売りのPOTが五つと少しの素材アイテム。コルに至っては掌サイズの袋——確か300コル未満の場合にのみ適応される最小サイズのものだ。

「誤魔化している訳ではありません。それが私の全財産なのです」

「あくまでシラ切る気か。ストレージ可視化してみろや」

キバオウの追求にも堪えた様子はなく、手元で数度操作をし、キバオウがそれを脇から覗く。一瞬驚いたような表情をした後、わなわなと手を震わせる。それを怪訝に思ったのかディアベルも見たが、顔を近づけ：何度も顔とストレージを見合わせる。

「…これで分かってもらえたでしょうか」

「嘘や：嘘つけえっ！どうせそんな装備の強化に使い切っただけに決まっとるやろ！」

尚も噛みつく姿には呆れを通り越して感嘆を覚えるが、あまりその態度を続けていると反感を持つプレイヤーも出てくるのではないだろうか。殺されるとは言わなくとも多少の妨害程度ならば通常のMOでもまま有ることだ。

「キバオウさん、俺も発言いいか」

その時、豊かな張りのあるバリトンボイスが横から出てきた。身長は土下座を続ける彼同様に大きく、完全なスキンヘッドと浅黒い肌。堀の深い顔立ちはもう一人とはまた違った意味で日本人離れした……。と言うより、同じく日本人ではないのかもしれない。

巨漢は前に進み出るとキバオウに向き直り、腰ポーチから簡易な本を取り出した。あれは俺も持っているアルゴ謹製の攻略ガイド。

「このガイドブック、あんたも貰っただろう。行く先の道具屋で無料

配布しているんだからな」

「……無料配布だと？俺はわざわざ500コルという決して少なくはない額を払って購入しているんだが……。聞けば、隣のフェンサーさんも無料でもらったというではないか。」

「続いて放たれる言葉も至極堂々としており、論旨もこの上なく真つ当だ。それ故にキバオウも言いあぐねているらしい。」

「それにキバオウさん。少なくともこの人には俺らの大半は世話になっっている筈だ。……なあアンタ、顔を上げてくれ」

「どういう事だ？あの人物が何をしたというのだろうか。もしやアルゴの協力者とか……。」

顔を上げた彼の顔をまじまじと眺めたキバオウが奇妙な声を出した。

「んな……！」

「あんたも気がついたようだな。まあ、一ヶ月も前に遠目で見ただけなら今の姿に気付けないのも無理はないがな」

それを皮切りに、沈黙を保っていた30名近くがざわめきだした。

何だ？一体何の話……

「あ、あんたもしかして！初日に演説してた人か!?」「あの!?」「序盤ガイドを配布した人か!」「あつ……！そういえば確かに!」

アルゴから聞いた事だが、俺たちが去った後に混乱する一万人近くのプレイヤーを収めた人物がおり、そいつが序盤でのレクチャーガイドなんかを配っていたとも。

次々に声上がり、その人物への擁護や助けて貰ったという報告が告げられる。最早キバオウのペースは完全に崩されただろう。

そこを好機と見たのか、騎士ディアベルは注目を集めた。

「キバオウさん、君の言うことも理解は出来る。オレだって右も左も分からないフィールドを死にももの狂いでここまで来たんだからさ。でも、そのエギルさんの言うとおり、今は協力すべき時だろ？元テスターだからって……いや、元テスターだからこそ、その戦力が必要なんだ。彼らを排除して、結果失敗したら意味がないじゃないか。それに、元テスターだって人間なんだ。いい人もいれば悪い人もいる。そ

それはどんなゲーム、どんな世界でもおんなじ筈だ」

それにはうんうんと同意する聴衆だつて何人もいる。元テスターを悪しように言う雰囲気は霧散し、元の調子が戻ってきていた。

「みんな、それぞれに思うところはあろうけど、今だけはこの第一層を突破するために力を合わせてほしい。どうしても元テスターと一緒に戦えないって人は、残念だけど抜けてくれて構わないよ。ボス戦では、チームワークが何より大事だからさ」

その視線を受けたキバオウは不承不承ながらも引き下がり、斧使いエギルは自分の役目は終えたとばかりに元いた場所へと戻る。

はてさて、もう一人の騎士様はどうするのかと見れば、彼も前列付近の仲間と思わしき二人組に合流する。

会議も終わり、解散の号令がかかるとみな散り散りに去っていったり、当の騎士様に礼を言ったりしている。

とりあえず俺はボス戦に向けたアイテムの購入などを検討しようとして、隣のフェンサーさんがある一点を眺めているのに気づいた。

視線の先は渦中にいた三人組。声をかけようとしたが、何とも言えない複雑な感情が籠もっているそれに思わず手を止める。

「ミト……」

その二文字の羅列にどんな意味が込められているのか、それは俺には推し量れなかった。

キミ（アスナ）とワタシ（ミト）。私（深澄）とあなた（明日奈）

詳しい取り決め等は行われなかった会議であったが、プレイヤーの士気を上げる効果は充分にあっただけ。第一層迷宮区二十階は未だかつてないスピードで制覇された。この時、十二月三日：つまり会議の翌日にはフロア最奥の巨大な二枚扉が発見し、大歓声の嵐となつて迷宮区内を揺るがした。

はじめに見つけたというディアベル達のパーティーはなんとボスの顔まで拜んできたという事もあり、当日の夕方、また同じ場所で会議が開かれた。

青髪のリーダーは何処か誇らしげにボスの特徴を語っていく。それはいづれも見覚えがあるもので、ボスそのものがβテストとは異なる……なんてことはないらしい。

その後、新たに仕入れた情報、情報屋によるβ時のボスの攻略方法が仔細に書かれたガイドブックもが後押しし、明日への意気込みを高めていった。

流石にここまで踏み込んだ内容ともなると怪訝な顔をする者も出てきたが、そこはリーダーの腕の見せ所。ディアベルが穏便に宥めて鎮静化する。やはり、この場に集うプレイヤーの中でもリーダーシップが突出して高い。

「——それじゃ、早速だけど、これから実際の攻略作戦会議を始めたいと思う！何はともあれ、レイドの形を作らないと役割分担も出来ないからね。みんな、まずは仲間や近くにいる人とパーティーを組んでみてくれ！」

「アブレましたね」

「他の方々は近い所で組んでいますし……どうしますか？」

「それならそれでいいわ。無理に人員を割いても余計な軋轢にもなる

し……」

ディアベルの指示から僅か一分足らず、既に七個の六人パーティーが完成し、人数の関係上あぶれてしまった。わいわいと騒ぐ彼らを尻目に、仕方なくも三人で組み、何か言われたら対処しよう。…そう決めようとした時、いつの間そこにいたのか、円形階段の最上段に二人のプレイヤーが立っている。

どこかのパーティーメンバーかと勘繰ったが、彼らに近づく影はない。念の為プレイヤーの数を数えてみると、四十七。ボス戦フルレイドに一人足りない。既に七個のパーティーが出来ているから、消去法で残りは五人。こちらの三人とあの二人組で丁度だ。

ならばと近づけば、黒髪の少年とフードドケープの人物は向かい合っており、先に気づいたのはこちらに体が向いている少年の方だ。「失礼ですが、パーティーはお決まりですか？もしよろしければ、私達三人をいれてもらえないでしょうか」

ベデイヴィエールが言った。突然の申し出に少年は驚いたようだが、何か納得したような顔で返答する。

「あー、俺は歓迎するよ。ちょうどウチも二人パーティーだったし。六人に届かないにしても複数いるのはありがたい。二人じゃスイッチでPOTローテするにも足りないしな。……フェンサーさんも、それでもいいよな？」

彼がフェンサーさんと呼んだ人物が振り返り、何事かを発しかけ…口は閉ざされた。フードドケープで隠れて見えにくいだが、隙間に覗く栗色の長髪と、見覚えのある配色、そして彼の言った『フェンサーさん』。髪色と同じくくりりとした栗の瞳は盛大に見開かれ、水気を含んだ唇が固く結ばれる。

きつと私も、同じ様な顔をしているのだろう。頭が混乱する。

こんな近くに。ごめんなさい。生きていたの？この男は？言いたいことが纏まらない。

ただ一言が、形にならない。私が何も言えずにいると、彼女がゆっくりと口を開いた。

「…ミイト」



「っアスナー！」

気がつけば、私の体は弾かれたように動いていた。今更駆け出してどうしてもらおうつもりだったのか。裏切った私の好感度など下限に振り切れているだろうと考えていたのに。いざ目にしてしまうと抑えが効かなかった。何を言うでもなく、どうする訳でもなく。彼女が生きてその鈴の音の様な声で名を呼んでくれたことが堪らなく嬉しかったのだ。

「きゃあっ！な、何!?!」

アスナは何を思ったのか、私を受けとめた。といつても重量的に崩れ落ちてしまったのだが。それでもしえ

「……なさい」

「…ミト? 本当に、ミトなの?」

「ごめんなさい」

「…っ!」

「ごめんっ、ごめんっ…! う、裏っ、裏切っちゃって、ごめんなさい…! !ごめっ、ごめんなさい…守るって言ったのに…、怖くなつて…! !ごめんなさいっ、ごめんなさいっ…! 良かった…生きててくれて、良かったっ…!」

後で聞いた話になるが、この当時は本当に衝動に身を任せてありつたけを吐き出した。不自然に浮いていた腕が少し逡巡するように動いてから、ぎゅっ…と肩から抱き寄せられる。

アスナの胸元に頭が来ることになり、肝心の顔は見えない。

恨んでいるだろう。憎んでいるだろう。怒りに震えた事だろう。であろうに彼女は拒絶しなかった。

「ミト…ミト…!」

「うああああああつ…! ごめん、ごめんなさい…!」

声を上げる度に抱きしめる力は強くなり、私は子供みたいに泣き散らかしていた。

ずっとそうしていたい気持ちがあった。もっとやるべきことがある筈なのに、この曖昧なままで、綺麗なままで終わらせたいという弱さが鎌首をもたげる。

しかし、その気持ちだけは必死に堰き止める。

「本当にごめんなさい。あのとき、私はあなたが死ぬのを見るのが……いいえ、本当はきつと自分の命が可愛かっただけなの。そんな最低な私に喜ぶ資格なんて無いとは分かってるけど、あなたが生きててくれて本当に嬉しいの。許してくれとも、関係が続けてほしいとも言わないわ。でも、せめてこれを。何の償いにもならないけど……」

そう言つて、アスナのスタイルに合わせて+4まで強化した《ウインドフルーレ》をトレードウインドウに合わせ、対するアスナが手元を操作して承諾。これで名実ともにアスナの所有物だ。

しっかりとそれを確認した後に、背を向ける。これ以上言葉を交わせば、折角の覚悟が揺らいでしまいそうで。

一緒に居た少年。背負うのは一層最強の片手直剣と名高いアニールブレード。それもあの刀身の具合から見て+6はされているだろうか。ならばきつと大丈夫だ。最悪、あの頼りになりそうなりーダーに懇願すれば、アスナが孤立してプレイする事もなくなるだろう。

「時間を取らせてごめんなさい。……じゃあ、私は戻るわね」

そう言つて踏み出した一步は、地面に着地することなく動きを止めた。

アスナがフードをあらん限りの力で引つ張っていた。ステータスの関係上、力任せに振り払うことは出来たが、逡巡する間もなく肩を回される。

「アスナ……？」

何を、と続けようとした口は閉ざされる。

——いつもと同じ目に浮かぶ雫。私の身間違いなんかではない。

「アスナ、それ……」

「あれ、涙……」

「ふふっ……気づいてなかったの？」

「ミトには言われたくないよ。そっちだって、あはっ、……凄い顔」

指摘され、慌てて涙を拭おうと顔に手を当て、

その何気ないやりとりに、誰が抗えるというのだろうか。平生を感じさせるそれは、今までのどんな悪魔の囁きよりも魅惑的に思え

……。

「これ、装備してもいい？」

ただどうしていいかも分からず手をこまねいていると、アスナが囁きかける。当然、それはアスナへ渡したのだから許可なんて貰う必要は無いのだが。

イエスと答えると、腰の初期細剣《アイアンレイピア》は消え、入れ替わるように白藍の美麗なレイピアが現れる。花柄のガードが特徴的なそれは、性能は勿論のこと、私の見込んだ通りアスナに似合っている。

アスナは鞘からウインドフルーレを抜くと、すらりと伸びた手足で華麗に舞い踊る。私は暫しそれを眺めていると何かを心得た様な顔立ちで終わらせた。

「——うん、すつごく手に馴染む。まるで何年も使ってきたみたい。軽いし、振りやすい」

「そ、そう？」

それはよかった。元々、アスナのために狙ったドロップアイテム。これが後悔を思い起こさせる無用の長物になるくらいならば、担い手に渡った方が剣にとってもいいことだろう。

既に取れかかっていたフードを脱ぎ顔を完全に露出させる。栗色の目は私を射抜き、何より普遍の事実を追及する。

「……………ねえ、ミト」

「……うん」

「私ね。ミトが変わっちゃったかと思った。デスゲームになつたら、現実の『深澄』が、私の知らない『ミト』になっちゃったんじゃないかっ……て」

「……………あ……」

『ミト』。それが私の仮初の肉体の名前。ここがゲームだということを実感させる一つがそれだ。否応なく現実を叩きつけるものであり、仮想世界の存在なのだと誤魔化せるもの。

現実の私は弱い。表面上は取り繕っているが、その実触れば簡単に折れてしまう。だからこそ、自らをSAOプレイヤーの『ミト』だ

と納得させて、刻一刻と迫る死から逃れようと強い態度をとってきた。それが私にとつて悪い事だったとは言わない。だが、それがここまでアスナを不安にさせていたなんて、つゆ程も思わなかった。

「でも違った。ミトは…ミトはいつもと同じ、頭が良くてゲームも上手な『深澄』のままだった。」

「それは違つ「ううん、違わない」なんで…」

でも、私は逃げたのだ。アスナの疑念だって、彼と出会わなければ的中していた。きつと、私の心はもつと冷たく味気ないものになっていたのは間違いないだろう。

「それなのに…なんで」

知らず、口に出していた。台詞はアスナにも拾われていたらしい。端正な顔立ちをきよとんとさせた後、破顔して言った。

「親友だからに決まつてるでしょ」

呆然と、それ以上の意味を、言葉の真意を脳みそをフル回転させて必死に考えているところに、白い指が当てられる。

「こーら、本当にそれだけの理由だからね？素直に謝つたんなら許すし、望んでやったことじゃないんでしょ？…それに、私も疑つちやっただから、おんなじよ。おんなじ」

そんな筈はない。それが、それだけの事で打ち消しにされる様なことじゃ…。

「それにね、私、嬉しかったの」

「へ…？」

「だって、現実世界じゃミトはいつも私より上で、弱いところなんて見せなかつたんだもん。だから、ミトの弱いところ、隠れた一面を見せてくれて、ラッキーだった、って思うもの」

「アスナ…」

それは些か違つてくるのでは…。そう思った時にはふと自分が落ち着いていることに気がついた。

「…うん。ありがとう。もう大丈夫よ」

今なら、今なら強くあれる。ぎゅつと仮想の心臓を握りしめて、全神経を奮い立てる。そうしてまで行うことはただの一言紡ぐだけ。

しかし、それは決して役不足ではない。  
兎澤深澄が、ミトが、何より重い音速に乗せて――。

「――ただいま、明日奈アスナ」  
「――おかえり、深澄ミト」

## ゴード・タワー・ピース

「あー…コホン。…もう終わったか？」

「あつ…！」

尋ね人は見つかった。まさか運良く…いや、候補の一つとして捉えていたからある意味では予定通りだと言えるだろう。

暫しの間再会の喜びを分かち合っていた二人だったが、ディアベルの招集もかかっていたことにより、黒髪の少年——キリトが声をかけた。

「えっと、よかったな。その…いい友達で」

きつと、少し前までの私ならば全身の毛を逆立てて怒っていただろうが、最早今となつてはそんな感情もどこへやら。

気まずげに纏めようとした少年の後ろには接近する二人。姿が見えないと思つたら、この少年を伴って離れていたらしい。…気が効いている。

「初めまして、アスナ殿。私はベデイヴィエール。お話はミトから伺っています」

「ベデイヴィエールさん…」

「御機嫌よう麗しのレディ。私はトリスタン。よろしければ再会の喜びを弾かせていただきたく…」

「そ、そう…。また今度お願いしようかしら」

取りあえずの顔合わせも終わり、結局私達五人はパーティーとなった。もう一人の少年、キリトもどうやらベデイヴィエールと知り合いらしく、諍いが起こることもなく完成した。

少し他より遅れてしまったが、ディアベルは快く許してくれた。この人数を纏め上げたリーダーシップを持つディアベルは指揮能力にも秀でていたようで実務でもなかなかのものだった。

出来上がった七つのパーティーを検分すると、最小限の人数の入れ替えだけで目的別の部隊を編成したのだ。…幸い、私達から移動する者はいなかった。

重装甲の壁部隊が二つ。高機動力の攻撃部隊が三つ。そして長毛

ノ装備の支援部隊が二つ。

壁隊はボスのタゲを交互に受け持ち、火力隊二つはボス攻撃に専念、一つは取り巻きの殲滅優先。支援部隊はそのリーチを活かした援護や長柄武器に多い行動遅延スキルを主に使用し、取り巻きをボス部隊に近寄せない役割だ。

シンプルで捻りのない構成だが、それ故に破綻の穴も少ない。私達の中でも異を唱える者はいなかった。

肝心の私達の役割だが、取り巻き殲滅のE隊と支援部隊のサポートだ。アスナは不服そうにしていたが、正直に言つて妥当だと思う。何せ構成が問題だ。細剣使い。盾なし片手直剣。鎌使い。片手直剣兼長槍。投擲兼片手直剣兼竖琴。…という統合性のないバラバラな部隊だからだ。クセの強い武器である鎌に、持ち変える度に役割が変化する多武器使い。…正直、最後のは意味が分からない。アスナもキリトもそんな顔をしていた。

流石にこの謎構成はディアベルも頭を悩ませたらしく、苦肉の策とでもばかりに絞り出したのが今の配置なのだ。それもやむを得ないであろう。ここまで勝手が違うと足並みを揃えにくい。下手をする<sup>と</sup>と連携を邪魔してしまう危険性がある。即席のレイドではそのようになりスクは犯せない…ということだろう。

ボス戦の取り決めはディアベル主導でその後も続き、作戦の概要が固まったところで解散となった。その後も親睦を深める為にか酒場やレストランへ呑み込まれていった。

「……………で、どうする？俺としてはパーティーの立ち回りとかを話し合いたいんだけど…」

「私は賛成よ」

「大事な事ですからね」

「同じく」

「みんな賛成みたいだけど…どこでするの？」

最後の一言でどうにもうーんと唸る。そこらへんの酒場やレストラン、NPCハウスなどと案は出ているものの、先日の一件と外見で注目を集めるとの事で却下された。

こうなるといよいよ選択肢が限られ、どこかいい場所は無いかとの話になったが、私とベディヴィエールは今まで各地を渡り歩いてきたから宿はほぼとつていないし、アスナとトリスタンはそもそもβテストターでもないからこの町をあまり知らない。

そして、アスナが衝撃の一言を言い放った。

「…だいたい、この世界の宿屋の個室なんて、部屋とも呼べないようなものばかりじゃない。六畳もない一間にベッドとテーブルがあるだけで、それで一晩五十コルも取るなんて。食事はまあしようがないけど、せめて睡眠くらいは本物なんだから、もう少しい部屋つてないのかしら」

「ん…？」

「あー…そういえば」

「な、何…？変なこと言った…？」

「……うああ……」

どばしゃーん。

と背中から浴槽に飛び込んだ刹那の第一声である。SAOでは液体の再現は完璧ではない。体にかかる水圧、流動感、反射光。そのどれもが現実とは微妙に違和感を残すが、今は温かいお湯と入浴しているという感覚こそが今は優先される。

そう、目を閉じて体を伸ばせば……ほら、もうお風呂だ。

「まったく、みす…ミトったら、こんな重要なこと黙ってたなんて…」  
ぶくぶくぶくと、口まで水面につけてぶすくれたような表情を作り上げる。実際、ゲーム内で風呂には入れないと思いきりでいた彼女からすればこれは懐わぬ蜘蛛の糸。話し合いの場も込みで黒髪の少年の宿に来ていた一行だが、アスナは7:3の割合でお風呂が勝っている。

「ふう…」

風呂場と繋がる扉は鍵がかけられず、男性がいることもあって躊躇われたが、そこはミトに任せている。こういうときに同性は助かる。



木製の農家の二階なのに、何故このような給湯設備があるあるのだろうか。ましてや中世ヨーロッパがモチーフなのに。蕩けた頭で堪能しながら考える。これも、ミトに聞いたらゲームとリアルは違うのだと言われるのだろうか。

温感に包まれる体は弛緩し、視界は微睡んでくる。瞳を閉じれば今にも夢の世界へ誘われてしまいそうだ。

圏内であるこの中ならばそのまま眠ってしまったところでHPが減ることはないだろうが、そこは常識的に許されない。何より、この後にも話が立て込んでいる。流石にそれを無視できるほど薄情ではないつもりだ。

「本当はもうちよつと早く出た方がいいんだらうけど…」

——久しぶりのお風呂。ミトの真意。明日のボス攻略。

「うん…今日くらいはもうちよつと長くても、いいよね…?」



「…ミルク、飲むか?」

「ではお言葉に甘えて…」

「ありがとうございます」

風呂場へのドアに視線が動きそうになるのを必死に堪えて、ピッチャーを傾けてミルクを注ぐ。折角だからとミルク飲み放題のこの場所を取っていたのだが、よもやこんなところで活躍するとはとは思ってもいなかった。

風呂場への扉を守護しているミトにも手渡し、それきり押し黙る。元々コミュニケーション能力は低いほうだと自負しているし、五人の内二人ニグループは現実世界でも友人同士らしく、完全に俺だけが孤立してしまっている。

ここは大人しくアスナが出てくるのを待って、それから会議しよう。それなら不自然じゃないし、まともに話し合えるはずだ。よしそうしようとアイテム整理に努めようかとしたところ、声がかかった。「そういえば、これもあの日以来ですね」

誰かに話したというよりは口から零れた独り言だろう。ただ、これが何を示しているのかが理解出来ずに尋ねた。

「何かあったのか？」

「…この三人でパーティーを組むのも久しぶりだな、と思い」

「三人……でもトリスタンとミトはまだ会ったばかりなんだろ。それがなんで…」

ミトも顔を上げて言葉を待っている。一体、どうしたと言うのだろう。

「ああ、すみません。三人というのは私とあなた達のことですよ」

何気なく放たれた一言はしかし、俺の記憶領域には保存されていないようで、まじまじとミトの方を見る。対するミトも訝しむような目でこちらを見ているのだから俺だけが忘れていたというわけではない様だ。

「それ、人違いじゃないか？俺はミトみたいなプレイヤーとは組んだことはないんだが…」

ちらと、こちらにも齟齬がないか顔色を伺い、俺同様に疑問符を浮かべる顔を見て確信する。何より俺はベータ期間の後半分はソロでやっていたのだ。ベディヴィエールと組んだのだから基本二人パーティーが殆どだ。やはり勘違いではと声に出しかけた時、ベディヴィエールは口を開いた。

「ベータテストの最終日、パーティーを組んだではありませんか。あのときは先にキリト殿が駆け出したのをミト殿が追った形になりましたが…お二人共ボスの姿は拝見されたのですよね？」

ベータテスト最終日、確かに俺は迷宮区を突破するために臨時パーティーを組んでボスフロアまで辿り着いた覚えはあるが……。と、オブリエクト化された大鎌と白いフードドケープ。

それに加えてあの日の苦い思い出…。そう、確かにあの場にいた鎌使いはただ一人。長身ギョロ目のオールバックという厳つい風体で目の前の女性プレイヤーとは似ても似つかないが…。

同じく武器を重点的に鍛えて他は最低限というピーキースタイルは十分に見覚えがある。

『カガチ・ザ・サムライロード』の!』

「最後に抜いてった…!」

確定だ。あのボスの名前を現時点で知っているのは開発者やスタッフを除けば実際に相対した俺とあと一人なのだから。

そうだ、そういうことならば俺たちは久しぶりのパーティーを結成したことになる。

そしてはたと考える。あの当時のメンバーが三人。つまりはベータテスト踏破率トップスリーが一堂に会していると言う事だ。そして少人数（俺はソロ）なだけに装備のグレードも高い。トリスタンはまだ知らないが、あのアスナという細剣使いもかなりのセンスを有していた。

：もしかすると、現時点での最高戦力が同パーティーに集結しているのかもしれないな。

比喩ではないそれを口に出す前に、扉が小刻みにコン、コココン、と鳴った。

最初に反応したのは意外なことにトリスタン。圏内であるというのにスローイングピックを扉の先に向けている。いつでもソードスキルを放つ事のできる体勢。……こちらも並大抵の人物ではないらしい。

その所作に警戒したらしい二人も腰を浮かせるが、生憎と俺には馴染みのあるものなので手で制する。

「警戒しなくていい。俺の客だ」

そう言つて扉を開けば、そこには一ヶ月前から世話になっている茶フォードの小柄な体躯が顔をのぞかせ……

「いようっ！キリト、久しぶりだな!」

突如として響いた濁声が耳朶を打つ。

へへへつと鼻を擦る男はかつて俺が見放した人物で…。

「ク、クライン!? お前何でここに……!?!」

疑問を投げかけると答えはその脇から返ってきた。

「コイツラがどうしてもっていうんで特別に500コルで案内して上げたのサ」

クラインの背後から現れた影。クラインの声とは一線を画す甘い高音。『鼠』の通り名どおりに三本線のフェイスペイントを刻んだ金褐色の髪を持つ女性プレイヤー。

「――アルゴ」

「ニヤハハハ、流石のキー坊も驚いたカ」

悪戯が成功したような顔で立っているアルゴと、何よりクラインがいる事により、俺はただ啞然とする他なかつた。

## 疑念の解消

「……さっ、サンキュッパ!？」

屋外、現在のホームの裏路地にてアルゴとの密談が交わされる。

それは言ってしまったえば買い取り交渉。どうやら一週間前から同じ依頼人の話は続いていたらしく、これで何度目になるか。今まで全て断ってきているが、今回、キリトはその不釣り合いな額に目を剥いた。

アルゴ曰く、依頼人が出した条件は三万九千八百コル。現時点では相当に高額であり、それでいてキリトの持つ《アニールブレード+6》には過大な金額であった。

これほどの資金を一括で支払えるほどの力を持っているのなら、大人しく通常のアニールブレードを買うなりクエストを受けるなりした方が、自らの好みの強化もできるために遥かにマシなのだ。

故にこそ、それが何らかの詐欺か何かと疑念を抱いているのだが…。

「オレっちもそれは言ったんだけどナー」

どうにもアルゴもこの依頼は疑問に思っているらしい。が、それでも受けた手前詳しくは詮索しない。どうやら早くにしてプロ意識はハッキリしている様だ。

夜風が吹きすぎ、月光が僅かに射すこの場に、緊迫が満ちる。若干の逡巡を得、キリトはクライアアントの名前を競る。

(千五百コル…。これで相手がどう動くか……)

「わかつタ。ちよつと待つてくれ」

手早くメニューウィンドウを動かし、その当人から確認を取っているのだろう。

一分後、戻ってきた返事に俺たちは二人して肩を竦める事となる。

「教えて構わないソーダ」

「はあ?」

もう何が何やら。そんな心境で代金を支払い、慣れた様子で受け取る鼠を急かす。

「……キー坊はもう、ソイツの姿も名前も知ってるヨ。昨日散々攻略

会議で悪目立ちしたからナ」

「……攻略会議………キバオウ、か？」

ふと、想起する。怒り叫ぶキバオウ、土下座するベディヴェイエル。……駄目だ。俺からしたらどつちも悪目立ちしているようにしか見えなないが……。まあ、ベディヴェイエルの装備と、昨日言ってた残りコルから考えればキバオウのことだろう。

「何でまた、アイツが……俺がベータテスターだって事を知って、それで装備の催促を……いや、それこそありえない」

真つ先に浮かんだ思考を掃き捨てる。

確かにあいつの背中に吊られていた武器は俺と同系統だった。でも俺とあいつは昨日が初対面の筈。それにベータテスターを批判する割には俺に注目していなかった。

まさか人相も知らないで取引を持ちかけた訳ではあるまい。それに、もし知っていたらあの性格からして余計にありえなさそうだ。

結局、千五百コルで買った情報は余計な混乱を齎すだけだった。

「それでもありませんよ」

「!？」

途端、誰もいないと思いこんでいた道から声がかけられ、一斉に警戒態勢をとる。

その直ぐ後に下手人は降りてきた。どうやら俺の泊まっている宿の上のいたらしい。

「あらら、こつちがタダで情報を奪われちゃったわけカ」

「トリスタン!？」

その下手人とはトリスタン。折角場所を移したというのに何故いるのか。そんな思いもあったが、それより前の言葉が気にかかった。「盗み聞きしてしまったのは申し訳ありません。何を聞いたとしても他言するつもりはありませんでした………とって済むことではないですね」

「そ、それよりアンタ。何かわかったのか？」

盗み聞きの件はまた後で考えるところとして、今最も疑問に思っている事を聞き直す。このままわけもわからず交渉を続けられるのも、俺とし

ては不安が残る。

「ああ、それは簡単です。あの関西弁の彼はただの仲介人ですよ。ですから貴方のことも知らず、本当の依頼人に言われるがままに交渉を持ちかけているのです」

「でも、そんな証拠はないだろ」

「ええ、ありませんとも。ですが推測は出来る」

確信をもって放たれる言葉にたじろぎ、アルゴは関心したように黙して待つ。

「今言ったとおり、貴方に面識がなくとも取引を持ちかけている理由は納得できましたね。そして次に、本当の依頼人です。その人物は恐らく武器としてそれを欲しているわけではありません。あの場に集うのは一握りのプレイヤー……いわば精鋭です。勝手も判っている彼等ならば、少し時間をかければ同じものは手に入る。それがパーティーを組んでいるのですから尚更のこと」

それは俺も判っている。だからこそ何故こんなことをするのかと困惑しているんだ。

「まあ、本来の依頼人は貴方の戦力をダウンさせたい訳ですね」

「なっ……それこそ、今ボスに挑もうとしているプレイヤーにすることじゃないだろ！」

『だから』ですよ

続けられた言葉に愕然とする。今、何と言ったか。『だから』と聞こえた。それこそ、信じられない。

ボスに挑む、いわばこの先のプレイヤー達の未来も託された初めてのボス戦なんだぞ……!?それで戦力を落として何になる?ボス戦に参加できない人物が繰り上がるため?いや、攻略パーティーはギリギリ一レイドを満たしていない。空きがあるのに入れないでは、そもそも装備だけで何とかなるものでは無いはずなのに……。

それ以外に、俺が武器を手放して喜ぶ人間なんて――

「……まさか」

欠けていた盤上にピースが嵌っていく。明らかに不自然なトレード。仲介人。そして今後の未来に関わる決戦。

「そのまさかです」

「元ベータテスターか……!」

そう考えれば一応の筋は通る。これでもベータ時代はそこそ名の通ったプレイヤーだと自負している。名前もプレイスタイルも変えていない俺を見て、勘のいいベータテスターならすぐに俺だと気づけたことだろう。

そして仲介人。これも元ベータテスターとさえバレなければいいわけだから、間に一人いるだけで十分。あるいは、俺が知っているプレイヤーだからこそ、隠蔽したのかもしれない。

そして、何よりこの場面で武器を、攻撃力を下げる理由なんて一つだ。

俺はβ時代、L Aを狙ってフロアボスのレアドロップアイテムを所持していた。その数として、当然人よりは多かつただろう。

フロアボスという大敵から手に入る、世界ユニにニ一つだけの高性能な品である。

SAOを知っているプレイヤーならば、意識せずにはいられない品である。店売りやプレイヤーメイドとは一線を画す驚異的な性能を誇り、入手すれば戦闘力を大幅にアップ出来る。

SAOがデスゲームになった今、戦闘力とは生存力と同義だ。

「でも、軋轢を生んでまですることか?あのナイトのニーチャンは公平にいきそうなモンだが」

そこだ。それだけが説明がつかなかった。俺なりに考えても、ソロプレイヤーだから他に言いふらされない……とかそんな感じのことしか思い浮かばなかった。

「いえ、だから彼ですよ彼。その彼こそがこの依頼の主だと思います」  
「はっ……!?!」

どういう事だ……!?何であのディアベルが……!?あの好青年が元ベータテスター……。その言葉に俺は横っ面を叩かれた様な衝撃が走った。

確かに、リーダーであるのなら指揮が出来る。L Aボーナスも積極的に狙えるだろうし、俺達が一人足りないとはいえボスと関わらない場所に置いたのも理解できる。



だが、仮にそれが正しかつたとしたら、彼はどれほどのプレッシャーを背負っていたのだろう。

俺のような人と関わらないソロプレイヤーではなく、さも知らないフリをして仲間を作り先導する。

そして先の見えない戦いに一石を投じるこの作戦だからこそ、以後の人心はここで極まる。

「そうか、ここでリーダーとなって纏め、ボスを撃破した経験があつて……」

「それで更にL Aまで持つてるとなるト……」

俺の言葉をアルゴが続け、少しの間を空けてトリスタンは頷いた。

「正真正銘、彼はリーダーとして認められる」

そう、つまりはそういうことだったのだ。

この戦いの発端者にして総指揮者。そして人心を掴む人当たりのよい性格。これに唯一無二のアイテムまでが揃ったら？

それは当然、異を唱えるものはいなくなるだろう。

街で待っているプレイヤーも、攻略しようと努力する者も、彼がリーダーであることに安心感を覚えるのだと。

「ですが、彼も一人の人間。それは相当に精神を使うものだったのでしよう。故に嘘をついた際に声音が変わっている」

「声……？おい、アルゴの方が近かっただろ、気づいたか？」

「いや、オレっちも全然……」

「キバオウとは初対面かのように振る舞っていましたが、あれは嘘ですね。知っているが故に、対象に対しては無感動、己のボロを出すまいとしていた様です。そしてベータテスターへの擁護。あれが総意となつた際には心底安堵していたでしょう？その理由とは……」

「あいつも、ベータテスターだから……」

考えれば考えるほど、ディアベルであるという結論が最も辻褃が合う。

「何てこつタ……。オレっちが裏もとつてないのに納得しちゃうなんて……。アンタ、もしかして探偵か何かか？」

「いえ、世界レベルのアーチェリー選手ですが」

……今さりげなくリアルな事を聞いてしまったが、相手が気にしていないのでまあセーフだろう。

「…ん？あつ!?確か二よく見れば!一昨年のおリンピックで銀メダルの!」

「何いいっ!?!」

まさかそんな人物がこのデスゲームに巻き込まれているとは思っていなかった。とはいっても、俺はゲームをするからとそのオリンピックピックを見ていなかったから知らないのだが…。やっぱり決勝だけでも見るべきだったか…。

「ゴホン。とまあ、述べた通りに理由としては素晴らしいですが、だからといって彼が欲に走らないとは言いい切れません。くれぐれも彼の動向には目を走らせておいた方がよろしいかと。……まあ、私としてはその心配はあまりないと思っておりますがね」

それだけを告げると、いつのまに装備したのか竖琴をポロロンと弾きながら表に周って宿へと戻るのであった。

「まさか、MMORPGで推理を見れるなんてな」

「ああ…。正直、驚いてル。……オレっちもそういう方面の事したほうがいいのかねえ?」

なんて、あたりさわりのない感想を口々にこぼす。

「……ま、とにかくクライアントには断られたって言つとくヨ。もし本当にディアベルなら、何かしら行動に移す筈だ。十分気をつけてくれよナ」

「ああ、何事もないのが一番だけだな。多分、あのメンツなら一人も欠けることはない……と思うが」

「明日頑張れヨ、キー坊」

「ああ、そっちこそ。明日中に二層の土を拝ませてやるさ」

「楽しみにしてるヨ」

「また今度」

二人は別れ、路地裏には一人きり。他所から聞こえていた騒がしい生活音も今は昔。真なる夜の静寂が心の静けさを表しているかのようだった。

見上げれば輝く星々の群。精々、お星さまにならないように気をつけるか。

そんな風にゆったりと足を動かし、戸を叩いて帰還を知らせる。扉を開き、入った直後に再度のノック。

一体何かと扉を開けると、そこには別れた筈の鼠が一人。

「その…夜装備に着替えたいカラ部屋貸してクレ」

あの別れの直後にこの申し出は流石に恥ずかしいのか、アルゴの耳は真赤に染まっていた。

## 獣頭人身の王者

トールバーナ中央広場、噴水の前、ボス戦を前にしたプレイヤーの士気は高く、歩み出たディアベルにみなが好き好きに迎え入れる。

ディアベルは歓声を手で制し、仁王立ちして声を上げた。

「みんな……もう、オレから言うことはたった一つだ！」

右手を左腰に走らせ、銀色の長剣を音高く抜き放ち——叫ぶ。

「……………勝とうぜ!!」

ワツと湧き上がった膨大なる鬨の声はこのトールバーナの町を揺らすほどに集積された。

それは四週間前の、あの最悪の始まりの絶叫とも、似ているようにも思えた。

十二月四日、日曜日。トールバーナから朝一番に出発した、所詮レイド部隊は僅かな危うさも見せずに安定していた。

遭遇するモンスターは前方にいるチームが堅実に討伐し、瓦解の可能性はない。これもディアベルが都度適切な指示と己の見事な立ち回りによるものだ。

これを見て、昨日の先入観を含めてもやはりいいリーダーだと思わざるを得ない。

そう注視しているとアスナがこのパーティーにだけ聞こえるような音量で呟いた。

「ねえ、その、あなたは、ここに来る前にも他のMMOゲームをやっていたんでしよう?」

「……ああ、俺か。まあ、そうだな。それなりに長くやってるとは思うけど」

明日奈の言う『あなた』が抽象的で一瞬戸惑ったが、その条件から俺だと推測するのは容易だった。

「他のゲームも、こんな感じなの?……こう、遠足みたいな…」

「……………はは、遠足、遠足か」

短く笑って、答えようとする声の上書きされる。

「アスナ、今まではコンシューマーゲームとかが一般的で、これが初のフルダイブ型MMORPG何だから勝手が違うわよ。コントローラーなりキーボードなり手元での操作も必要なんだから。ボイスチャットっていう手段もあるけど、ここまで自由なのはSAOくらいよ」

……参った。ミトに全て言われてしまった。やっぱり話し慣れた友達の方が分があるらしい。

自分から聞いた割には、「ふうん」だなんて溢し、アスナは再び疑問を呈した。

「こういうファンタジーな世界があったとして、こんなふうになが恐ろしい怪物の親玉を倒しに行く途中の一団は、本物はどんな感じなのかしら」

「へ？な？本物？」

「……ふふっ……」

「本物、ですか」

「……………」

そんなふとした言葉に、少年は怪訝そうに眉を寄せ、鎌使いは口元を抑えて笑う。銀腕の騎士は顎に手を当てて思案し、赤い長髪はただ無言で前を往く。

その反応によく理解したようだ。自分はえらく子供らしいことを言ってしまったのでは……と。

多数にこの考えがバレてしまったと少し赤くなってそっぽを向くが、少年剣士からは答えが返ってきた。

「……やっぱり、それを日常としているかどうか、じゃないかな。たぶん、それを日常としている人達なら、そう、俺達が無気なく遊びに出かけるような、仕事に出かけるようなことと一緒に気がする。喋りたければ喋るし、なければ黙る。このボス攻略レイドもいずれはそうなるといいけどね」

「……………ふふ、ふふ」

そんな素直な言葉がおかしくて、ミトと二人で笑ってしまう。まさ

か、こんな何気ない一言でそんなことを言われるなんて思っていないかった。

「な、何だよ……？俺の答えがそんなに可笑しいか……？」

「ごめんなさい……。でも……変なこと言うんだもの。この世界は非日常なのに、その中の日常だなんて……」

本当に可笑しそうに笑う姿から、同じようにつられて笑う。空気が弛緩し、歩みが軽くなった所でベディヴィエールは顔を上げる。

「……私も、同じ考えに辿り着きました。人間は慣れる生き物です。時に戦争が止まない国の軍人がいたとして、彼らにとつては戦争前にも軽口や今後の予定などを話し合い、人を殺したとしてもそれを引きずることは無いでしょう。それが、彼らにとつての日常なのですから……」

「「……………」」

唐突に出てきた血生臭い例えに、ハッと姿勢を正す。そう、己にとつての非日常は、いつかの誰かにとつての日常である可能性が浮上した。

きつと、フィールドに出ることが当たり前となっているプレイヤーにとつては、当たり前のことと処理されているが、未だはじまりの街で助けを求めている人々からすればそれは十分に非日常だ。自分を殺し得る化け物に向かって剣を振るうなど、そんな時代は神話で終わっている。

もし仮に攻略による死者が出たとして、最初は悲しむことだろう。だが、もしそれが当たり前となったなら？……分からない。分からないが、きつとそれは悲しいことなのだろう。

本人にとつては、些事であろうと……。

結局の所、日常と非日常の差など、本人の意識の差なのだと、そんな夢のない答えが導きだされただけだった。

「……………zzzz……」

因みに行軍中、トリスタンは爆睡していた。

結局、ボスフロア前に来ても、このレイドが消耗することはなかった。やはりディアベルが全体を支え、既によりリーダーとして信頼されている。

多少危うい場面でも最適の指示を出し、それが気持ちいいくらいに嵌まる。普段からリーダー職になれていなければ、あそこまでスムーズにはいかなかっただろう。

それでいて他者と衝突せず、人間関係の不審もない。まさに完璧超人といった印象が強い。

(――この後に及んで粗探し、か)

そう自嘲し、意識を大扉へと戻す。灰色のレリーフには恐ろしげな獣頭人身の怪物が刻まれている。

この先に待ち受けるのはコボルド系統だ。他のゲームでは雑魚として扱われるが、ことSAOでは武器を扱いソードスキルを使用するモンスターなだけに中々の強さを証明している。

そして何故かこのパーティーのリーダーを任されている俺――じゃんけんで決まったから放棄はしないが、それでももつと適任がいただろうと思う――はアスナ達を集めて今回の大筋を再度頭に刻み込む。

「よし、俺達が相手するのは《ルインコボルド・センチネル》だ。ベディヴィエールとミトは知ってると思うけど、いくら取り巻きとはいえ油断できない強さを持つてる強敵だ。頭と胴体の大部分は金属鎧を装備してるから攻撃が通りにくい。特に突き技が多いレイピアは尚更ね。だから狙うなら――」

「――喉元一点だけ、でしょ。これでも少しは教えてもらってるのよ」アスナはフードの奥から自慢げに鼻を鳴らし、深く頷くミト。どうやら俺がわざわざ忠告する必要は無かったみたいだ。

「そうだ。今回はパーティーメンバーも小回りがきくから、隙を作るのは難しいことじゃない。万が一を見越して必ず二人、それも一人は片手剣使いと組んでくれ。勿論、即席で入れ替わることもあるけど、出来るだけそれを崩さずいこう」

「解った（りました）」

俺たちの話が終わると同時、他パーティも十分な休憩がとれた様で、今か今かとディアベルの指示を待っている。

さしものディアベルもこの場面で演説はしない。人型モンスターであるコボルドはプレイヤーの話し声にもおびき寄せられてしまうからだ。

その代わりにと、ディアベルは長剣を高々と掲げると、大きく頷いた。それに呼応したレイドメンバーも己が得物をかざし、頷き返した。

青髪の騎士は抜剣したままに左手を大扉の中央に当て――

「――行くぞーみんなー」

そう短く叫び、思い切り押し開けた。



「随分と久しぶり……ですね」

ぽつりと、ベディヴィエールは呟いた。

ベータテスト終了から既に二ヶ月が経過しようとしていた。

十層と九層のボスフロアは拝見していないが、第一層という区切りにすれば約四ヶ月ぶりの光景。

虹彩豊かな支柱の立ち並ぶ大部屋。奥に向かって伸びる長方形の空間。左右の幅はおよそ二十メートル、奥行きは百メートル程もあるだろう。

――この距離は、中々に厄介だ。

以前からの経験と、仕事柄受け持つ判断力がそう囁いた。

周囲のメンバーとの距離、万が一の経路と手段を練っていると、ボス部屋の奥で動く影が見えた。

巨大な玉座に腰掛ける、他とは一線を画す巨体を持つコボルドの王。その名もイルファング・ザ・コボルドロード。

ディアベルが高く掲げたままの剣を、さつと振り下ろした。



それを合図に総勢四十七名からなる攻略部隊は、己を鼓舞する鬨の声を上げ、一気にそのフロアへと雪崩込んだ。

まず最前列で突進したのは、ヒーターシールドを掲げる戦鎚使いと彼が率いるA隊。その左斜め後方に巨漢エギル率いるB隊が追従している。

右はディアベルらC隊が押さえ、D隊と続き、キバオウたち遊撃用E隊と長物持ちのF、G隊が並走。

そして最後、殿に私達H隊が構えている。

ここは事前の情報の精査と綿密に練られた作戦通りに進み、見事に獣人の王へと踊りかかった。

《イルファング・ザ・コボルドロード》は心胆を寒からしめる雄叫びを上げながら無骨で巨大な骨斧でライトエフエクトを纏った強烈な一撃を叩き込む。その重厚な一撃を左手に備えた盾で見事受け止めたA隊リーダー。

広場中に響いた音色が開戦の合図だったかのように、左右の壁の穴から重武装を纏ったコボルドが降り立った。

取り巻きの《ルインコボルド・センチネル》だ。堅牢な鎧を感じさせない程の素早さで地を駆けるコボルドと、それに対して挑みかかるキバオウら三隊。

「よし、行くぞー！」

「ええー！行きましようー！」

キリトの掛け声に反応し、私達は顔を見合わせると、最も近いセンチネルに向かって駆け出した。

ボスのHPバーは四段。もしβ時代と同じならば、最後の一段になるまでは特に行動の変化はない。だが、その行動の変化も知っている。攻略本にもその記述は余すところなく書かれている。

「ぜあつー！」

「えええいー！」

長柄斧を持つ手をソードスキルで斬り飛ばし、その隙を逃さず首を刈り取る大鎌が弱点を痛烈に撃ち付ける。

「ナイス！」

「そちらこそー」

大きく仰け反った《センチネル》はHPを激減させ、しかしたたらを踏んで持ち直す。――が直後に飛来したピックが正確無比に喉元を貫き、僅かに残った体力を消し飛ばした。

「お二方とも、やや詰めが甘いようですね」

「すみません。助かりましたトリストアン」

こちらに漏れた内の一匹を始末し、もう一匹を相手にしているキリトらを見る。振り下ろされる長柄斧を危うげなく対処し、入れ替わりに鋭い刺突が繰り返された。

その体捌きはやはり目を見張るものがある。βから没頭し、この世界に順応しているキリトはもとより、初心者の域を出ない筈のアスナでさえも高いレベルの戦闘を熟している。

急造チームのため複雑な連携はないが、単純が故に見えてくるものもある。

キリトは冷静に動きを見て、的確に攻撃を弾き、それを全力で狙い澄ますアスナ。たったこれだけの動作を幾度も繰り返しているが、それが最も安全で迅速な処理に一躍買っている。

「……このような子どもたちに、命のやり取りをさせるとは」

グツと拳を握りしめ、主犯である茅場晶彦を想起する。あの顔なしフードのゲームマスターではなく、研究者気質な顔立ちの男性の顔を。

一体、何が目的でこんなことをしたのか。何故、無辜の民を巻き込んだのか。悶々と渦巻く感情を一旦は抑え込み、戦局を見渡す。

「もう一段目のHPが無くなった……！ やっぱ、連携がうまくいって  
るからかしら」

ディアベルの策は堅実だった。比較的重装で盾持ちの壁部隊が重い攻撃を対処し、狙われていない部隊が速攻を決めて即退散。POTローテの余裕も多分に含んでおり、瓦解どころか危うい気配すら無い。

視界左上のレイドパーティーのHPを確認するも、安全域を下回る者はいない。

それは正しく機能している部隊ごとの活躍であり、ディアベルの手腕が見て取れる。このまま行けば、宣言通りに死者なしで勝利を迎えられるかもしれない。

(ですが、どうにも昨日のトリスタンの言葉が引っ掛かる)

『確証はありませんが、ディアベル…彼の者ですが、どうやら何か行動を逸る傾向がありそうです。恐らくは卿と同じベータテスターだとは思いますが、私は経験していないのでどうにも解りかねます。ですが、貴方なら……』

一応、この状況ならばディアベルが一人突出したとして、パーティーが被害を受けることはない。

(それでも、嫌な予感を拭えないのは私の考えすぎか、それとも……) 時を同じくして、同様の懸念を抱いたキリトも顔を上げていた。

見えるのは果敢に攻め、忠実な戦闘をこなしている部隊のみだったが、安心できない何かがあるような気がしてならなかったのだ。

——運命の分岐点<sup>F t</sup>は、刻一刻と近づいていた。

## 曇りなき意志

——速い。

予想外に順調な戦いに、俺は心の底から感嘆の息を漏らした。俺とアスナが仕留める間に、漏れたもう一匹はベディヴィエール達が刈り取ってゆく。

センチネルはボス部屋にのみ出現するレアモンスターであるために同階層でも頭一つ抜けた強さを誇っているモンスターであるはずなのだが、それがこうも易易といくとは思っていなかった。

無傷なのは当たり前前、上手く行けば何の行動もさせずに完封させてしまえる。

キバオウ達が適切に役割分担をし挑みかかっているのに対し、こちら側は二人共に攻撃特化。

いくら数が余ってベディヴィエール達と合流することがあっても、連携に連携を合わせてくれる彼等は非常にやりやすい。

声掛けをせずとも状況を見て行動を変えてくれる味方がここまで頼もしいなんて。今までに体験していなかった俺からすれば脱帽ものだ。

「スイッチー！」

「私が出ますー！」

今だって、俺が地面に押し付けたセンチネルに向かってベディヴィエールが飛び出した。

俺の剣が離れると同時に、既にインパクトは発生しており、センチネルからすれば正に息をつく暇もない連続攻撃に移るのだろう。そして再度跳ね上げられた影に呐喊する細身の一閃。

空中で無様な格好のままにセンチネルは体を青いポリゴン片と化した。

「GJ」

恐ろしいまでの速攻。だがそれ故に消耗が少ない俺達は結構な余裕を持って戦況を俯瞰していられた。

あまりに早く始末してしまうので再湧きが間に合わず、結果として暇をしているのだ。

「ふう、今度は結構早かったわね」

「そうね。あの人数でまだ倒せてない向こうの班と比べたらかなり優秀なんじゃないかしら」

ミトが毒づくように見るが、そちらも目立った支障はなく、むしろ順調といえよう。それでも連携相手によってここまでの差が現れるのかと内心恐々としてみると、ディアベルが「三本目にかかるぞ！F隊、G隊前へ！」と叫び、壁の穴から新たな《センチネル》が飛び出した。

暇を持て余していた俺達は即座に躍りかかり、抜けたF隊G隊の穴を埋めるべく高速の重撃による最短撃破を選んだのだった。



《コボルドロード》とその衛兵と、プレイヤー四十七名の戦闘は最初予想よりも遥かに順調に進んでいた。

目の前でガラスの割れるような音とともに消滅したセンチネルと共に現れたシステムメッセージに目もくれず、戦況の把握に努めていた。

現状、目立った被害もなく順調に戦闘が進んでいる。それはいいことのはずで、むしろそうならなければ残っているのは絶望だ。今も斬りかかるプレイヤーと打ち合うコボルドロードのHPバーは着々と減り続けている。

だが、何故だろうか。こんなにも早く、こんなにも円滑に進んでいるのに。一向に気分は晴れない。それどころか何か重大な見落としをしてしまったような感覚に囚われている。

(思い過ぎ)しならしいのですが…)

「スイッチー！」

「やあああああ——っ！」

と、いつのまにかセンチネルが湧いていたらしい。戦闘中にここま  
で注意が散漫になるとは何という体たらく。ソードスキルの直撃を  
食らって体制を崩すセンチネルへと斬撃をお見舞いして、その警鐘を  
無視するかのように向き直った。

——そして、事件は起こった。

それは衛兵の対処にも余裕が出来、一部の者が休憩している間、近  
寄ってきたキバオウがキリトに対して何かを囁いた直後だ。

トリスタンによると、L Aがどうだとか。だがしかし、それだけで  
どこまで考えを巡らせたのか、愕然とした様子でキバオウを、いや、キ  
バオウを通して誰かの存在を見ている。

尋常ではない様子で、何があったのかと問い質すまもなくキリトは  
立ち直る。

しかし、それと同時に重厚な吠声がフロア中に轟いた。場所はメイ  
ン戦場。コボルド王が右手に持っていた骨斧、左手に装備した革盾を  
同時に投げ捨てる瞬間だった。

これはコボルド王のHPバーが最後の一本になったことを意味す  
る。そして最大の特徴であり、攻略前に耳が酸っぱくなるほど聞いた  
攻撃パターン変化の兆候だ。ここからは死ぬまで曲刀カテゴリの  
ソードスキルだけを使い、狂乱状態となって縦横無尽に暴れまわる。  
そのバーサーク状態の荒ぶり様と攻撃力は脅威だが、対処は完璧だ。  
瓦解するはずがない。

「…おや？」

「トリスタン、何か気づきましたか？」

「他国の刀剣にはあまり詳しくないのですが…あれは本当に曲刀なの  
ですか？」

「は？」

「いえしかし、曲刀というには少し——

——鋭すぎるのでは？」

それは、どういう…、そう問いただそうとした瞬間に近くでセンチネルを牽制していたクラインが「あー!？」と声を上げる。

意識を一瞬移し、彼の言葉が紡がれるのを待つ。

「ありや、刀じゃねえのか!? 俺、他のMMOでもサムライやってっから分かるが、あれは断じて曲刀なんかじゃねえぞ!」

その一言に、ぞつと背筋が凍った。

「ちよつと二人共、いくら安定してるからってサボタージユは」

「すみませんミト、こちらは任せます!」

「へ、ちよつと!」

抗議の声もどこ吹く風。今ある全力の敏捷値を以って地面を踏みつけるのと、キリトが叫んだのは全くの同時だった。

「だ…だめだ、下がれ!! 全力で後ろに跳べ——つ!!」

切迫したキリトの声が、走るベデイヴィエールの耳に微かに届いた。

だがしかし、それも最前線にいるC隊には届かない。イルファングのソードスキルのサウンドエフェクトによつて掻き消されたのだろう。誰一人として、背後へ跳ぶものはいなかった。

「グガアアア——ロロロツツ!!」

ドンツ!

まるで大型トラックが事故を起こしたかのような衝突音と共にイルファングの巨体が宙を舞う。飛んだのではない、垂直に跳んだ。

空中で身動きの取れない筈のコボルド王が空中でギリギリと体を捻る。手に持つカタナに満身の力を込め、落下と同時にその蓄積された一撃を真紅の輝きに変えて解き放たれる。

あの動作を、私は識っている。

軌道は水平に、範囲は三百六十度に。

第十階層の敵も使用してきたカタナ専用ソードスキル、重範囲攻撃  
《ツムシグルマ旋車》。

迸る朱いライトエフェクトと共に叩きつけられた一撃は完全にレイドパーティの不意をついた。

コボルド王を取り囲んでいたC隊のHP平均値ゲージがゴリツと

一気に消滅し、半分を下回ってイエローに突入する。これで見る事ができるのはあくまで平均値。個別のHPはタツプすることで閲覧可能だが、今はそんな悠長なことをしている暇はない。

範囲攻撃のために威力は低くなるのだが、これでも十分にとんでもない威力だ。しかし、悪いことは続くらしい。それは倒れ込んだ六人の頭の上を回転する黄色の光。一時的な行動不能状態スタになっている。

状態異常の持続時間は麻痺や毒には及ぶべくもないそれだが、発動が即効で、かつ治す手段は時間経過しかない。それゆえ、本来ならスタンした時点で仲間が注意を引き付けるのがセオリーとなっているのだが…。

まだ、誰も動かない。否、誰も動けない。コボルドの予想外の動き。事前に緻密に建てられた作戦の崩壊。そしてこれまでが楽に進めていたこと。最後に、信頼するリーダーのディアベルが一撃で打ちのめされてしまったこと。それらの理由が悪くも重なり誰もが声を失って立ち竦む。

ボス戦だというのに、先程までの喧騒が一時鳴り止み、不気味なまでの静寂が場を支配する。

——これは、いけない。場の空気に吞まれてしまっている。

そう思うのも束の間、間の悪いことにちよどその瞬間に新たなセンチネルが湧く時間がやってきたようで、動けないC隊の目の前で重武装の獣人が煌めく鉄の輝きをこれでもかと見せびらかす。

「ひいっ……」と誰かが声を漏らす。近寄るセンチネルに怯えてしまっているC隊の男性のものだ。動けないこの状況でHPが半分を下回っている彼らからすればそれは己を死に追いやる絶望の嬰兒にも等しく映る。

今にも振り下ろされる長束斧の持ち主に、遠方からピックが投げられる。ソードスキルの光を纏っていないにも関わらず的確無比に放たれたそれに、センチネルの優先順位が塗り替わる。

総HPの一割にも満たぬ一撃であったが、生まれたばかりのセンチネルは初ダメージを与えた赤髪の男へと狙いを済ます。

同じように、近くに湧いた二体の注意も惹きつけ、出来るだけC隊



から離す。

C隊が安堵の息を漏らした瞬間、後ろから聞き覚えのある若い少年のような声が注意を呼びかけた。

「ウグルオツ!!」

コボルドロードの硬直時間が終了したのだ。まだ、彼らのスタンは治っていない。

既に前線の数名は何とか意識を戻し援護に乗り出そうとしていたが、センチネルの注意がそちらにも向き妨害される。

硬直する彼らの前で、獣人が吠えた。両手で確りと握りしめた刀――いや野太刀が床すれすれの軌道から上へ跳ね上げられる。

あれは《浮舟》<sup>ウキフネ</sup>。正面に倒れるディアベルへと振るわれた赤い円弧の斬り上げは、彼の体を易易と宙に浮かべた。

HPでいえば、そこまで減少してはいない。だがこれは連携初めの一撃。まともに食らった時点で次の攻撃を防ぐのは途端に厳しくなる。

(無駄に足掻くな! 浮舟を食らったら、全力で防御に徹するんだ!)  
キリトの心の叫びもディアベルには届かない。必死の形相で不格好に長剣を振りかぶるが姿勢が悪かったのか、虚しくもソードスキルは不発。

そんな無防備な体を、巨大な野太刀が正面から襲った。

「あつ……!」

声を上げたのは誰だったか。それは傍観していたレイドメンバーのものか、隣でことの成り行きを見る細剣使いか、はたまた俺だったかもしれない。

まるで吸い込まれるようにディアベルの体に向かう赤い光を帯びた刀身は、しかして何者かに受け止められる。

「う、おおおおおツ!!」

ベデイヴィエールだ。

繰り出されたのは《ホリゾンタル・アーク》。飛び上がった瞬間に角度調整を終え、上段から迫る真紅の一撃を受け止める。

一瞬の拮抗。ギチギチと金属同士が悲鳴を上げ、火花のようなライ

トエフェクトを撒き散らしながら同時に振り切る。

ガギンゴギンツツ!!

空中で振るわれたソードスキルは高速で二筋の軌跡を描き相殺。ここで二連撃ソードスキルである《ホリゾンタル・アーク》はその刀身に宿る光を霧散させ、ベデイヴィエールの動きが止まる。

だが、コボルドロードの野太刀にはまだ赤い光が備わっている。カタナ専用三連撃ソードスキル《ヒオウキ緋扇》。

最後の渾身の突きがベデイヴィエールへと叩き込まれた。

「ベデイヴィエールツツ!!」

「唧っ！」

背後に庇ったディアベルと共にゴムボールもかくやという勢いで吹き飛ばされる二人。これにはフロア中から悲痛な声上がる。

ディアベルも、ベデイヴィエールもあれでは無事には済まないだろう。なにせ後列で取り巻き狩りをしている俺たちのすぐ近くまで吹き飛ばされたのだ。その威力は推し量るまでもない。

そこかしこから恐れを抱いた声上がり始めるが、それを一喝するような声が響いた。

「イエロー切つてない！ 無事よー！」

いつの間にか合流していたミトが、声を上げていた。俺はその時「そんなバカな！」と驚愕の視線を向けていたことだろう。

いくら適正レベルを超えているとはいえ、ボスモンスターのソードスキルをまともに食らったのだ。他のメンバーも似たような顔をしている。まさかイエローにすら差し掛かっていないなんて…とともすればミトへの不信を思わせるような思考を働きながら、視界左上のHPゲージを見る。

それによると確かにミトの言葉通りにベデイヴィエールのHPはイエローゾーン一步手前のグリーンで完全に止まっている。超過ダメージのせいで時間差で減るといふこともなく、完全に沈黙していた。

「一体どんな仕組みを…！」

その秘密とはすぐ明らかになった。

吹き飛ばされたベディヴィエールは、片膝を付きながらも姿勢を崩さず、長剣の腹に手を添えて佇んでいた。

「《2Hブロック》…」

それは持ち手と反対の手を刀身に据えてソードスキルに対抗する防御テクニク。β当時も話題になっていたが、これをタイミングよく行うには相当に練習が必要だし、空中でソードスキルを放った直後に、それもボスモンスター一撃に合わせるなど、どれだけの技量が必要なのだろう。

再びゾワリと背中の中の毛が立つ感覚に襲われる。先程と違うのは、今回は悪寒ではなく興奮と末恐ろしさからだった。

重い両手武器のソードスキルをこの技で受けると武器破壊を喰らう可能性がある。両手武器ではないとはいえ、規格外の野太刀の一撃は相当に重はずだ。

それでも尚、ベディヴィエールの掲げる剣は一点の曇りもない純銀の光を放っていた。

## 砕けぬ剣（思い）

「ベデイヴィエールっ」

そう叫びながらキリトが駆け寄る。どうやらセンチネルの相手をミトとアスナに任せたようで、彼自身は何の障害もなくここまで来れた。

「あ、あなたは…」

「無事でしたか。良かった」

そしてやっと理解が追いついたのか、ディアベルが体を起こしながら声をかける。そのHPゲージは最初の範囲攻撃や吹き飛ばされたのだ衝撃でレッドゾーンギリギリまで減ってしまったているが、確かに生き延びていた。

「…やっぱりアンタも」

到着したキリトが状態を見てほっと息をついた後、ディアベルに緊張感のある視線とともに声を投げかける。

どこか確信を伴ったそれに、ディアベルはポジションを飲み干して力なく頷いた。

「ああそうさ。キリトさんの予想通り。俺も、βテスターだ」

絞られた声音は前線にまで届くことはなく、ただ己の罪を告白するかのように告げられた。

「……………やはり、私達はかつて会ったことがありますね？」

「β時代に何度かパーティーを組んだこともある。今のプレイスタイルとは違いすぎて分からないだろうけど、俺はあなた達を見たときすぐに気づいたよ。キリトさんはスタイルが同じだし、ベデイヴィエールさんなんて見た目までおんなじだからね」

「随分と素直に話すんだな」

キリトの追求にも彼は否定せず、ただ受け入れた。

「俺はさ、みんながこのゲームをクリア出来るなら良かった。でも、やっぱりそれにはキツカケが必要なんだ」

「それがボス攻略…ですね」

コクン。無言の首肯にキリトが続ける。

「でも、それにはβテスターという肩書きは邪魔だ。だからあんたは経験豊富なβテスターではなく、新規プレイヤー『騎士ディアベル』としてみんなを纏めた。そして、みんなを纏めるリーダーとして、象徴としてL Aが欲しかったんだな」

「全部お見通しか…。ははっ、流石β当時誰よりも進んでた人は違うね。…こんなに幼いとは思ってもなかったけどさ」

「お、幼いは余計だ！それに最前線は俺じゃなくて…って違う。

コホン：キバオウに頼んで俺に交渉を仕掛けたのもアンタだろ？俺の武器を買って、取り巻きに専念させることでL Aを取られる危険を減らした」

「ああ。間違いない。といっても、功を焦った結果があれさ。本当に、ベデイヴィエールさんがいなかったら死んでた。…本当にありがとう」

「いえ、当然のことをしたまでです」

ベデイヴィエールがそう返すと、何が可笑しいのかディアベルは笑い始めた。それは、今までの騎士ディアベルとしてではなく、一人のプレイヤーとしてのものだった。

「は、ははっ！当たり前前、当たり前前か。…そんな、当たり前前だが、俺たちには足りなかったんだな。命が惜しいから…リソースを奪われたくないから…。人の生死が関わってる時にゲームとして、残された人達のことを考えなかったから、今の歪な関係になってしまった」

「それは違う！ アンタは…ディアベルは凄いやつだと思う。βテスターなのを隠してリーダーになるなんて、とんでもないプレッシャーだっただろうに、それをおくびにも出さずにみんなが纏まっている。そんなこと、とても俺には出来ないよ。このレイドパーティーは、間違いなくアンタがいなかったら成り立っていなかったものだ」

その言葉に、意外そうにディアベルは目を見開いた。

「キリトさん…君は、恨んでいないのか？ こっちは君の戦力を削ぐうとしたし、配置場所だって不満があったはずだ。このゲームに慣れ

てるあんたなら、それがどういうことか分かるだろう？」

「恨まない。結局武器も売ってないし、俺たちのパーティーが一人足りないのも事実だ。何より、あんたはそれが上手くいかなくたって、俺たちに不利益なこともしなかっただろ？ 剣だって、あれだけのコルを払うのは将来的に見ればあんたに損しかないものだった。それに、人を纏めてくれたお陰で俺もこのボス戦に参加できたんだ」

流星にソロで攻略は不可能だからな。ニツと笑って続けたキリトに、ベディヴィエールは頷いた。

まだ困惑している様子の彼を焚きつけるための一言だ。

「立ちなさい、騎士ディアベル。このパーティーのリーダーは依然として貴方なのです。貴方が己を許せないのなら、誰一人欠かすことなくボスを踏破するという偉業で以って、街で待つプレイヤーに光明を指し示すのです」

視線の先には、コボルドロードにいいようにやられる前線組。殆どのHPが半分を下回り、スタンしていたC隊に至っては二割を切っている。完全に恐慌して逃げ惑うだけの者もあり、今はまだ死者こそ居ないがそれも時間の問題だ。

彼らへ視線を向けた後、再びディアベルに向き直る。

「——それとも、貴方が語った騎士の誇りとやらはただの方便なのですか？」

それは、いつかに語った演説の一節。

『きつちり戦術<sup>タク</sup>を練って、回復薬<sup>ポット</sup>いっぱい持って挑めば、死人なしで倒すのも不可能じゃない。や、悪い、違うな。絶対に死人ゼロにする。それは、オレが騎士の誇りに賭けて約束する！』

ディアベルの瞳が見開かれる。まさか、みんなを焚きつけるための一言が、今になって自分に返ってくるとは思わなかったといった様子だ。

「……ああ！ そうだな、オレが真っ先に約束を破るわけにもいかないな！……ありがとう。二人共、この借りは……第二層で返すよ」

「ああ、高い利子をつけとくよ」

「ええ、行きましよう！」

顔を見合わせ、三人は前線へ駆け出した。

「みんな悪い！ さっきは情けない姿を見せたけど、もう大丈夫だ！  
今ので分かったと思うけど、ボスの武器はタルワールじゃなくカタ  
ナだ！ 対処も全然違うから、ベデイヴィエールさんとキリトさんの  
指示に従ってくれ！」

「へ？」

駆け出しながら、さり気なく指揮の一部を委託されたことに間抜け  
な声を上げるキリト。しかし既に接敵間近。ここで断つて足を引  
張るわけにはいかない。

「行くぞー！」

「応っ！」

「はああっ！」

同時、三人のソードスキルがコボルドロードを痛烈に打ち付けた。  
それはまるで、ここから始まる最終局面の開始を告げるゴングのよう  
であった。

……

一時は絶望的な空気に包まれたボス戦が、新たな情熱を孕んだ高揚  
を生み出していた。

「グワオオオオオッ!!!」

「うおおおおおおお!!!」

イルファングの怒号と、プレイヤーたちの雄叫びが木霊する。ぶつ  
かる盾とカタナ。イルファングが放った一撃は複数人のタンクのフ  
ルガードを貫くことはなく、その技後硬直を狙ったソードスキルがH  
Pを僅かに、けれど確かな数値減らしていく。

「硬直解けた！ タンク上がってくれ！」

「居合いが来ます！ 長射程ですが前線で受け止めれば問題ありませ  
ん！ HPが6割を下回った方は背後へ下がりなさい！ 私達が入  
ります！」

指示の通り、迷うことなく武器と盾を構えたメンバーは衝撃に備え、直後に緑色のライトエフェクトを纏ったソードスキルが発動する。カタナ直線遠距離攻撃《辻風》。

本来の射程よりずっと前で抑えたために、硬直時間が長引いた。

「行きますー！」

無防備な隙を晒すイルフアングへと、色とりどりの攻撃が加えられる。

「グルルル…」

思うように行かないのが不満なのか、不機嫌そうに唸るイルフアングに、両手斧<sup>エギル</sup>使いの重い一撃が顎下を強打する。それだけで決定打にはならないが、着々と勝利への道は近づいてきている。

最初こそ恐慌に囚われていたプレイヤーたちも、リーダーの復帰と共に続々とやる気を取り戻していた。最初こそ指揮権が移ったことに疑問を抱く者もいたが、的確な指示を出すことにそれらも消えていった。

「左薙ぎ払いだ！」

「うわあっ!?!」

しかし、やはり初見の動作には指示ありでもついていけないこともある。それに、いかに重武装とはいえ狂乱状態で暴れまわるボスの攻撃を受け続けるわけにはいかない。一部が下がってポーシオンを飲むが、その間に剣士数名がイルフアングのソードスキルに対抗しきれずに弾き飛ばされた。

「C隊下がれ！俺達が抑える！」

「はい！」

ディアベルがそう叫ぶと、何の迷いもなくC隊は前線を退いてポーシオンを叩る。

ボスのHPは残り半分。慎重に徹しすぎたか、減りは遅い。今でさえ慣れないカタナスキルに四苦八苦しているのに、時間が経てば集中力も途切れる。どこかでチャンスを作り出さなければ、いずれ致命的な隙が露出してしまう。

ならば、私達だけで抑えるか――？



だが、その手段を取るには4人では不安だ。もっと人手が、それより強力な。

イルファングの攻撃を危なげなく受け止め、徐々に体力を回復させる後列を見る。

まだ完全に回復しきっていない。SAOの回復ポジションは飲んでからじわじわとHPが回復していくという仕様だ。第一層で入手できるポジションではその効果も大したものではなく、中途半端なダメージを残して復帰させればその分各隊内部での体力のズレが生じてくる。そうなれば、隊として分けたことが却って邪魔をする。

(何か、良い手はないか…)

「ベデイヴィエール！」

「キリト！」

声がすぐ後ろにまで迫っていた。

「アスナにミト!?センチネルの相手は…」

「モヤツとボールさんに任せてきたわ」

「数も減ってるし、余ったからね」

冗談めかして笑う二人は、されど油断せずイルファングの動向を睨みつけている。みな、実力に不足はない。なら、今から話す無茶振りにも応えられる筈だ。

「申し訳ありません！ 前線の維持を可能な方にお任せします！」

「任せとけ！」

威勢よく応える両手剣使いに感謝をし、その概要を伝える。アスナとディアベルはやや懐疑的だが、他は乗り気らしい。

とにかく、やるしかない。削られていく前線のHPがイエローに突入するより前にスイッチ。

この声掛けはディアベルに任せている。

「みんなー！ 態勢が整い次第全力で攻撃するんだ！ 防御や回避は考えなくてもいい！」

どよどよと、威勢良く放たれた指示に困惑の空気を隠さないでいるレイド。それも当然、ただの特攻など命を賭けに出す行為だ。今までが完璧だったが故に、なぜこんな無謀な策をだしたのかと、誰もが

ディアベルに注目した。

そして一人が我慢できずにその意図を尋ねる。それはみなとの総意。誰も彼もがディアベルの発言を聞き逃すものかと耳を立てた。

自信満々に、それは紡がれた。

「俺達が責任を持って総ての攻撃を止める！ みんなはボスのHPを削り切ることに集中してくれ！」

やや懐疑的な視線が寄せられるが、それでも切った口火は収まらない。誰かが声を上げ、それが伝播し巨大な雷声と化する。

「グラアアアア——ッ!!」

イルフアングが負けじと砲声を上げ、淡い緋色を刀身に纏わせる。前にも振るわれた、三連撃ソードスキル《緋扇》のモーシヨンド。

その最初の一撃は、必ず——

「——上段です！」

「合わせろ！」

「分かった！」

「抜かりなく！」

「分かってるわ！」

「ええー！」

六人が、同時に反応した。

前列に四人、後列に二人。並べられた銀色の刀身に赤青緑の燐光が爆裂する。

「グガアツツ!?!?」

——巨体が、揺らぐ。

驚愕に見開かれたイルフアングの視線の先には交差した四つの片手剣。キリトの、ベデイヴィエールの、トリスタンの、ディアベルの剣が《イルフアング・ザ・コボルドロード》の野太刀を弾き返し、ソードスキルを中断させられたイルフアングは無防備な体を晒すことになる。

「今です！」

ベデイヴィエールの落ち着いた指令に見惚れていたプレイヤーたちが動く——よりも速く、動き出していた者がいた。

「アスナ！」

「ミト！」

二人の乙女が、駆けた。

剣士よ、往け

「——アスナ！」

「——ミト！」

二人の乙女が、駆け抜けた。姿勢は低く、ネコ科動物の如く身を縮めた疾駆、二人は激しくはためくフードケープを鬱陶しいとばかりに引き剥がす。

光を孕んだ艶やかな栗色と、闇を内包した紫紺の長髪が舞う。

「やあああああつ!!」

「はあああああつ!!」

まず、ミトの大鎌が髪色と同じ紫の軌跡を宙に残しながら胸に二筋の傷跡を残す。そしてアスナは四剣士の残した剣を踏み台にして、跳んだ。

イルファングの眼前まで飛び上がった彼女は、そのまま渾身の一撃を叩き込む。空中だというのに、地上とパフォーマンスが変わらないことに密かな驚嘆を覚え、まもなくそれは見開かれたイルファングの眼球へと炸裂した。

——大鎌専用二連撃ソードスキル《ディオ・ハーヴェスト》と細剣用単発ソードスキル《リニア》。

常より激しい光を散らした一撃はクリティカル。今までのどの攻撃よりも激しくボスのHPを減少させた。

「嬢ちゃん達に負けんじゃねえぞ！俺たちも続けーっ！」

「「おおおおおおおっ!!」」

それに追隨するのは残りのプレイヤー達の群れ。この状況下でもパーティー一塊となって突撃する彼らの全力攻撃の絨毯剣撃がイルファング目掛けて殺到する。

「うおおおおおっ！」

「喰らええええーっ！」

「だりやああああつ!!」

片手剣が、両手剣が、曲刀が両手斧が戦棍が短剣が――。

仮想世界の空気を斬り裂いて軌道が虹を描く。

それは正に《剣が描く芸術》。凶らずしも首謀者である茅場晶彦の意に沿う形となった連撃は、直撃するたびに歓声上がりそのボルテージは留まるところを知らない。

「グアアアアッッ！」

当然、階層の主たるイルフアングが黙ってやられるはずがない。長い硬直がとけた瞬間に目につくプレイヤー目掛けて斬りかかる。

「止めるぞベデイヴェール！」

「お任せを！」

そこに割り込んだのはキリトとベデイヴェール。二人はその軌道上に身を割り込み横薙ぎに対して垂直切りで迎え撃つ。

「ぐっ…」

「ぬおおおっ…！」

少しの拮抗。これが一人なら、生半可な実力であればそれすら許さずその身を白刃に晒したであろうが、この二人は別だ。

その一撃を受け止めた二人は技後硬直に陥るが、それはイルフアングも同じこと。だがこちらには仲間がいる。この僅かな間を確実に狙って叩き込まれる剣戟。またもやイルフアングは悲痛な雄叫びを上げ、やがてそれが怒声へ変わる。

「ミト、トリスタン！」

「ええ！」

「心得ています」

キリトの声に、それだけで二人は反応してみせた。大上段から迫る野太刀に、ミトは切り上げを、トリスタンは《バーチカル・アーク》の二撃目で対応する。

一時、裂帛の気合を上げたイルフアングの動きが完全に停止。けれど硬直からすぐに立ち直った。今迎撃した二人はまだ復帰できていない。

ニヤリと獣顔を愉悦に歪め、固まる二人へ向けて渾身の一撃を叩き込もうと大きく構える。

「アスナー！ デイアベル！」

それを、二人の影が遮った。威力の増した一撃を食らったイルファングは体制を崩しソードスキルの光を霧散させる。

「…次、来るぞ！」

「はあああああつ！」

「右水平斬り！ 左薙ぎ払い！ 上段唐竹つ！ 左斬り下ろし！」

「右斬り上げ、薙ぎ払い！ こちらは私が！」

キリトの指示は適切で、必死でイルファングの野太刀の軌道を読み当てる。キリトが技の対処をしている間はベデイヴィエールがその役を変わり、指示を切らすことなく一撃一撃を受け止めていた。その姿は、正に万夫不当の英雄が如く。

「…マジかよ」

「凄え…」

ポーシヨンによるクールタイム待ちの仲間から、そんな言葉が紡がれる。彼らの目には、先の大言壮語を実現してみせる頼もしい背中が並んでいた。

「やああああ——っ！」

「はあつ、やつ！」

このSAOというゲームではモンスターの攻撃を延々と防ぐことは非常に困難だ。余程のレベル差でもない限りは防ぐたびに微量とはいえHPが減少し、手に痺れや衝撃も残る。ソードスキルなどはその典型例で反応は出来ても上手く防ぐにはそれなりのステータスとカンが必要で、集中力も桁違いだ。

それをステータスで上回るボスモンスターに、複数人で連続でやつてのける技量、仲間への信頼。彼らもこのSAOというゲームのフロントランナー…相当なゲーマーであるだけに、その常識外れな連携に言葉を失い感嘆の声を漏らした。

「くそつ、まだまだ来るぞ！」

「まだ倒れないの…!？」

「これ以上はHPが…!」

キリト、アスナ、ディアベルが極限の緊張の中愚痴をこぼす。いかに全てを完璧に防いでるとはいえ、ボスの放つソードスキルをゼロダ

メージに抑えるのは不可能だ。とはいえもしこれが他のプレイヤーのパーティーであったならとつくに全滅していただだけの攻撃を受けてきたのは間違いではなく、攻勢に移ったプレイヤー達により相当HPも二割を切った。

だが、こちらとて無事ではない。最も消耗が激しいのはこの中で最も軽装でありながらそのスキルの軌道の豊かさでフォローをしてきたミトだ。見れば、すでにイエローを通り越して五割、いや四割に差し掛かっている。

もしこの状況で強力なソードスキルに対処しきれなかったら…：。そんな嫌な想像がぞくりと脳裏を掠める。

いや、そうはさせない。最悪、複数人で迎撃した後に予備として控えるタンク隊に任せればいいだけのこと。何をそんなに怯える必要が

「うわっ」

その瞬間、ボスの動作を無茶な姿勢で避けたシミター使いが足をもつれさせた。よろめき、転けた先はボスの真後ろだった。

「…早く動け！」

キリトの焦りを隠さない叱責が飛んだが、間に合わなかったらしい。イルフアングが取り囲まれた状態を感知し、これまでの鬱憤を晴らすように獯猛に吠えた。

ヘイトを向けようとする俺達も無視して巨体を地に沈めこむ。次の瞬間、全身のバネを用いた高い垂直跳びが風を巻き起こす。

「ミトさん下がれ！」

ソードスキル《旋車》。ディアベル達C隊を危機に陥れた一撃。範囲攻撃でありながら前線のプレイヤーのHPを半減させる威力を誇り、さらにスタンのバッドステータスを付与する凶悪な技だ。

その威力を身を以て知ったディアベルは咄嗟にミトに声をかける。他のメンバーならまだしも、HPが半分を切っている軽戦士はそれが死に直結する。

だが、ミトは動かない。動けない。強力なソードスキルを使った反動が回復していないのだ。それはベディヴィエールも然り。

動けるアスナが、ディアベルが、トリスタンすらもがこの状況を打開する術を持っていなかった。

「う……………おおああっ!!」

剣士が歯を噛み合わせ猛り叫ぶ。剣を右肩に担ぐように構え、左足で思い切り床を蹴りつける。明らかにレベル帯に見合わない速度で己が肉体を斜め上空へと射出する。片手剣突進技、《ソニツクリープ》。同じ突進技である《レイジスパイク》よりは射程が短い、これは軌道を上空にも向けられる。

右手で握る剣が鮮やかな緑のライトエフェクトに包まれた。その先では、イルフアングの野太刀が赤い輝きを生み始めていた。

「届……………けエ——ッ!!」

キリトが叫ぶ。限界まで伸び切った右腕を、加速の勢いそのままに振り抜いた。

宙に長いアーチを描いた一撃はソードスキル発動前のイルフアングを強かに打ち付け、その体に鋭い斬撃跡を刻み込んだ。

「止まらないッ…」

——しかし、確率の女神は微笑まなかったらしい。

キリトの放ったソードスキルは鍛え上げられたアニールブレイドとステータスにより強力な一撃となり得たが、クリティカルですらないそれではボスの体勢を崩すには足りなかった。

それを見届け、誰もが絶望の二文字を思い浮かべた中、それを確認するや駆け出した者がいた。

「——ミトッ—」

ベデイヴィエールだ。これまで如何なる時——茅場晶彦のデスゲーム宣言時にすら崩さなかった冷静なその貌に焦りを滲ませ、かつてのミトに言ったように武器すら捨てて走り寄る。

そうして、ベデイヴィエールは自らの背をイルフアングへ向け、両手で抱き込むようにしてミトを庇った。

「—うおりゃああー! その武器落とせコノヤロー!!!」

だがそこにもう一人、飛び上がる者がいた。キリトよりも低い位置を駆けた濁声の男。髪は赤、身に纏う装備と髭の目立つ野武士ヅラは



さながらサムライを思わせる姿。武器こそ曲刀であるが、今はその行動が運命を分けた。

曲刀用単発突進ソードスキル《フラッシュフロード》。鉄砲水の名を冠した一撃が今まさに落下途中のイルファングの腹めがけて吸い込まれた。

「グルウツ——!!?」

計二発のソードスキルを空中で受けたイルファングは堪らず喚き、必殺の一撃を放つことなく無様に地に落ちる。

「ナイスだクライン！」

「おう！俺様にかかりやあこんなもん…あだっ!」

空中で器用に言葉の遣取を交わし、見事に足から着地するキリトと、不格好に墜落するクライン。その姿は何とも締まらないが、危機は脱した。

ホツと息をつくのも束の間、即座に意識をイルファングに移せば、倒れたまま立ち上がろうと手足をばたつかせていた。人型モンスターの特有のバッドステータス、《タンブル転倒》。

「…全員っ、フルアタック全力攻撃ーっ!!」

その隙を逃す指揮官ではない。「お…オオオオ——っ！」と上がる威勢のいい叫び声とともに彼らは己の獲物を振りかざす。

今までは《旋車》を恐れて取り囲むことが出来なかったが、《転倒》中の今は完全に無防備。これまでの鬱憤を爆発させるようにぐるりと取り囲み、味方を邪魔しない縦斬り系ソードスキルを発動させる。先の光景の焼き直しが、さらなる密度と手数によって再現させる。

息つく暇もなく豪然と降り注ぐソードスキルの雨あられに、イルファングの残り僅かなHPが目に見えて削られ続ける。

このままHPを全損させられれば、勝利。その前に動き出してしまえばその瞬間《旋車》が炸裂し、今度こそ全員を吹き飛ばす。

一旦攻勢に移っても、技後硬直の時間はどうにもならない。その間に、無情にもイルファングは《転倒》を脱し上体を起こした。

ここで削り切るつもりなの、出し惜しみなしの攻撃だった。ようやく次の予備動作に入った彼らは、もう動けない。

——三人を除いて。

「アスナ、ディアベル！最後の一撃行くぞ！」

「了解!!」

地を走駆する三つの影。黒、赤、青の三閃は全力で今撃てる最大火力を解き放つ。

「行っ……けえッ!!」

エギルやクライン達の隙間を抜け、まずディアベルの《レイジスパイク》が地を駆け抜け激突する。ボスのHPが、ほんの数ドットにまで落ち込む。そして次鋒、アスナが渾身の《リニア》を穿とうと姿勢に入り——突如、イルフアングが身を翻してその刀身を煌めかせる。

「なっ——!?!」

アスナは予備動作に入っていて躲すことも迎撃もできない。キリトが眦を見開いてソードスキルを発動させるが、既に庇うことも不可能。予想外だ。まさかそんな挙動をするなんて思わなかった。よぎる後悔と残った一撃で仕留められるのかといった不安。

そこに、後方から一筋の流星が飛来した。

槍だ。本来両手で握るはずの長槍が一直線に長大な野太刀に吸い込まれていく。寸分違わず命中した槍と野太刀はギリギリと火花を立てて、呆気なく槍が地に落ちる。少し時間を稼げはしたが、危機に変わりはない。

キリトが覚悟を決めたところで声が轟いた。

「——そのまま行きなさい！」

背後に、投槍後の姿勢のままのベディヴィエールが移り、自然と自らを横切った姿も視界に収める。

「アスナ！」

ミトが、その一撃をソードスキルで迎え撃つ。通常攻撃とソードスキルのぶつかり合い。軍配が上がったのは後者だ。HPを赤く染めながら、確りとその凶刃を止めてみせた。

「つやあああああああああッ!!」

絶叫にも近い神速の刺突。激しいライトエフェクトが弾け飛び、既

にそこにはキリトが剣を振りかぶっていた。

「やれえーっ!」「やつちまえーっ!」「キリト!」「キリトさん!」

「「行っけええええ——ッッ!」」

「おおおおおおおおおおおッッ!!!」

青い光芒をまとった剣が、イルファングの腹に強烈な横一文字の軌跡を描き、背後へ突き抜けた。

キリトの動きが静止すると同時、コボルド王の巨体が揺れ動き、細く吠えた直後。ビシッ、と無数の罅が入る。

やがて、力の抜けた体はどしんと両膝をつき、直後、アインクラッド第一層フロアボス《イルファング・ザ・コボルドロード》は全身を無数の硝子片に変えて盛大に爆散した。

盛大なファンファーレがフロアを支配し、それを塗り潰すほどの大歓声が沸き起こった。

## 序章終幕



ステンドグラスの様な極彩色の床や壁はその色を通常のフロアのものに回帰し、灯っている松明だけがかってここにいたボスの存在を証明していた。

第一層フロアボス《イルフアング・ザ・コボルドロード》を討ち取ったレイドパーティは、今も尚興奮冷めやらぬといった様子で肩を組み合い、喜びを共有している。

それは当然、私達も同じこと。キリトは体格のいい斧戦士やディアベルらと何事かを話し、その戦果を称え合っている。

「やったね、ミト！」

「うん。……勝ったんだ」

後、99層。先を見れば果てしない道のりだが、0と1では全然違う。恐らくは攻略にも慣れてこれから先の階層はもつと早くに決着が着くことだろう。

長らく保っていた緊張が解け、足が折れかける。倒れかけた私ともたれかかったのはベディヴィエールだった。

「大丈夫ですか？ 疲労が溜まっているのでしたら、この機に少し休んでいきましようか」

頭より少し高めの位置から放たれる物腰柔らかな落ち着いた低い声。疲れ果てた体に（この場合、現実世界で寝ているはずの体が疲れるはずもないので結局のところ精神的な問題だろう）投げかけられた言葉はすんなり耳朵をうち、バツと慌てて身を翻しアスナに支えられる。

「いつ、いやっ大丈夫！」

多少上擦った声で否定すれば、静かに目を伏せて了承する彼。アスナには「ほんとに大丈夫？」と心配されてしまうが今は答えたくない。

今自分の顔はどうなっているだろうか。SAOでは感情表現が多少オーバー気味に表現されるため、余程自制しない限りは本音が顔に

透けてしまう。思い出すのは、二度目の旋車が放たれようとした間際のこと。

『——ミトツ！』

ソードスキルの硬直で動けない私に、誰よりも早く駆け出したベデイヴィエール。その時ばかりはいつもの冷静沈着さは鳴りを潜め、強い焦燥を顔に貼り付けた銀色の騎士。

この世界では唯一無二の頼れる武器を投げ捨ててまで、決死の覚悟を以って私の元に来るや両腕を開いて私の背に回したのだった。

（——!?!）

今思えば、盾となることでソードスキルの直撃を避け、自分ごと吹き飛ばされることで距離を取るための策だったんだろう。

だけど、その時ばかりは正常に機能する情報処理脳は上手く働かなかった。

視界いっぱい広がる肉体。靡く髪同士がお互いの鼻先を掠め、外見の華奢さからは程遠いほどに強い力で全身をひしと抱く。

分かっていたつもりだが、女性的な見た目の彼も確りと男性なのだと再確認させられた。ちよつと苦しいような、でも、どこか安心できるあの感触が、頭の中で延々とフラッシュバックする。

思えば、アスナを除けば私が本音を曝け出せるのは両親くらいだった。今では気軽に話せるような知人もいるけど、ベデイヴィエールは人生初めてとも言っていい年上の男性だった。

…きつと仮想世界に閉じ込められてから、郷愁の念から人肌恋しくなっていたのだろう。そうだ。この胸の動悸も、ただの勘違いだ。死の危険と、突然のことに心がびつくりしているだけだ。…きつと、そうに違いない。

そう自分の中で無理くり理屈をつけて飲み込んだところで、ある一声が場の雰囲気塗り替えた。

「…おい、ちよつと待てよ。何で攻略本に書いてなかったスキルをあいつが知ってるんだ…?」

「言われてみれば確かに…」

「もしかして、あいつもベータテスター何じやないのか!? だからボ

スの攻撃パターンとかも知ってたんだ！ 知ってて、自分だけが得をするために黙ってたんだろ！」

「LAもあいつが取ってたぞ！ そうだ、ハナから俺達を出し抜くつもりだったんだ！」

「情報屋もグルだったんだろ！」

たった一人の疑問が、連鎖し、悪い空気を作り出している。その目には色濃い疑念と動揺が滲んでいた。実際に声を上げたのは少数だが、それによりいくらかの目つきが変わる。影響されないものも少なからずいるようだが：自分が標的にされてまで庇うことではないらしい。

「はあ!? テメエ等正気かよ！ あいつらがいなけりや俺達に死人が出てた可能性だってあるんだぞ！」

「そうだ。攻略本にだって目立つ注意書きがあっただろう。『あくまでベータテスト当時の情報』だとな。今この状況で情報屋が嘘を流す理由なんかない。もう少し冷静になってみたらどうだ？」

そこに、庇う大人が二人。

「クライン、エギル…」

未だ冷静で、物事を俯瞰できる一部プレイヤーも領き、やや追及の声が収まりかけた瞬間。

「そ、そんなこと言っただって騙されないぞ！ うまい話でも持ちかけられて買収されてるんだろ！」

「なっ…」

(こうなっては、手がつけれませんね…)

絶句。正常な思考を持つ者ならばありえない発想。いや、なまじ頭をよぎったとてここまで攻めては却って己の立場も危うくなる。混乱する場に新たな火種が降り注ぎ、宥める声も無視した一部がとうとう剣を抜きかけ――

「――いい加減にしないか!!」

鶴の一声が轟いた。

これまでにない剣幕を伴ったそれにこの場にいる全員が動きを止め、言葉の出処――ディアベルに視線を集める。

「デイ、ディアベルさん」

「さつきから聞いていればなんだ！ 彼らなくしては犠牲者なしには終わらなかつたのはみんな理解してるだろ！ 真つ先に俺が死んでいた！ それで指揮権を移したのだって俺の一存だ！」

どよどよと、反対意見側から怯える子供のように肩を寄せ合う。どうやらディアベルシンパの者も混ざっていたらしい。

「途中までの攻略に支障はなかつた、正式サービスに伴つての仕様変更点があそこだった！ 間違いなく、ベータテスターも知らない情報なんだよ」

「で、でもグルだったら…」

ディアベルの必死の問いかけにたじたじに反論する彼らだが、その勢いは明らかに落ち、口は窄まっっていく。

ディアベルはその反論に目を閉じ一際強く深呼吸してみんなの顔を強く見つめる。その瞳には、強い意志がこもっているように見えた。

そして、誰もが固唾を呑んで見守るその中央で、青髪の騎士は重い口を開いて紡ぐ。

「——俺も、ベータテスターだ」



結局、ディアベルがベータテスターだという事実がボス攻略組を大いに揺るがした。

ある者は騙していたのかと糾弾し、またある者は薄々感づいていたのかやっぱりか、と心中に零す。

かけられる言葉の数々にディアベルは毅然として答え、その誠実さを如実に表していた。肅々と全てを白状するディアベルに野次を飛

ばす者は居らず、緊迫した空気の、懺悔とも取れる男の独白が耳朶に響いた。

ディアベルがベータテスターであること、そしてそれをひた隠しで騙っていたことにシヨックを覚え彼から離れる者がいた。しかし、それと同等の数は彼をベータテスターだと知ってもこれまでの信頼から彼と道を共にするらしい。

意外というべきか、この状況でも冷静だったのは関西弁の彼——キバオウだ。

喚き散らすわけではなく、信じられないと目を見開くわけでもなく、冷静に場を俯瞰し、わざわざ決別の言葉をかけてディアベルから離れていった。

一見冷淡にも捉えられるだろうが、私達にしか聞こえないような声で簡単な謝礼と、それはそれとしての宣言を叩きつけた。

「……今までんコト、悪かったな。ディアベルはんがベータテスターなんは薄々思つとつたし、今回死者がおらんのもアンタらのお陰や。そこは認める。…でも全部認めたワケやない。わいはわいのやり方でクリアを目指す」

とのこと。

何というか、変に律儀な人だなと思った。

結局、攻略のためにと集められただけであるこのレイドは一旦解散となった。当然、同じパーティになったり、先のボス戦から行動を共にするグループもいくらか見受けられたが、あまり関係のないことだ。

——そして、私達はといえば。

「それでは、第一層の攻略お疲れさまでした」

コツリと、デジタルで模られた、ライトイエローの液体が入った小瓶を打ち鳴らす——などというのではなく、みな胸元に軽く掲げてそれを口に含み始めた。



解放された第二層。荒れ果てた荒野と乾燥した大地を基調とした階層であるここは、その枯れた雰囲気<sup>アクトイベート</sup>に合うような牛型や虫型のエネミーが徘徊している。

その中でも、つい先程到着した首都『ウルバス』。石レンガ造りの街並みは一層『はじまりの街』と変わらないが、この黄砂のフィールドならではの空気感がこれまでと全く異なる雰囲気を与えている。

つい先程有効化された転移門により、第一層で今か今かと待ち望んでいたプレイヤー達が流れ込み、閉塞された環境を脱する一步に大騒ぎしている。

大通りから聞こえてくるそんな喧騒をBGMに、ベデイヴィエール、トリスタン、ミトは飲食店で腰を落ち着けていた。

「ふう…おいしかったけど、レモン味のビール…?」

一息に飲み干したそれに舌鼓を打ちながらも、アルコール飲料のよ<sup>アクトイベート</sup>うな独特の苦味にミトは顔を顰める。

「ええ、こちらははじまりの街の隅に追加されていたようで…。中々いけるものでしょう?」

「まあ、そうだけど…。言ってくれば良かったのに」

苦味に顔をしかめるなど、子供っぽいと思われそうで少しだけむすつとした顔をする。

それが余計に子供らしさを出していて…。やっぱり、あれだけの動きを見せていても、根は普通の子供なのだ<sup>アクトイベート</sup>と改めて実感する。

「それで、貴女は良かったのですか?」

トリスタンが問う。

何を、と疑問を抱くこともなく、ミトは即答する。

「ええ。私も、アスナも、お互い話し合って決めたんだ。アスナはちよつと一人で、前向きにやってみたいことがあるんだって。…:…それに大丈夫。今まではずつと一緒なのが友達なんだって思ってたけど、うん。ちよつと違ったみたい」

その顔に迷いはない。これまでのように、責任と罪に押しつぶされてきたものでなく、憑き物がすっかり落ちた様であった。

「アスナは私が思ってるよりずつと強かった。それこそ、私のほうが

アスナの存在に助けられてきたようにね。…一緒に道を行けるのは仲間だけど、離れても別々の道を往けるのが友達なんだって、今はそう思ってる」

「それに、会えなくなるわけじゃない。だから私は気にしてないわ」  
そして沈黙。その間に恥ずかしく思ったのか、最後にレモン色の飲料をぐっと飲み干した。電子上では全く効果のない、赤らんだ顔を酔いのせいにして。

「おや、あれは…」

ふと窓を見れば、そこには小柄なフードケープを纏ってフィールドへ走り抜ける“鼠”と、それを追いかける二人組。…そして、少し離れた場所から後を追う黒ずくめのソロプレイヤー。

「あれは情報屋と…。忍者……………??」

何故疑問系なのかと言えば、それは一般的にイメージされるような忍者装束ではなく、灰色の布防具。上半身には軽いチェーンメイルを、頭には同色のバンダナとパイレーツマスクといった装備であり、ありあわせで構成されたような忍者。最早忍者風といったほうが正しいからだ。

「確か、ベータテストの時にも見かけましたね」

ベデイヴィエールの言葉で当時の状況を思い出す。

「……………ああ、ギルド名は《風魔忍軍》。……………だったような」

「そんな感じでしたね」

「有名なのですか？」

「悪い意味だね。敏捷力<sup>A</sup>極上げビルド<sup>G</sup>の集団で、AGI壁<sup>I</sup>だけの高速戦闘をして、ピンチになったらその足の速さに物言わせて近くのパーティーに押し付ける。つてのを繰り返してたの。……………このデスゲームでも忍者やっていると思わなかったけどね…」

呆れた。といった様子でため息をつく様にトリスタンは同じく続いた。

「…情報屋が追われてる…?でも…流石に早々PKな訳ないし、困るのは向こうも一緒。今になって追いかけるのは2層の何かが関係している…?」

一度考え出すと止まらない。ゲーム脳が様々な推測を上げていき、けれど話の欠片も伺えない状況では答えは出ない。

「もしかしたら、《体術》スキル狙いかもしれませんがね。ベータ時にギルドごと壊滅させた時に欲しがっていたので」

「そ、そう…壊滅…。でも《体術》ってエクストラスキルよね。今の時点で取れるの？」

「勿論です。ある場所で《体術》専用のクエストを受けられるので、クリアすれば取得できますよ」

「へえ…。こんな序盤で手に入ったのね…。知らなかった」

「私も取得していたので。試しに行ってみますか？今なら先回りも出来るかと思いますが」

そう告げると、ミトは逡巡し、意を決してそちらへ向かうことにした。キリトや情報屋が多少は心配だが、今のキリトには最大限に強化された武器やボスドロップの装備もある。情報屋だって素人ではないし、悪いことにはならないだろうと判断した。

何より、自身のゲーム魂がエクストラスキルへ興味を抱かないはずがない。

「ええ、このパーティーで初めての活動には、もってこいね」

「そうと決まれば、直ぐに発ちましょうか」

顔を見合わせると、三人は立ち上がる。その足取りは軽やかで、純粹な楽しみと期待が零れんばかりに醸されていた。

——鋼鉄の浮遊城は初めて好転の兆しを見せた。それは人々の胸に希望を宿し、勇気ある誰か、野心溢れる何者か。それらすべての止まっていた時が、今動き出したのだ。

その後、2層のどこかで巨大な岩をひたすら殴る三人の美形の姿があったとか、なかったとか。

## 日進月歩

——第一層攻略から、早くも5ヶ月近くが経過した。

一ヶ月で一層を攻略したことからもつと時間がかかるのかとも思われたが、やはり彼らも生粋のゲーマー。あらゆる面に於いて慣れてきており、着実に攻略階層を増やしていた。

そして5ヶ月もあれば、様々なことが起こった。

アスナがギルド《血盟騎士団》に入り着々と名を挙げていたり、今まで燻っていたプレイヤー、絶望していたプレイヤーが程度の差はあれ積極的に活動を始めていた。今最前線に立っているメンバーだけでは何れ無理が来るだろう。万が一の戦力の低下に備えるにしても、そうでなくとも、新しい前線プレイヤーが増えてきているのは事実だ。……当然、その中にはベデヴィエイールの言葉に奮い立たされた者もいる。

ドラゴンナイトブリゲード、アインクラッド解放隊、血盟騎士団  
D K B、A L S、K O B。

前からディアベル、キバオウ、ヒースクリフが率いる大手ギルドは、最早プレイヤーの中で知らぬものなど居らず、中層プレイヤーからは尊敬と羨望の視線を一挙に集めていた。

そう。集めていた。

25階層攻略時、他の2つのギルドに比べ旗印的存在のいないAL Sは一步格下……だというのがプレイヤーからの印象だった。それをリーダーのキバオウも分かっていたのだろう。

故にこそ、自分たちのギルドのみで25層ボスクォーターポイントという節目を乗り越えることで力を示そうとするのは自然な事だった。

……それが、悲劇を呼んだ。

功に焦った彼らは偽の情報掴まされ、間違った情報のままにフロアボスに挑んでしまったのだ。彼らとてこれまで最前線に立ち続けてきた熟練者達。これが並のボスならば被害も抑えようがあったのだろうが、4分の1地点としてこれまでのボスモンスターと比較にならない強さを持つていたのが災いした。

途中でベデイヴィエールらが割って入り、そのまま両ギルドも合流して、やつとのこと倒したのだが、ALSの被害は甚大だった。

最前線で張っていた彼らはほぼ全滅。キバオウを除いて両手にも満たない程のメンバーが生き残っていたが、ベデイヴィエールらの手出しが遅れていたら、それこそキバオウ一人のみが残されることになっただろう。

当然そんな有様ではギルドを続けていくこともできず、ALSは実質的に壊滅状態に陥ったのだった。

そして、それを乗り越えた26層にて、彼らが何を行っていたのかと言えは……。

「はあっ!!」

「ぜえあっ!」

影が交わる。鉄の打ち合う硬質な音が響き渡り、その度に地面にエフェクトが舞い上がり、目まぐるしく動く戦況は白熱する。

「そこです」

「っ……!」

大鎌の柄を回転させ、剣の軌道を反らしては行くが、次第にそれすら追いつかなくなり、次第に反撃の手数も減っていく。

これは不味いと察した大鎌使いは下から上へと克ちあげるような軌道で大鎌を振り、けれどその軌道に合わせた急接近に対処出来ない。

そして――。

「あっ」

大鎌を内側から掬い上げられ、無防備な腹部に三閃。決して見えない速度でもないのに、滑らかに撃ち込まれた剣に反応できなかった。

「……私の負け、ね」

「ええ、いい勝負でした」

大鎌の主、ミトのHPが半分に減り……。視界にデカデカと《LOSE》と書かれたホロウインドウが浮かび上がる。

場に張られていた特殊なフィールドが霧散し、互いのHPが元に戻る。

今行われていたのはS A O内に存在する三つのデュエルの内の一つ、《半減決着モード》による決闘だ。

《半減決着モード》はその名の通り互いにどちらかのHPが半分を過ぎたら勝敗が決まるシステム。デュエルには他に2つ《完全決着モード》、《初撃決着モード》もあるが、デュエルでHPが全損した場合そのまま死亡してしまう《完全決着モード》はデスゲームと化したS A O内ではまず選ばれない。

では《半減決着モード》はどうかと問われれば、これもまた行われていない。

何故なら、半分ギリギリまでHPを削り、万が一にも火力の高いソードスキルでも当たってしまえばそのまま全損してしまう可能性だつてあるのだ。これは同レベル帯であっても軽戦士と重戦士などのビルドの違いによつてはありえてしまい、過去にこの仕様を悪用して《犯罪者》<sup>オレンジ</sup>にならずにPKをした者もいるため避けられている。

よつて、現在一口にデュエルと言えば専ら《初撃決着モード》のこゝとを示している。

……のだが、今回行われたのは《半減決着モード》。万が一があり得てしまうそれを不用意に行うわけにはいかない。よつてある縛りを与えてこれを執り行つていた。

「前回の反省は活かせていましたが、そちらに注力するあまり積極性に欠けていましたね。証拠に、殆ど鎖鎌には変えていませんでした。仲間がいる状況や生き残る分には十分ですが、ミトの強みであるトリッキーな動きが活かされていません。特に、防御力を捨てたピーキーなスタイルの貴女では押し切られてしまうでしょう」

「…分かつてる。今回もありがとう。やっぱりソードスキルなしだと勝てる気がしないよ…」

それはソードスキルを使わないということ。魔法のないS A Oにおいて必殺技と呼べるそのシステムをあえて使用しないことで、仮にクリティカルヒットしたとしても命の危険はないに等しい。

更に、この決闘はもう一つの重要な要素を鍛えるために行われているのだ。S A Oはシステムの関係上、例え現実では持つことすら出来

ないような大斧だろうが達人のように振り回すことを可能としているが、その裏に、本人の剣技が重要なファクターとして入り込んでいるのだ。

ソードスキルは高火力でシステムが勝手に体を動かしてくれるが、その動作にはある程度の干渉が可能なのだ。システムの動きに合わせて自身もその剣技をなぞることで火力を上げたり、軌道を僅かに変更することが出来るのである。

そもソードスキルというのも硬直時間や一度放ったら止めるわけにはいかないという性質上、そう連発するものではない。勿論チャンスがあれば叩き込む方がよいが、全ての戦いがそうであるとは限らない。

やれるうちに、やれるだけのことをやっているに過ぎないのだ。これからもシステムのみに頼った戦闘では生き残れない。だがモンスター相手ではプログラムされた行動しかとれず命の危機もある。故に、このような小手先の技術を培うには、これが最適の方法なのである。

因みに、ミトのこれまでの戦績は0勝42敗である。トリスタンとベディヴィエールは互角の勝負を繰り返しているが、ミトはそのどちらにも1勝も出来ていない。

いくらリアルでの剣術の経験差というものがあつたとしても、SAOでも最上位にいると自負していたミトの自信はボロボロだ。

ソードスキル込みなら勝てるということでもないのは言わぬが花である。

「続けますか?」

「ううん、やめとく。色々と素材も集めたいからね」

立ち上がったミトは体を軽く動かすと、ぐっと伸びをすると、メニューを呼び出す。

ウィンドウを見ながら、必要な素材やマップ等の情報を整理する彼女にベディヴィエールも近づき、二人でその効率や作戦などを話し合っている。

纏まったのか、リストにメモ書きとしてそれらを次々と入力してい

く。しかし、その量はとても個人で扱う量ではない。

全員分の装備を一新する、という目的ならばいざしらず、その中には彼らの装備の要求素材ではないものも多く含まれている。

その理由は――

「それにしても、前線で戦いながらよくここまで熟練度あげれたわね……」

「きつと氣質が向いていたのでしようね」

スキル一覧に燦然と輝く『防具作成』のスキル。『鍛冶』スキルで必要なスキルの一つ。その名の通り素材を消費して防具を作ることが可能になるスキル。

アスナを置いて逃げ出したことと、ある出会いがきつかけでこの路も進み始めたが、これが全く馬鹿にできない。

戦うことは止めていないが、それでも防具というカテゴリに於いては現段階のプレイヤーメイドと比べても頭一つ抜けているだろう。

何せ、パーティを組んでいる三人は誰もがトップクラスのプレイヤー。偶にキリトやアスナ、エギルに風林火山なんかを巻き込んで素材を集めたりしているため熟練度も資金も潤沢だ。

因みに、作成した防具の中で使用しないものはエギルの店に卸して貰っている。大々的に名を売るようなことはしていないが、今ではその防具を目当てにエギルの元へ訪れるプレイヤーもいるのだとか。

当然、今の彼女たちの防具もミトの作品である。

「キリト辺りが聞いたら複雑な顔をするんでしょうね。彼、ソロプレイヤーのスキルとか戦闘用しか取ってないから」

「ですが攻略組の中にも戦闘向きでないスキルを所有している方もいらっしゃるんですよ」

身近な人物で言えばアスナやエギルだろう。アスナは『裁縫』を、エギルは商売用の『鑑定』系スキルなどだろうか。

ベデイヴィエールが不思議そうに言えば、ミトは大きく溜め息をついて言い放つ。

「そりゃあ、アスナ達は本職の熟練度が一番高いからね……！」

ここで、彼らの保有するスキルでそれぞれ最も習熟度の高いスキル



を羅列しよう。ベデイヴィエールは『野営』。ミトは『防具作成』。そしてトリスタンは『竖琴』。

はつきり言つて、戦う気がゼロの集団である。これがまた、ゲーム後半であるならば両立させることも不可能ではないだろうが、まだ前半も前半である現状でこれなのだ。

そのくせ、これでこのゲーム内でも上澄みの中の上澄みなのだからまったく巫山戯た話だ。

それを深刻なものだと理解していないベデイヴィエールに対して呆れを滲ませるミトだが、それもそこそこの付き合いで慣れたらしい。

話を切り替え、今回のレベリング兼素材集めに出立するためトリスタンにも声をかけようとして……。彼がこの場にいることが気がついた。

「トリスタンは？」

「…そういえば姿が見えませんか」

言われて初めて気がついたのか、ベデイヴィエールも同意して彼の部屋へと向かうが、反応はない。

「外へ出かけてるとか…？」

「……プレイヤーネーム指定のメッセージが届きませんね。だがパーティメッセージ自体は送信出来る…と。ダンジョンにいるのか……」

「この階層にいないか、ね。彼ならどうせ大丈夫だろうけど、私達に何も言わずに出ていくって…。前から思ってたけど、一体いつも何考えてるのかしら」

やれやれと過去の奇行を思い返したため息一つ。中々毒を吐くが、これも既に何回目だか。

一週間前など、戦闘中急に援護が途絶えたと思ったら、木に寄りかかって爆睡していたこともあったのだ。何とかそこは切り抜けたが、まさか己の命の掛かっているゲームの戦闘中に睡眠する輩がいるとは誰も思わないだろう。

「……その説はすみませんでした。これも普段から気にかけていれば……！」

「いや、いいよ。もう過ぎたことだし……。……それじゃあ、取りあえず二人でやろつか。パーティ間ならメッセージは送れるし……」

慣れた様子で謝るベディヴィエールを不憫に思いつつ、トリスタンは抜きで本来の目的を遂行するらしい。多少効率は落ちるかもしれないが、これでも安定して狩り続けることは出来る。後は、そこに他のプレイヤーが来るまでにどれほどドロップするかの勝負だ。

「まずは南エリアの——」

標的を言葉にして、二人は駆け足で狩り場へと向かう。

結局、その日は運が良かったのかかなりの素材をあつめることは出来た。しかし、終ぞトリスタンが合流することはなく、就寝前にふらっと姿を表したただけであった。